玉井幸助著

更級日記錯簡考

育英書院發行

本書が天覽ならびに台覽を賜はり、なほ柳原二位御局から特に御沙汰を戴いて一本を献ずるの光榮に浴しました事は、著者の感激に堪へぬところでございます。

本書刊行の後引續き日本文學大系・日本古典全集の如き廣く流布する出版物が公にせられ、何れもそれに收める更級日記を、本書によつて正しい姿として世に廣めることとなりました。ここに本書の刊行が徒爾でなかつたことを思ひ、本書の刊行を助けられた啓明會の厚意に對して一層の感謝を捧げる次第であります。

再版にあたり、初版の誤謬數點を訂正しました。この事をここに附記しておきます。

大正十四年十二月十五日

著者謹識

更級日記錯簡考序

更級日記には錯簡があつて、昔から色々な學者が研究して見たが、どうしても解らなかつた。どうしても解らないものとあきらめられてゐた位であつたが、今度御物本の發見によつて、すつかり明白になつて、誰にでも讀めるやうになつてきた。それは實に學問界の一大驚異といはねばならぬ。

玉井君は熱心な教育家であると共に、又極めて眞摯な研究者である。君の多年の勞苦はこの發見によつて始めて酬

いられたのである。日本文學史のあらん限り、玉井君の功勞は感謝されるであらう。今君の研究の世に公にされる事を聞いて、私は國家の爲にも、玉井君の爲にも歡喜に堪へぬ次第である。

大正十四年五月十三日

芳賀矢一しるす

緒言

本書は更級日記錯簡の次第を說明し、且、之を復舊して更級日記の正しい姿を世に紹介する目的で公にしたものである。

更級日記は初めて世に流布した時から既に錯簡になつてゐた。今日世に存する寫本及び板本で、錯簡ならぬものは一部もない。

本書が更級日記の錯簡を正確に說明し得たのは、錯簡の根源たる御物本定家卿筆更級日記を證本としたからである。しかも著者が此の貴い證本を拜觀し得たのは、文學博士佐佐木信綱先生の恩惠によるものである。なほ錯簡の考究についても、同博士から有益な助言を戴いたことが少くない。若し本書

が國文學上多少の貢獻をなし得るならば、それは佐佐木博士の賜物といはなければならぬ。

本書の著述に關して文學博士松井簡治先生から懇篤な指導を戴いたことは深く感謝するところである。又文學博士芳賀矢一先生が、本書に序文を下さつたことは誠に光榮とするところであるが、そのおほめの言葉は、著者にとつて甚だ過分なものといはなければならぬ。たゞ、今後の努力によつて、この御言葉の萬一に對へる外はないのである。

本書の著述に際し、宮內省圖書寮・內閣文庫・東京帝國大學史料編纂掛・前田侯爵家文庫・南葵文庫・彰考館文庫・靜嘉堂文庫から、その貴重な藏書を閲覽することについて、多大の好意を受けたことは著者の深く感謝するところである。

本書第一章中の大部分は、本書の目的から見て寧ろ削除すべきものかも知れぬ。たゞ更級日記を讀まぬ人々に、この國文學上特殊の價値を有する作品を紹介したい爲に書き加へた次第である。

本書第四章中に載せた更級日記の本文は、嚴密な校正を施して御物本と一字の誤なきを期した。しかし學者の爲に證本を提供するには、御物本を其のまゝ寫眞版によつて複製するが最も確實である。よつて宮内省より特に允許を得て、別に佐佐木博士と共に御物本更級日記玻璃版本を發行した。こゝに此の事を附記しておく。

更級日記といふ文字については、後の寫本類に更科日記と書いたものもあり、更級記と略稱したものもあり、さらしなの日記・さらしなの記など記したもの

もある。今は御物本の外題に、定家卿の筆で更級日記と書かれたものに從ふ。

大正十四年五月十四日　著者識

御物本更級日記

定家卿筆

御箱に納められたる目録二葉

御物本更級日記表紙

外題定家卿筆

錯簡第一

定家卿筆

御本二十枚目裏

同二十一枚目裏
（正シクハ五十四枚目裏）

錯簡第二

定家卿筆

御本二十二枚目裏
(正シハク五十五枚目裏)

同二十三枚目表
(正シクハ五十一枚目表)

定家卿筆

錯簡第三

御本二十五枚目裏
（正シクハ五十三枚目裏）

同二十六枚目表
（正シクハ八十七枚目表）

錯簡第四

定家卿筆

御本二十八枚目裏
(正シク、十六枚目裏)

同二十九枚目表
(正シク、五十六枚目表)

錯簡第五

定家卿筆

御本三十枚目裏
（正シクハ五十七枚目裏）

同三十一枚目表
（正シクハ四十一枚目裏）

錯簡第六

定家卿筆

御本四十枚目裏
(正シクハ五十枚目裏)

同四十一枚目表
(正シクハ二十一枚目表)

錯簡第七

定家卿筆

御本六十枚目裏
(正シクハ四十枚目裏)

同六十一枚目表

目次

附録

圖版目次

更級日記錯簡考

玉井幸助著

第一章　更級日記の概觀

第一節　更級日記の特色

更級日記の作者は幻想の世界に住んだ。彼女は又自我意識の强い人であつた。此の二つの特色ある性格は、更級日記の中に著しく表現せられて、我が國文學の流に一道の新潮を注いだ。

我等は記紀の文學に原始民族の素樸な心を感ずる事ができる。それは物と我とが一つの生命に包容せられた姿である、大生命の力强い活動である。併し人性必然の展開は、我が民族を永く此の境地に止めておかなかつた。次い

で生ずるものは個人の自覺である、自己は物から分離して對立するやうになつた。こゝに生れたのが萬葉集の抒情詩である。離れた心が他に向つて求める情、それは萬葉の主調といへる。併し萬葉の抒情詩は多く刹那の情の表現である。その情の湧き起つた特殊の事物に卽して歌はれたのが萬葉の歌である。從つて其の歌には少年の無邪氣さを思はせられ、力強い眞實味を感じさせられる。が、國民はこゝにも永く止ることはできなかつた。情と共に動いた萬葉時代の心境は、更に進んで情を客觀的に眺めるやうになつた。刹那に生滅する情をとつて之に存續性を與へ、いはゆる情の歴史を編んだのが平安朝の物語である。源氏物語はその代表的作品といへる。

物我混融の原始的心境が自己に目ざめ、情のまに／＼自我を表現した文學が情の歴史を編むまでに展開して來た。しかし、この時までの文學は、何れも現實の世界を離れることができなかつた。源氏物語が描いた情の世界は人間を離れて存在する世界ではない、人間生活の中から、情趣生活を抽象して、それを濃く彩どつたものである。そしてその後に現はれた多くの物語も、みなこ

の境地を脱することができなかつた。

尤も萬葉の詩人にも常世の國の傳說浦島の物語を詠じた作はある。しかし「とこよべにすむべきものをつるぎたち己が心からおぞやこのきみ」と歌つた萬葉詩人の目には、常世の國が永遠の靈の世界として映ずることなく、單に人間界の歡樂の象徵として見られたに過ぎぬ。又初期の物語、竹取の中にも、月の世界が題材にとられたけれど、それも單に物語の一部を構成したに止まるだけで、竹取の作者には月宮殿を永遠の靈界と觀照する深い心はなかつた。未知の世界、永遠の世界に對するあこがれの心が、一貫して其の作品に表はれたのは、我が更級日記を以て嚆矢とするのである。

思へば、彼女の如く自我意識の强い人で、しかも自我を以て環境を統一する力を所有しなかつたとすれば、そこに超自然的存在を認めて安住せずにはゐられなかつたわけである。更級日記の作者は社會的には力の弱い女性である。彼女が、いかに强烈な自我の所有者であつたとしても、自我中心の實生活を營むことはできぬ。彼女は當然、心の中に幻の世界を作らねばならなかつた。

一面また當時の時代を考察しても、此の時代に更級日記の如き作品が現はれたのは自然の事と思はれる。藤原氏の榮華は道長に至つて絶頂に達した。絶頂は崩壞の前兆である。「この世をば我が世とぞ思ふ」とまで得意であつた御堂殿の内心深く、既に一點の空虚が萠してゐたと觀るのは、必ずしも無理な推測ではあるまい。國々から「一日に五六百人千人の夫ども」を奉つて造りみがいた法成寺の建立も、此の内心の空虚をまぎらす爲の所作であつたと考へれば考へられぬこともない。太平無事、徒らに外形の榮華を積み重ねて、精神的には何等の展開もなく、單調のどん底に行きつまつた此の時代に、御堂建立の如き御祭騒を見せられたとすれば、心ある者はます〳〵外的生活のはかなさを感じ、おぼろげながらも永遠の世界を思慕する情を生じたであらう。更級日記は、かゝる時代精神の産物とも見ることができる。

更級日記の作者は、强い自我の所有者であつたと共に、一面またやさしい感情の所有者であつた。その繼母を慕ひ、姉の殘した孤兒を愛撫し、殊に老衰した父母に仕へる心がらのやさしさは、彼女の性格をよく物語つてゐる。自我に

强い彼女の心は、此のやさしい感情にほだされてをり〳〵に分裂する。しかし彼女は、その分裂した心持を、一時のあきらめで蔽ひ去らうとか、社會的の交際にまぎらして輕く流し去らうとかするやうな不徹底な態度をとらなかつた。彼女は、この分裂する心を、彼女自らが創造した夢幻の世界に繋いで、そこに統一を見出してゐる。

夢幻世界の創造、これ實に我が國文學の流の中に、全く新しい潮を注ぎ入れたものである。こゝに發した一脈の新潮は、西行となり長明となり法然・親鸞となり、更に流れては幻住庵の芭蕉となつた。その分流は又、今昔物語の如き異國趣味の文學となつて現はれた。見ぬ外國に對する憧憬の情は、幻想世界にあこがれる心と一致する。更級日記の作者は、別に「みつのはまゝつ」といふ小說を書いてゐるが、それに描かれた支那の情景は地理的知識に基づくものではなく、作者の夢想から成つたものである。

かやうに考へて見ると、更級日記は、我が國文學史の上に、特異の地位を占める重要な作品であると云はざるを得ない。次に項を改めて其の梗概を記さう

と思ふ。

更級日記內容の四大區分

第二節　更級日記の梗槪

更級日記は今から約九百年前に書かれたものである。作者が十三の年の九月三日に、父・繼母・兄・姉等の一族、及び數人の從者と共に、父の任國であつた上總の國を出立して、長い東海道の旅に上る事から筆を起し、京都に着いて後の家庭生活、宮仕をした折のことども、結婚後の感想などを敍して、五十一歲で夫におくれて淋しい寡居の生活に入つたところで筆を止めてゐる。その最後の一節は、夫の死んだ翌年の事と思はれるが、さうとすれば、此の日記は後一條天皇の寬仁四年(一〇二〇)から、後冷泉天皇の康平二年(一〇五九)に至る四十年間の思ひ出の記である。日記とはいつても、その日その日に筆を執つたものではなく、老後に記憶を辿つて書いたものである。日記の中には八十八首の和歌が挿んであるが、思ふに作者は、をり〳〵に詠んだ歌、又は他人と贈答した歌などから記憶の緒を得て、此の日記を纏めたものであらう。それ故この日記

は、作者の歌を、その詠み出した時の順序に排列して、前後に長い詞書を附けたものと見ることができる。

日記の内容は、作者の思想と行動との歴史であつて、特にこれを作者の心の記錄として見る時に深い興味を覺える。彼女は幼少の時から物語に心を奪はれてゐた。「あづまぢのみちのはてよりもなほ奥つかた」なる上總の片田舍へ父に伴はれて下つたのは、彼女が十歲の時(御物本、定家奥書。以下年齡等を考勘した出處については一々註せぬ。第四節の年表を參照せられたい)であつた。淋しい數年間の田舍住ひ、そのをり〳〵に姉や繼母が片はし語る光源氏の物語を聞いて、魂は既に美の國の虜となつた。早く都へ上りたい、そして數々の物語を心ゆくまで讀みたいと願つた。此の熱望は幼い彼女の胸に一ぱいであつた。かくて彼女は、等身の藥師如來を作り奉つて一間に据ゑ、上京の日の一日も早かれと祈願をこめた。更級日記は先づかやうな心の歷史に筆を起してゐる。

願はかなつて、いよ〳〵都へ上る日が來た。それは寬仁四年、作者が十三の年

の九月三日である。今ならば一日で行ける京都へ、作者はあこがれの心をかかへて、九十一日といふ長い月日の旅をつづけた。旅が終つて落ちついた家は、東の京の片ほとり、都のうちとも思はれぬほど老樹の生ひ茂つた淋しい處にあつた。人々は旅の勞で暫く何事も手につかぬといふ中から、彼女は矢も楯もたまらぬ心で「物語もとめて見せよ見せよ」と母をせがんだ。母はさる親戚の人に請うて珍しい物語を借りてくれた。彼女は餘りの嬉しさに、うつし心もなく、夜晝それに讀み耽つた。これを讀んだ後、物語を求める心は益々烈しくなつたけれど、思ふまゝに得ることは出來ぬ。寢ては思ひさめては願ふ幾月日を經て、或日田舍から上つたをばの許へ訪ねて行くと、をばはみやげにと云つて、源氏物語五十餘巻箱入のまゝ、その外、在中將・とほぎみ・せりかは・しらら・あさうづなどいふ物語を一袋くれた。それを貰つて歸る彼女の心は、全く、たとへやうのない嬉しさであつた。「心もとなく思ふ源氏を、一の巻よりして、人もまじらず、几帳のうちに打臥して引出でつゝ見るこゝち、后の位も何にかはせむ。晝は日ぐらし、夜は目のさめたるかぎり、火を近くともして、これを見

るよりほかのこと」もなかつたと彼女は記してゐる。

かく物語を愛する心は、彼女の足を地の世界から引離してしまつた。彼女は當時の女子が普通の修養としてゐた讀經などを習はうともせず、ひたすら物語のことばかり思ひつづけて、はては自分を物語中の人物に作りあげてしまつた。――自分はまだ美しくはない、併し盛の年ごろになつたら、姿も非常に美しく、髮も大層長くなるであらう、丁度、あの源氏の君に愛された夕顏、宇治の大將に思はれた浮舟の女君などのやうに――といふ夢のやうな空想に耽つてゐた。又或時は、光源氏のやうな理想的な人を、年に一度でも通はせ、自分は浮舟の女君のやうに淋しい山里にかくしすゑられて、花紅葉月雪を眺めて、心細げに住みくらし、結構な御文の時々來るのを待ち見る――といふが如き、甘い空想の世界に我が身を置いた。

こゝに一つ注意すべきは、彼女が物語の中から選んで我が身になぞらへた女性が、浮舟の女君といふ淋しい心の持主であつた事である。彼女の欲する所は現實界の花やかな生活ではなく、淸く靜かな理想界の思慕であつた。彼女

は赤い花に目を背けて、白い光を仰いだ。こゝに彼女の特異性があり、更級日記が國文學史に新しい展開を齎す機縁がある。

かやうに、物語に心を奪はれて、身を小説中に置いた彼女も、遂に一たび現實に目ざめねばならぬ時期に逢着した。空想の道を歩いて我知らず月日を送るうちに、盛の年も過ぎてしまつた。三十二歳の時、後朱雀天皇の皇女祐子内親王に宮仕して、暫く殿中に立ちまじる身となつたが、その間に藏人源資通と極めて淡泊な風流の交際をしたくらゐが後の思出になつただけで、少女時代に描いた幻は實現しさうな機會さへなかつた。かつては「物語にある光源氏のやうにおはせん人を、年に一たびも通はし奉り」と思ひ、浮舟の女君のやうに山里にかくしすゑられて」と空想した彼女も、今は「光源氏ばかりの人は此の世におはしけりやは。薫大將の、宇治にかくしすゑ給ふべきもなき世なり」といふさとりを開いた。

其の後彼女は橘俊通に嫁して人の母となつた。我が心をゆるさんは光源氏のやうな人と夢みてゐた空想兒は、出世の極が信濃守といふ一地方官で世を

終つた俊通をば、我が頼む人」とあがめて、ひたすら其の人の官位昇進を祈るやうな實際的の人に變つた。昔は「物語のある限り見せ給へ」と佛に祈つた人が、今は「ひとへに豐かなるいきほひになりて、ふたばの人をも思ふさまにかしづきおほしたて、我が身も御倉の山につみあまるばかりにて、後の世までの事をも思はむと思ひはげみて寺まうでをするやうな人になつた。昔の空想に比べて見れば、天地の差もたゞならぬ今の境遇を「何事も心にかなはぬ事もなきまゝに」と滿足するほどの良妻賢母となつた。

夢幻から現實への變化は、作者の心のあとをたどる者にとつて興味ある事がらであるが、併しそれは、要するに一時的•表面的の現象であつて、彼女の心が根柢から變化したのではなかつた。彼女が結婚以後に於て描いた現實的希望も遂に滿される事なく、信濃守となつて赴任した夫俊通は、翌年歸京すると間もなく發病して、はかなく此の世を去つてしまつた。作者の心は再び夢幻世界へ呼びもどされた。しかもその世界は、少女時代に描いた物語の世界に比べると遙かに本質的なもの、卽ち宗教的なものであつた。彼女は天喜三年十

月十三日の夜の夢に、金色に光りかゞやく彌陀如來が自分を迎へに御出でになつた事を夢みた。これは夫俊通の歿前三年の事であるが、その歿後に至つて、此の夢は彼女をして未來の世界を信ぜしめ、彼女の心を永遠の國へ導いてゐる。

更級日記を作者の心の歴史として見る時、以上の如き梗概が讀者の心に殘る。次に作者の性格をうかがふに足るべき二三の記事について記して見よう。

傳說に對する記事

傳說に對する記事。いつの世の事とも知らぬ遠い昔の傳說を愛するといふ心は、夢幻世界にあこがれる心と通じる所がある。作者は傳說に興味を持つた。その東海道の旅の中に、三ところまでこれを書いてゐる。その一つは下總の國の「まのゝてう」の傳說である。池田の宿を立つて暫く行くと大きな川が流れてゐた。川の中に太い柱が四本立つてゐる。土地の人の話によると、昔こゝに「まのゝてう」といふ長者が住んで千匹萬匹の布を織らせ晒させて豪奢なくらしをしてゐた。然るにそれも槿花一朝の榮、しかも世は滄桑の變を免かれず、今はその屋敷跡が原となり川となつて、僅かに門の柱が四本だけ川

の中に殘つてゐるといふのである。

次の一つは竹芝寺の傳說である。作者の一行は旅に出てから二十日に近い日數を重ねた。今は武藏の國である。馬に乘つて弓を持つた一行の者の、弓の末も見えぬくらゐ高く生ひ茂つた葦原を分けて行くと一宇の古い寺があつた。一行はそこに休んで、薄寒い秋の日に照らされる淋しい景色を眺めた。武藏野の、秋も早や末になつて、なつかしいゆかりの色の紫も、花一つ見せぬ枯れ〴〵な廣野の向ふに、礎ばかり殘る由緒ありげな址が見える。作者はこゝで、武藏の衛士と姫宮との昔語り、あのなつかしい竹芝傳說を聞いたのである。

今一つは、富士の神々の話で、日記の中には、土地の人の實驗談として載せられてあるが、話は全然傳說的のものである。作者の一行が富士川の岸に着いた時、土地の老人が出て來て、富士の山には神々が御住みになるといふ不思議な話をしてきかせた。

作者が傳說を愛した事は、その性格を窺ふ上に興味ある事であるが、更に又この日記の中に夢の話の多い事も、作者の性格を物語るものといはなければな

らぬ。日記の中には夢に關する記載が十一個處見えてゐるが、そのうちで作者自身の見た夢は次の九つである。

一、作者が源氏物語を耽讀して、世間なみの修養などに心を向けようともしなかつた頃、夢に黄なる袈裟を着た僧が現はれて、「法華經五卷をとくならへ」といつた。併し作者は、そんな事に頓着せず、やはり物語にのみ耽つてゐた。

二、或年の彼岸に、母と共に淸水の觀音にこもると、その夜の夢に、本堂の御佛の前にめぐらした犬ふせぎの中に、靑い織物の法衣をつけた僧が現はれた。頭には錦の頭巾をかぶり、足には錦の靴をはいてゐる。一見此の寺の別當と思はれる尊い樣子であつたが、作者の傍へ進んで來て、「ゆくさきのあはれも知らず、つまらぬ事ばかり考へてゐる女だ」と、不機嫌な顏で小言をいつて、御帳の中へ入つてしまつた。併し作者は、相變らず、そんな事を氣にとめないで過したと書いてゐる。

この二つの夢は、何れも作者が物語に心を奪はれてゐたころのものである。「法華經をならへ」と言はれたのは、「眞面目な修養をせよ」とたしなめられた事に

なる。物語の世界へあこがれてゆく作者の心も、全く地を離れてしまふ事が出來ず、一面此の世界に引付けられてゐた事が察せられる。

三、これも少女時代の夢であるが「一品の宮樣の御料に、六角堂に遣水を作るのです」と誰かがいふ。「それは何の事ですか」と作者が問ひかへすと、「天照大神を御祈りなさい」といふ。と思ふと目がさめた。

是はとりとめのない夢である。たゞ一點がぱつと光つて、あとさきの眞暗な、いかにも夢らしい夢である。併し作者は此の夢に對して、例の激しい空想を働かしたやうである。一品の宮とは三條天皇の皇女禎子内親王の事で、御母は藤原道長の二女、世に並びなき佳人でいらせられ、當時は皇太后宮として重んじられた御方である。一品の宮の花やかな御住居は、若い作者の心に描かれた美の國である。空想的な作者は此の夢を見て以來、自分は一品の宮に特別な關係のある者のやうな氣もちがして、朝夕その御所を眺めやりながら、そこをば、わが住む宿のやうに懷しく感じた。春ごとに此の一品の宮を思ひやりつゝ、「咲くと待ち散りぬとなげく春はたゞわが宿顏に花を見るかな」といふ

のは、此のころ詠んだ歌である。
四、作者もだん〳〵年をとつて、世の中は物語のやうなものでないといふ事が分りかけて來た。兩親はもう老境に達したけれど、家の運は開けさうにも見えぬ。老い衰へた兩親がしほ〳〵としてゐる有樣を見ると、何となく氣の毒な思がする。その頃の夢、
淸水の御堂にこもつてゐると、別當と思はれる人が出て來て、「そなたは先の世に此の寺の佛師であつた。此の寺で澤山の佛像を作つた功德によつて、先の世よりも身分の高い家に生れて出たのだ。此の寺の東に安置されておいでになる丈六の佛樣は、そなたが作つたものであるが、そなたはあれに箔をおし始めて死んだ」といふ。「まあ、さやうでございますか。それでは其の佛樣に箔をおしませう」といふと、「いや、そなたが死んだから、別な人が箔をおして、もう供養もすんだ」といふかと思ふと目がさめた。
五、或年の冬、雪の烈しく降る中を、我が家の爲、子供の爲に石山寺へ御參りに行つた。その夜御堂に籠つてゐると、夜は森々と更け渡つて、山風が恐しく吹

く。少しとろ〳〵と眠つたと思ふと、どこからともなく、「中堂から御香をいたゞいた。早くあすこへ告げてやれ」といふ聲ばかりが聞えて、ふと目がさめた。これはきつとよい夢にちがひないと思つて、再び一心に御參りをして夜をあかした。

六、又或年、初瀨へ御參りに行く途中で、山邊といふ處の寺に泊つて、大そう勞れてゐたが、經を少し誦んで寢ると、身分の高い御方と見える美しい婦人が向ふに見える。そのそばへ近づいて行くと、風がひどく吹いてゐる。婦人は作者を見るとにつこり笑つて、「何しに來ました」と問はれる。「どうして參らずにゐられませう」と申上げると、「そなたは御所へあがる事になつてゐる。博士の命婦によく話しておきませう」と仰しやつたと思ふと目がさめた。

七、山邊で前の夢を見、それから初瀨寺について三日間御籠りをして、三日目の夜あけ方に、いよ〳〵今日は歸らうといふので少しとろ〳〵と眠ると、御堂の方で「それ、稻荷から下さるしるしの杉」といふ聲がして、何か投出されたと思ふと目がさめた。

以上五・六・七の三つの夢は、何れも作者が結婚生活に入つてからのもので、少女時代の夢に比べると聊か趣が異なつて、家庭の幸福を願ふ心に關聯するところがあるやうに思はれる。

八、これも結婚以後の夢である。昔宮仕へをした頃に心の奥を語り合つた親しい友が、今は筑紫へ下つてゐる。或月のよい晩、その友を懐しく思ひながら寢ると、身は昔にかへつて、御殿で友としみ〴〵話をしてゐる。と思ふと目がさめた。月も山の端近く傾いてゐる。「夢さめてねざめのとこの浮くばかり戀ひきと告げよ西へ行く月」は此の時の歌である。

九、これは前にもちよつと述べた彌陀來迎の夢である。天喜三年十月十三日の夜の事だといふから、作者が四十八歳の時であるが、その後數年、夫に別れて我が身の上をつく〴〵と思ひながら、作者はこの夢のことを次のやうに記してゐる。

此の世で願つた事は何一つかなはなかつた。しかし命はつらいながらも絶えないで長らへてゐる。かう不運な身では、後の世も定めし思ふにまか

せぬ事であらうと、心もとないやうに思はれるが、たゞ一つ頼むことがある。天喜三年十月十三日の夜の夢に、居間の庭前に阿彌陀如來が御立ちになつた。はつきりとは御見えにならず、霧をひとへ隔てたやうに、ぼうと透いて御見えになるのを、じつと目をとめて見奉ると、蓮華の座が土から三四尺の高さに浮上つて、その上に御たけ六尺ばかりの佛が金色に光りかゞやき、片方の御手は廣げたやうにし、いま片方では印を作つておいでになる。その御姿は他人の目には御見えにならず、自分にだけ御見えになる。何となく怖しい心もちがして、近くも進まずにゐると、「そんなら、此の度は歸つて、また迎へに來よう」と仰せになつた御聲が、自分の耳にだけはつきり聞えて、外の人には聞えない。と思ふと目がさめて、十四日の夜あけがたであつた。此の夢一つを、自分は後の世の頼みにしてゐる。

以上の外、なほ更級日記には夢の話が二つある。一つは作者の父が常陸に赴任して不在であつた頃、母が一尺の鏡を作つて、作者の前途を示現していたゞく爲に、或僧に頼んで此の鏡を初瀨寺へ奉納させた時、僧が初瀨の御堂で見た

夢である。僧は初瀬寺に三日籠つて歸つて來た。そして次の話をした。御本堂で御參りをしながら眠りますと、御帳の方から大そうけだかく美しい婦人が、立派に着かざつた御姿で、奉納した鏡を手に持つて私の方へ御出でになりました。そして「この鏡には手紙が添へてあるか」と御問ひになりますから、「いゝえ、別に手紙はございません」と申上げますと、「それはをかしい。手紙を添へるべきだのに」と仰しやつて、「それ、此の鏡のこちらを御覽、これはまことに悲しい事だ」と仰しやつて、さめ〴〵と御泣きになる。見ると鏡の面には、泣き伏してゐる女の姿が映つてゐました。それから「こちらを御覽」と仰しやるので、今片方の面を見ますと、立派な御殿に靑々とした御簾がかけ渡され、几帳の下から美しい着物がこぼれ出てゐます。御庭は丁度梅櫻の花ざかり、鶯が面白く囀つて枝から枝へ飛んでゐます。婦人はそれを私に御見せになつて、「これ見ればうれし」と仰しやつたと思ふと、ふと目がさめました。

今一つは作者の姉が見た夢で、姉妹二人がかはいがつて飼つておいた猫が、夢

作者の姉の幻想的性格

で「自分は侍從大納言(藤原行成)の娘の生れがはりだ」と告げる極めて神秘的なものである。一たい作者の姉といふ人も、作者と同じやうな性格の人であつたと見えて、日記の一節に、或年の七月十三日、月の照りかゞやく晩に、皆人も寢しづまつた夜半頃、姉妹二人縁に出て月を眺めてゐると、姉がだしぬけに「たゞ今私が、空へ飛び失せてしまつたらどうだらう」と幻想的なことをいひだした話が書いてある。

自我の固執

傳說を好み物語を愛し、夢と現實の境を認めぬやうな作者は、又一面に於て强い自我の所有者であつた。彼女は自分の魂をしつかりつかんで、それを幻想の世界に置いたのである。無自覺に夢の世を終つた人ではない。それであればこそ、更級日記のやうな特色ある文學を殘すことができたのである。彼女が自我に强かつた事は、夢で度々坊さんにたしなめられて、「まじめな修養をせよ」といはれた場合に、いつもそんな事を心にかけないで、やはり物語に耽つてゐた事を述べてゐるのでも分る。殊に、次にあげる二つの記載は、明瞭にこの性格を示すものである。

一つは作者が宮づかへをしてゐた頃の感想であるが、彼女は宮に於て重く用ひられるといふほどの境遇ではなかつた。それについて作者は、

なり／＼さし出づるにも、馴れたる人は、こよなく何事につけてもありつき顔に、我はいとわかうどにあるべきにもあらず、又おとなにせらるべきおぼえもなく、時々のまらうどに、さしはなたれて、すゞろなるやうなれどひとへにそなた一つを頼むべきならねば、我よりまさる人あるも、うらやましくもあらず云々。

といつてゐる。彼女は自らの生きる世界を自覺してゐたから、宮づかへを出世の階段にしようと身を碎いて、魂を殺すやうな氣にはならなかつたのである。

次の一つは、結婚以後の事であるが、後冷泉天皇の大嘗會御禊の日、田舍の人さへ京都へ出て來て、そのにぎやかな行列を見物しようと大騒ぎをしてゐるのに、彼女は京都を後にして初瀨へ御參りに出かけた。周圍の人々は、「御一代一度の見物で、田舍の人さへわざ／＼見に來るものを、月日も多からうに、其の日

京都を出かけるとは氣ちがひじみた事ではないか。後の世の物笑ひにもなる」といつて止めるが、彼女は、そんな事に頓着せず、朝早く京都を出て初瀨へ下つた。田舍から見物に上る者たちが、水の流れるやうに京都へ入つて來る。淨衣姿をした作者の一行は、その人々をこぎわけるやうにして下つて行く。誰もかも目を見張つて、「今日といふ日に寺參りに出かけるとは、よく〳〵變つた人もあるものだ」と笑ひ合つた。作者の自我は、萬人の嘲笑を後にして、ひとり初瀨へ向つたのである。

旅行に關する記事

以上更級日記の梗概として述べた事は、すべて作者の一身に關する事がらである。元より更級日記は、作者の自敍傳ともいふべき作品であるから、その梗概としては大體これ以上述べる必要はないが、此の日記の中には、又、當時の旅行の有樣を知り得る面白い個處が幾つもあるから、次に之を抄出して此の節を終らうと思ふ。一から五までは何れも作者が京都へ上るをりの旅中の事である。

一、同じ月(寛仁四年九月)の十五日、雨かきくらし降るに境を出でて、下總の國

いかたといふ處にとまりぬ。庵なども浮きぬばかりに雨ふりなどすれば、おそろしくていもねられず。

二、乳母なる人は、男などもなくなして、境(下總と武藏との)にて子うみたりしかば、はなれて別にのぼる。いと戀しければ、いかまほしく思ふに、せうとなる人抱きてゐていきたり。皆人はかりそめのかりやなどいへど、風すくまじく引渡しなどしたるに、これは男なども添はねば、いと手はなちに、あら〳〵しげにて、とまといふものを一重うちふきたれば、月殘りなくさし入りたるに、紅のきぬ上に着て、うちなやみて臥したる、月影、さやうの人には、こよなくすきて、いと白く淸げにて、めづらしと思ひてかきなでつゝうち泣くを、いとあはれに見すてがたく思へど、いそぎゐていかるゝ心ち、いとあかずわりなし。おもかげに覺えて悲しければ、月の興もおぼえず、くんじ臥しぬ。

人里離れた野の中に庵を結んで旅寢をする。殊に、さういふ淋しい庵の中で、一人御產をして一行におくれる乳母もあつたのである。

三、今は武藏の國になりぬ。ことにをかしき處も見えず。濱も砂子白くなどもなく、こひぢのやうにて、むらさき生ふと聞く野も、蘆・荻のみ高くおひて、馬に乘りて弓もたる末見えぬまで、高くおひしげりて、中をわけ行くに、竹芝といふ寺あり。

竹芝寺の址は東京市芝區三田臺町の濟海寺である。今は人で一ぱいになつてゐる東京が、九百年前には馬に乘つた者の弓の末が隱れる程の深い蘆原荻原であつた。

四、足柄山といふは四五日かねておそろしげに暗がりわたれり。やう〳〵人立つ麓のほどだに、空のけしきはか〴〵しくも見えず。えもいはず茂りわたりて、いとおそろしげなり。麓にやどりたるに、月もなく暗き夜の、闇にまどふやうなるに、あそび三人、いづくよりともなく出できたり。五十ばかりなる一人、二十ばかりなる、十四五なるとあり。庵の前に傘をさせてすゑたり。をのこども火をともして見れば、昔こはたといひけむが孫といふ。髮いと長く、額いとよくかゝりて、色白くきたなげなくて、さ

てもありぬべき下仕などにてもありぬべしなど、人々あはれがるに、聲すべて似るものなく、空にすみのぼりてめでたく歌をうたふ。人々いみじうあはれがりて、けぢかくて、人々もて興ずるに、「西國のあそびはえかゝらじ」などいふをきゝて、「なにはわたりにくらぶれば」とめでたく歌ひたり。見る目のいときたなげなきに、聲さへ似るものなく歌ひて、さばかりおそろしげなる山中に立ちてゆくを、人々あかず思ひて皆泣くを、幼きこゝちには、ましてこのやどりをたゝむ事さへあかずおぼゆ。

五、美濃の國になる境に、すのまたといふわたりして、のがみといふ處につきぬ。そこに、あゝそびども出で來て、夜ひとよ歌うたふにも、足柄なりし思ひ出でられて、あはれに戀しきこと限なし。

次のは作者の結婚以後の旅である。

六、さるべきやうありて、秋頃和泉に下るに、淀といふよりして道の程のをかしうあはれなる事いひ盡すべうもあらず。高濱といふ處にとゞまりたる夜、いと暗きに、夜いとうふけて、舟のかぢの音聞ゆ。とふなれば、あゝそび

の來たるなりけり。人々興じて、舟にさしつけさせたり。遠き火の光に、單衣の袖長やかに、扇さしかくして、歌うたひたる、いとあはれに見ゆ。

遊女の事は更級日記の中に以上四・五・六にあげた如く三ところ見えてゐる。峠の麓や、海川の渡津などにゐて旅人を慰めた遊女等の俤が偲ばれる。

七、二むらの山（三河國額田郡二村山）の中にとまりたる夜、大きなる柿の木の下に庵を作りたれば、夜ひとよ、庵の上に柿の落ちかゝりたるを、人々ひろひなどす。

これも作者が京都へ上る折の事であるが、山中に庵を結んで旅寢すれば、庵の上に柿が落ちかゝつて眠られぬ。皆で外へ出てそれをひろふ。今から思へば、まるで御伽話のやうな氣もちがする。

次の三つは、初瀨へ參籠した折の旅である。

八、贄野の池（山城國綴喜郡）のほとりへ行きつきたるほど、日は山の端にかゝりにたり。「今は宿とれ」とて、人々あかれて宿もとむるところ、はしたにて、「いとあやしげなるげすの小家なむある」といふに、「いかゞはせむ」とて、そこ

に宿りぬ。皆人々京にまかりぬとて、あやしのをのこ二人ぞゐたる。その夜もいもねず、このをのこ出で入りしありくを、奥の方なる女ども、「など、かくしありかるゝぞ」と問ふなれば、「いなや、心も知らぬ人を宿したてまつりて、かまばしもひきぬかれなば、いかにすべきぞと思ひて、え寝でまはりありくぞかし」と、寝たると思ひていふ、きくに、いとむく／＼しくをかし

九、曉、夜ふかく出でて、えとまらねば、奈良坂のこなたなる家をたづねて宿りぬ。これもいみじげなる小家なり。「こゝはけしきあるところなめり。ゆめいぬな。れうかいの事あらむに、あなかしこ、おびえ騒がせ給ふな。息もせで臥させ給へ」といふを聞くにも、いといみじうわびしく恐しうて、夜をあかすほど、千歳をすごす心ちす。からうじて明けたつほどに、これは盗人の家なり、主の女、けしきある事をしてなむありけるなどいふ。

十、例の奈良坂のこなたに、小家などに、このたびは、いと類ひろければえやどるまじうて、野中にかりそめに庵つくりすゑたれば、人はたゞ野にゐて夜をあかす。草の上にむかばきなどうちしきて、上にむしろをしきて、いと

更級日記といふ名について

はかなくて夜をあかす。頭もしとゞに露おく。曉方の月いといみじうすみわたりて、よにしらずをかし。

わづか京都から初瀨までの道に、こんな苦しい泊りをしたのである。

此の節を終るにあたり、更級日記といふ名について一言しよう。此の日記の末の方に、夫の死後、或夜作者の甥が訪ねて來た時、月も出でやみにくれたるをばすてに何とてこよひたづね來つらん」と詠んだ作者の歌が載つてゐる。作者は老後孤獨の身となつた自らの境遇を「をばすて」と觀じ、「をばすての日記」といふ意味を「をばすて」に緣ある更級に含めて、かく名づけたものであらう。且、夫の任國が信濃であつたことなども、此の名に思ひ及んだ一因であらうと考へられてゐる。

題しらず　　　讀人しらず

わがこゝろなぐさめかねつさらしなや
をばすてやまにてるつきをみて　　　―古今雜上―

第三節　作者の略傳

作者の父

作者の父を菅原孝標（タカスヱ）といふ。孝標は道眞公五世の嫡孫で、寛仁元年正月二十四日、四十五歳の時に上總介に任じ、寛仁四年の末に任滿ちて都に歸り、その後十年ばかり經て、長元五年二月八日、六十歳の時に常陸介になつた。常陸の任を終へて都へ歸つた後は極めて隱遁的な生活を營み、再び官途に就く事もなくして世を終へたやうである。

作者の兄弟

作者の兄に定義（サダノリ）といふ人がある。更級日記の中に「せうとなる人」と記されてあるは此の人である。定義は家の業を受けて大學頭・文章博士となり、學問上に令聞の高かつた人で、北野本殿に祀られる七座の中の和泉殿といふは、此の人の事だと二十二社註式に記してある。

定義の年齢について

【附】定義の年齢は、尊卑分脈に誤ありと思はれる事。

作者が「せうとなる人」と稱するのが定義である事は定家の傍註にも見える所であり、又何れの菅家系圖にもそれ以外に指すべき兄が記してないから、

定義に相違ないと斷定してよろしい。然るに尊卑分脈は定義を「康平七年十二月廿六日卒、五十三歳」と記してゐる。康平七年には作者が五十七歳になるから、かくては兄妹の順序が矛盾する。

余が作者の年齢を定めたのは、作者自身の作中に十三の年京に上るとあり、しかもその十三の年が寛仁四年にあたるといふ事を、權大納言記及び榮華物語等にある藤原行成の女の病死した年が治安元年である事から推定したもので、且長元五年に作者の父が常陸介になつたところに作者二十五とある定家の傍註を逆算してもこれに一致する。よつて此の推定は確實なものとせねばならぬ。

余は尊卑分脈の後世の寫本及び版本が定義の年齢を誤つたものではないかと、前田侯爵家に藏する最も古い寫本（脇坂八雲軒舊藏）十一帖本」について見たが、同じく五十三歳と記し、又溫古堂編纂の公卿家傳に就いて見たが同じ事である。然るに同じく前田侯藏「上方より出でし古本之寫」といふ菅家系圖について見ると「康平七年十一月廿七日卒」として、尊卑分脈と月日に

少異があり、年齢は記してない。尊卑分脈が「五十三歳」と記したのは何によつたものか不明であるが、若し正しい根據によつたものとすれば、もと「六十三歳」とあつたものを誤つたのではあるまいか。「六十三」とすれば作者よりは六歳の年長で、更級日記中に兄の事を記した記事に對照して、如何にもそれほどの年の違ひがあるらしく思はれるのである。

作者に一人の姉があつた事は更級日記に見えてゐる。此の姉の事は詳しく分らないが、更級日記によれば、作者が十七歳の時、産後の病氣で若死をした。此の人も作者と同じやうに、餘程幻想的の人であつたといふ事は前にも記した通りである。又、系圖によると安樂寺の別當になつた僧基圓といふ兄弟がある。併し此の人の事は、更級日記に見えてゐないやうである。

此の他に作者の兄弟としては、繼母の腹に生れた弟か若しくは妹が一人あつた。それは更級日記の中に、繼母が離縁して家を去る時、「五つばかりなるちごどもなどして、あはれなりつる心のほどなむ忘れむ世あるまじきなどいひて云々」と言つた言葉によつて知る事ができる。或は前項の基圓が、此の繼母の

子であるかも知れぬ。さうとすれば基圓は作者の弟である。更級日記に、永承元年十月二十五日、後冷泉天皇の大嘗會の日に、作者が京都を後にして初瀨へ參籠する事を記したところに、「はらからなる人はいひはらだてど」と書いてあるが、この「はらからなる人」とあるのが、基圓をさしてゐるのではあるまいかとも考へられる。

作者の母

作者の母は藤原倫寧（トモヤス）の女である。倫寧は後拾遺集に歌を載せた歌人であり、その子長能（ナガタフ）もまた拾遺集以下の勅撰集に五十餘首の歌を載せた名高い人である。歌人として又蜻蛉日記の著者として名高い右大將道綱の母も亦倫寧の女で、これは作者の母の姉にあたる。

作者の繼母

作者の繼母は上總大輔と稱せられ、春宮大進高階成行の女で、之も後拾遺集に歌を載せた歌人である。この上總大輔の叔父高階成章の妻は紫式部の女大貳三位で、夫妻ともに歌人である。

今これらの人々の系圖を、尊卑分脈を本とし、別に二三の系圖と更級日記の本文及びそれに加へた藤原定家の傍註等を參酌して示せば次の如くである。

一、父方系圖

菅原道眞—高視（大學頭）—雅規（文章博士）—資忠（文章博士・大學頭）—孝標（永延元（三トモ）五頃死五十四）

孝標
- 定義（大學頭・文章博士・和泉守・贈從一位）
- 基圓（安樂寺別當）
- 女（更級日記中ニ二女ヲ殘シテ死ンダコトノ記サレル人）
- 女（作者）
- 男女不明（上總大輔ノ腹ニ生ル。或ハ基圓カ）

二、母方系圖

歌人 藤原倫寧
- 理能
- 長能（歌人）
- 女
- 女（右大將道綱母。歌人。蜻蛉日記作者）
- 女（孝標妻。更級日記作者ノ母）

三、繼母方系圖

高階業遠
- 成行
  - 女（歌人。後一條院中宮女房上總大輔。更級日記作者ノ繼母）
- 成章
  - 大貳三位（紫式部女）

家庭の狀況

右の系圖によつて見れば父方の遠祖は文學の神と仰がれる菅公であり、父祖は代々文學を以て朝家に仕へた人である。母方の親族には歌人が多く、殊に伯母の如きは蜻蛉日記の著者として名高い人である。又その繼母も歌人であり、その方の姻戚には紫式部の女大貳三位の如き人がある。我が更級日記の作者は、かういふ空氣の中に育つた。彼女の文才は一門の感化に負ふところ大なるものがあつたのである。

こゝに作者の家庭について考へて見ると、如何にも睦しい家族が靜にくらしてゐるといふ風に考へられ、花やかな世間的な生活といふものを想像する事ができぬ。それは父孝標の内氣な性格が然らしめたもので、その性格は又境遇の然らしめたものではあるまいかと思はれる。

長男に生れた孝標は十五歳の時に父資忠に死別し、(前田侯爵家藏卷物ノ菅家系圖ニ、永延元年ニ資忠頓死トアルニヨリテ算出。尊卑分脈ニハ永延三年トス。コレニヨレバ孝標ノ父ニ死別セシハ十七歳ノ時ナリ)從つて官途の昇進もはかばかしくなかつた。少年時代から世の冷たい風に吹かれた孝標は人

を怖れた。彼が常陸介に任ぜられた時、作者に向つて述懐した言葉はよく此の事を證してゐる。

我も人もすくせのつたなかりければ、あり〳〵てかくはるかなる國になりにたり。幼かりし時、あづまの國にゐに下りてだに、心地もいさゝかあしければ、これをや此の國に見すててまどはむとすらむと思ふ。人の國のおそろしきにつけても、我が身一つならばやすらかならましを、ところせう引具して、言はまほしきこともえ言はず、せまほしき事もえせずなどあるがわびしうもあるかなと、心を砕きしに、今はまいておとなになりにたるをゐて下りて、我が命も知らず、京のうちにてさすらへむは例のこと、あづまの國、ゐなか人になりてまどはむいみじかるべし。京とてもたのもしう迎へとりてむと思ふ類親族もなし。さりとてわづかになりたる國を辭し申すべきにもあらねば、京にとどめて、永きわかれにてやみぬべきなり。

京にも頼みになるやうな親類縁者はなく、地方へ赴任すれば又、氣心も知らぬ人々の中に在つて、大きな聲で物を言ふのも遠慮せられる。これが孝標の境

遇であり性格であつた。彼は常陸の任を果して歸京すると「人の身の上についても感じてゐる事であるが、老い衰へて世に交るはみじめに見える」といつて、官途の望は自ら捨ててしまつた。

作者の母も亦、その夫と一對の引込思案の人であつた。父が常陸に赴任しての不在中、作者は物詣に行かうといつて母をうながしたが母は應じない。

母いみじかりしこたいの人にて、初瀨には、あなおそろし、奈良坂にて人にとられなばいかゞせむ。石山、關山こえていとおそろし。鞍馬はさる山、ゐて出でむいとおそろしや。親上りてともかくもと、さしはなちたる人のやうに、わづらはしがりて、わづかに清水にゐてこもりたり。

といふ風であつた。後に作者が宮仕をしようとする時にも、消極主義の兩親は「宮づかへは、大そうつらいものだ」といつて承知しない。それを周圍の人々が「今時の者は、皆宮づかへを出世の緒としてゐます。まあやらせてごらんなさい」と勸めるので、しぶしぶながら應じた。作者は初めて宮仕に出る時の心持を、さこそ物語にのみ心をいれて、それを見るよりほかに行き通ふ類親族な

どだにことになくこたいの親どもの蔭ばかりにて、月をも花をも見るより外の事はなきならひに、立出づるほどのこゝち、あれかにもあらず、うつゝともおぼえで云々」と述べてゐる。

かくて宮仕に上つてから十日ばかりして里に歸つた折の事が、次のやうに記されてゐる。

十日ばかりありてまかでたれば、てゝはゝ、すびつに火などおこしてまちゐたりけり。車よりおりたるをうち見て、おはする時こそ人めも見え、さぶらひなどもありけれ。この日ごろは人ごゑもせず、前に人影も見えず、いと心細くわびしかりつる。かうてのみも、まろが身をばいかゞせむとかするとうち泣くを見るも、いと悲し。つとめても、今日はかくておはすれば、うちと人多く、こよなくにぎはしくもなりたるかなとうち言ひて向ひゐたるも、いとあはれに、何のにほひのあるにかと、涙ぐましうきこゆ。

かういふ强い家族的感情は、遂に作者を引きつけて、落付いた宮仕をもさせずに終つたのである。以上は作者の家から及び家庭の狀態について概說した

作者の一生

誕生

十歳

十三歳

のである。次に聊か作者の一生について略述しようと思ふ。

彼女は一條天皇の寛弘五年に生れた。後年彼女を空想の世界へ導く動機となつた源氏物語は、少くとも此の頃既にその大部分が完成して、宮廷で評判な讀物となつてゐた。彼女が十歳の時、父は上總介に任ぜられた。父は彼女の生母を京に止め、別妻長男及び彼女の姉と彼女とを伴うて(繼母の子も同行したであらう)任國に下つた。國司四年の任期がすんで、寛仁四年の秋の末、歸京の途についたのは彼女が十三の年であつた。その年の十二月二日、長い旅行を終つて京都についた。家は三條の宮の西なる處にあつた。三條の宮とは一條天皇の皇女一品修子内親王が淋しくくらしてお出でになる御殿で、そのあたりは大きな木などが暗く生ひ茂つて、まるで深山の中のやうな有様であつた。

京につくと間もなく、繼母は離縁して孝標の家を去つた。四年の間淋しい田舍で朝夕馴れ親んだ繼母に別れる事は、幼い彼女にとつて非常に悲しい出來事であつた。暫くの間、彼女は繼母のことばかり思ひつゞけてゐた。

十四歳

歸京の翌年、卽ち治安元年は春から疫病が流行して多くの人が死んだ。彼女の乳母も三月一日に此の世を去つた。その悲に沈んでゐるところへ、彼女が人知れずなつかしく思つてゐた侍從大納言の姫君がなくなられた。此の姫君は、四年前、十二歳の年に道長の六男長家と結婚した人で、長家はその時十五歳、此の雛遊のやうな結婚は榮華物語(淺綠)にも面白く記されたほどで、當時の人々の心をひいたものであつた。わけて作者の如き夢見がちな性格の人に、此の姫君がなつかしく思はれたのは尤もである。榮華物語(本の雫)は姫の死を次の如く描いてゐる。

侍從の大納言(藤原行成)の御姫君、ついたち頃よりいみじうわづらひ給ひて、かぎりかぎりと見え給へば、大納言も北の方も、しづ心なくおぼしまどふ。三位の中將(長家)若き御心地に、いとあはれにおぼしたち、いみじうたのもしげなくおはすれば、かぎりにこそはとおぼしまどひて、萬の物を、神佛にとりあつめ、誦經にとしはてさせ給ふ。大納言も母北の方も、物もおぼえ給はず。大納言殿は、年ごろ頼み奉りつる不動尊・仁王經助け給へ〳〵と額をつきま

十五歳

どひ給ふ。 中將の君、母屋の柱のもとにつらづゑをつきて、いといみじう歎きたるに、この姬君見やりつゝ、いと物聞えまほしげに思したれば、「常はいと耻かしきものに思ひきこえ給へるに、いかにおぼすにか、近うよらせ給へ」と、人々もきこゆれば、中將の君、泣く／＼近うより給ひて、御かひなをとらへ給ひて、何事かおぼしめす、の給ふべき事やあるなど聞え給へば、物いはまほしう思しながら、物もえのたまはで、たゞ御涙のみこぼるべかめれば、男君、御直衣の袖を御顏におしあてて、いみじう泣き給ふ。

幼い夫婦の此の夢のやうな死別は我が更級日記の作者の心をひしと捕へた。彼女は逝ける姬君を戀して朝夕悲嘆にくれた。 母は彼女を慰めようとして、好きな物語を求めて彼女に與へた。 これは彼女が十四歲の年である。 をばから源氏物語を貰つてそれを耽讀したのも此の年の事であつた。

その翌年の五月の一夜、どこからともなく可愛い猫が迷つて來て作者の家を去らない。 作者は姉と二人で此の猫をかはいがつて飼つておいたが、後に姉の夢に此の猫が美しい姬君になつて現れ、自分は侍從大納言のむすめが生れ

十六歳

變つたのだ。あなたの妹さんが、あまりに私を慕はれるから、かうして暫く此の家にゐる」と話した。その翌年の四月火事があつて、二年あまり住み馴れた廣い家が燒け、狹い家に移つた。姫君の生れ變りの猫も此の時燒け死んでしまつた。

十七歳

その翌年の五月には姉が二人の幼兒を殘して此の世を去つた。作者は此のかたみの子供――何れも女の子であつた――を、まるで我が子のやうに思うて育てた。

十八歳

その翌年作者は十八歳、四月頃故あつて東山なる處に移り住み、秋の末に京の家に歸つた。それは何の故か明かでないが、後年の創作と傳へられる「よはのねざめ」「みづからくゆる」など何等かの關係があるらしくも考へられる。併しそれは別に研究を要する。その後約六年間作者の起居は明かでない。恐らく空想的な戀に胸を刻みながら、古風な兩親の膝下に侍してゐたのであらう。作者が暫し旅にさすらつた事、父に代つて繼母へ歌を送つた事など、何れも此の間の事と思はれる。

二十五歳

長元五年作者二十五歳の時に、六十歳の父は常陸介となつてはるばる任國に

三十二歳

祐子内親王の御母は嫄子と申し一條帝の皇子敦康親王の御子。關白頼通の御養女となり、後朱雀帝の中宮となられた。長暦三年八月崩。年二十四

下つた。父不在の四年間、作者は母に物語でをすゝめるけれど、保守的な母はとかく家に引込みがちであつた。待ちに待つた父も歸つて、一同は西山の家に移り、久しぶりで一家團欒の樂みを味つた。併し歸京後の父はすつかり老衰してしまつて、作者に一切の家事を委ね、自分は全く世を遠ざかつてしまつた。姉の遺した子供は年下の方が今年十三、年上の方もまだ十四五であらう。作者は人間生活の味をしみ〴〵嘗めさせられる境遇におかれた。

作者のかうした境遇に同情する知るべの人が、作者に宮仕へをすゝめた。消極的な兩親は作者を世間へ出す事には氣がすゝまなかつたけれど、はたから頻りにすゝめられるので、しぶ〴〵ながら出仕させる事にした。作者が仕へたのは後朱雀天皇(時の主上)の皇女祐子内親王で、内親王の母君は此の數ケ月前に崩御せられ、内親王は母方の里にあたる關白頼通の邸に御出でになつたのである。御奉公に上つてからも、作者は家の事ばかりが案じられて、落ちついた御勤めは出來なかつた。自然、宮仕へといふは名ばかりで、たゞ時々御用の折に召出されるといふやうな有樣であつた。さて作者が初めて宮仕へし

三十五歳

三十六歳

三十七歳

後冷泉の大嘗會の年は作者三十九歳

たのは三十二歳の冬の初であるが、その翌年頃には二人の姪も召出されて同じ宮に仕へたやうである。三十五歳の時、宮で右大辨源資通と知つて春秋の趣を語り合ひ、その翌年內裏でゆくりなく資通に會つて歌をよむといふやうな事があつた。併し彼女はもう美しい戀にあこがれるといふ年ではなくなつてゐた。少女時代に心を奪はれた物語の世界は、此の世に實現せらるべきものでないと、旣に自らさとつてゐた。

彼女が橘俊通に嫁したのは三十七歳の時と思はれる(或は三十二三歳の頃か)。此の時俊通は四十三歳であつた。勿論後妻であつたに違ひない。後に俊通が信濃へ赴任する時、方たがへの爲に女なる人のあたらしくわたりたる處に門出をしたと更級日記に書いてあるが、此の「女なる人」といふは、作者にとつては義理ある娘であつたであらう。實子とすれば其の頃はまだ他に嫁する年齡には達してゐないからである(尤も三十二三歳頃を結婚の時とすれば、實子と見る事ができる)。

さて作者は俊通に嫁して仲俊を生んだ。その頃御世がかはつて後冷泉天皇

が御即位あそばされた。その大嘗會の御禊の日に、わざ〳〵京を後にして初瀬へ參籠したのであるが、これは仲俊の前途を祈願する强い心に引かれたものと思はれる。結婚以後の作者は、石山に初瀬に太秦に、屢々參詣して、一家の幸運を祈つてゐる。若い頃の空想は皆夢だ。世帶の苦勞も、これが世の中と悟つて見れば「何事もたらはぬ事のなきまゝに」といふやうな滿足感も浮ばぬではない。こんな有樣で月日はどん〳〵たつて行つた。

五十歳

作者も今年五十になつた。天喜五年七月三十日に夫俊通は信濃守に任せられ、八月廿七日に赴任した。長男仲俊も今年は十三歳(推定)、立派に裝束して父と共に出立する。それを嬉しく見送つた翌年四月に、夫は任國から歸つて來た。そして九月二十五日に發病して十月五日に五十七歳を一期として此の世を去つた。

五十一歳

作者此の時五十一歳、若き空想を夢と悟つた此の世の中も亦一場の夢であつた。あゝ夢ならぬ國はいづこ。こゝに作者は彌陀の淨土を求遠い靈の住みかと深く賴んでまた憧れの生活に入る。憧れの人、我が更級日記の作者が此の世に於ける生活は、此の後これを知る事が出來ぬ。けれども、

その人の殘した心のひゞきは、新しい波紋を描いて、今の世の我等にまで、意味深い言葉を以てさゝやいてゐる。

作者の歌の勅撰に採られたもの

【附】作者の歌の勅撰集に採られたもの

次にあげた十四首の中、第四の歌は濱松中納言物語から、第五の歌は何から採られたか不明（松井博士藏續古今集の書入（契沖の書入か）にも「更級記不載」と註するだけで出處をあげてない）であるが、他の十二首はすべて更級日記から採られたのである。このうち第十二の歌は第七のと重復。又第九の歌は作者の姉の乳母の作。これを作者の歌としたのは玉葉の誤。

新古今集（春上）

祐子内親王藤つぼに住侍けるに女房うへ人などさるべき限り物語して春秋のあはれいづれにか心ひくなどあらそひ侍ければ

菅原孝標女（祐子内親王女房家集一卷）

一、あさみどり花もひとつにかすみつゝおぼろに見ゆる春のよの月

新勅撰集（雜一）

後朱雀院の御時祐子内親王藤壺にかはらず住み侍りけるに月くまなき夜女房昔思ひいでてながめ侍りける程梅壺の女御まうのぼり侍りけるおとなひをよそにきゝ侍りて

二、あまのとを雲ゐながらもよそに見て昔のあとをこふる月かな

續後撰集(羇旅)

泊瀨にまうでける道にてよみ侍りける

三、ゆくへなき旅の空にもおくれぬはみやこを出でし(更級。にて見し有明の月

續古今集(戀五)

題しらず

四、あはれ又いづれの世にかめぐりあひて有りし有明の月を見るべき

同(哀傷)

題しらず

五、何事をわれなげくらん陽炎のほのめくよりも常ならぬ世に

玉葉和歌集（春下）

春の頃西山なる所にしばし侍りけるに花おもしろく咲きわたれるに人めも見えざりければ

六、里遠みあまり奧なる山路には花見にとても人こざりけり

同（秋下）

山里にて八月廿日比曉がたの月いみじくあはれにて所のさまも心すごくおぼえ侍りければ

七、おはれ（更級。思ひ）しる人に見せばや山ざとの秋の夜ふかき有明の月

同（冬）

あづまよりのぼるとて參河の國みやぢの山を十月つごもり過ぐるに紅葉まださかりに見えければ

八、あらしこそ吹き來ざりけれみやぢ山まだ紅葉ばのちらで殘れる

同（雜五）

歎くこと侍りける頃人の返事に

九、慰むるかたもなぎさの濱千鳥なにかうき世に跡もとゞめむ

續千載集（雜上）
紅葉を人の折りて見せければ
十、いづくにもおとらじものを我が宿の世をあきはつるけしきばかりは
續後拾遺集（雜中）
題しらず
十一、竹のはのさやぐ夜ごとにねざめして何ともなきに物ぞかなしき
新千載集（雜上）
山里にてよみ侍りける
十二、思ひ知る人に見せばや山里の秋の夜ふかき有明の月
新拾遺集（秋上）
題しらず
十三、思ひいでて人こそとはね山里のまがきの荻にあきかぜぞ（更級。は）吹く
同（雜上）
石山にこもりて侍りける頃よめる
十四、谷川のながれは雨ときこゆれどほかよりはるゝ（更級。けなる）有明の月

第四節　更級日記年表

天皇	年號	紀元	日記ニ見エタル記事	作者年齢	父年齢	參考ニ資スベキ記事
一條天皇	寛弘五	一六六八		一	三十六	紫式部ガ上東門院彰子ニ仕ヘテヨリ三年目ト推定セラル。源氏物語ハ此ノ時既ニ完成シ、宮中ノ上下ニ愛讀セラレタルガ如シ（紫家七論）
	寛弘六	一六六九		二	三十七	
	寛弘七	一六七〇		三	三十八	
	寛弘八	一六七一		四	三十九	六月廿二日、一條院崩（日本紀略） 八月十一日、今夜一品親王（修子）從院渡給中納言隆家（小右記）
三條天皇	長和元	一六七二		五	四十	
	長和二	一六七三		六	四十一	正月廿七日　新一品宮自按察（隆家ノ家）遷給三條宮　御物本傍註） 同日　今夜故院一品内親王渡給三條宮（小右記） 同日　今夜一品宮渡三條宮、奉御車、金作、入夜雨下、心神依惱亂不參彼宮（御堂關白記） 七月六日　中宮研子產皇女禎子。 十月廿二日　以禎子爲内親王（日本紀略）

天皇	年號	紀元			事項
三條天皇	長和三	一六七四	七	四十二	
	長和四	一六七五	八	四十三	十二月廿七日　禎子内親王年官年爵准三宮(日本紀略) ●禎子内親王ハ此ノ時以前既ニ一品ニ敍セラレシナルベシ
	長和五	一六七六	九	四十四	十月廿日　太上皇(三條)自高倉第遷御新造三條院。中宮(研子)猶御座高倉第。 十二月廿二日　中宮行啓三條殿(日本紀略)
後一條天皇	寛仁元	一六七七	十	四十五	一月廿四日　菅原孝標上總介ニ任ズ(御物本奧註) 二月廿五日　中宮研子御竈神自高倉殿奉渡三條院。 四月廿九日　三條院太上天皇依不豫落飾。 五月九日　太上天皇崩三條殿。 八月二日　中宮研子從讃岐守濟政朝臣宅、遷御前左大臣道長一條第(日本紀略) ●太上天皇ノ崩後、三條院ハ禎子内親王ノ御領トナリシガ、禎子ハソコニ住ミ給ハズ、寢殿ハ寺ニナサル(榮華、木綿四手)
	寛仁二	一六七八	十一	四十六	十月十六日　以皇后藤原研子爲皇太后(日本紀略)
	寛仁三	一六七九	十二	四十七	三月廿一日　道長落飾入道、年五十四、依胸病也(日本紀略)

後一條天皇				
寛仁四	治安元	治安二	治安三	萬壽元
一六八〇	一六八一	一六八二	一六八三	一六八四
九月三日　國司ノ館ヲ出デいまたちニ移ル。十五日いかた泊。十六日滯在。十七日くろとのはま泊。十八日まつさと泊。コノ後京ニ着クマデ日付ナシ。 十二月二日京着、三條の宮ノ西ナル處ニオチツク。 今年十二月閏アリ。繼母ノ家ヲ去リシハ京着後程ナキコトナルベシ。	梅ノ花ニソヘテ繼母ニ歌ヲ送ル。 三月一日メノト死去。 侍從大納言行成ノ女ノ死ヲ悲シム。 ヲバヨリ源氏物語及其ノ他多クノ物語ヲ得テ耽讀ス。 法華經五卷ヲ習ヘトノ夢ミル。 五月ノ初橋ノ歌ヲヨム。 十月我ガ家ノ紅葉ヲホコル歌ヲヨム。	一品ノ宮ヲナガメヤリテノ歌ハ此ノ春カ。 三月末頃土忌ニ他ノ家ヘワタル。 五月頃怪シノ猫來ル。 七月七日　人ノ許ヘ長恨歌ノ物語ヲカリニヤル。同十三日ノ夜隣家ノ女ニ笛吹ク男イヒヨル。	四月ノ或夜半火事アリ。家燒亡。セマキ家ニウツル。	燒ケタル家ヲ思フ歌ヲヨメルハ今年ノ春カ。 五月一日　姉出産シテ死去。姉ヲ思フ歌アリ。 吉野ノ尼君ヘノ歌ハ此ノ冬ナルベシ。
十三	十四	十五	十六	十七
四十八	四十九	五十	五十一	五十二
有閏十二月（御物本傍註） 十月十九日　藤原道綱薨、年六十六、（公卿補任） ● 蜻蛉日記ノ著者ガ二十歳ニテ道綱ヲ生メリトセバ今年ナホ存生トシテ八十六歳ノ老人ナリ。	三月十九日　卯刻病者氣絶悲嘆之甚不知所爲。 四月九日　歛觀隆寺北地（權大納言記） ● 二月以來度々天下ノ疫病ヲ除カンガ爲神社佛寺ニ所請セラレシコト日本紀略ニ見ユ。	四月　研子、威子、一條第ヨリ枇杷殿ニウツリ給フ（榮華、本の雫） 七月十四日　法成寺供養（日本紀略）	二月十五日　中宮大夫齊信卿桟敷邸燒亡（日本紀略） ● 榮華物語ニハ二十餘日トス。更級ニ記セル四月ノ火事ニツキテハ所見ナシ。	三月三日　一品修子內親王落飾爲尼（日本紀略） ● 小右記・皇年代記・榮華物語ニモコノコトヲ記ス。思フニ修子內親王ハ長和二年以後引續キ三條宮ニオハスナルベシ。

後一條天皇

年號	皇紀	記事			事項
萬壽二	一六八五	正月ノ司召ニ父ガ任ニモレタルチ、人ノトムラフ歌アリ。ソレニ返歌シタルハ今年ナルベシ。四月末頃故アリテ東山ニ移リ、稻刈リハツル頃京ニカヘル。四月三十日ホトトギスノ歌、八月二十條日ニ月ノ歌ナド詠ミシハ東山滯在中ノコト。十月末頃アカラサマニ東山ノ寓居チ訪ネ、ソコナル尼ニ來年ノ花盛ニハ告ゲヨ、マタ訪ネントト約ス。	十八	五十三	十一月廿一日齋宮御著裳勅使藏人頭資通進發。來月五日着裳云々(左經記) 四月二十日頃 故三條院ノ女御娍子ノ葬送アリ、其夜御子小一條院及ビ宮々、三條院ニ喪屋チ作リテ住ミ給フ。五月十條日三條宮ニテ娍子ノ御法事アリ(榮華、嶺の月) (源)紫式部ハ今年ナホ在世カ。榮華楚王夢、八月頃ノ記事ニ、東宮ノ若君ニ越後ノ乘ガ仕ヘタコトチ「大宮の御方の紫式部が女の越後の辨、左衞門督の御子生みたる、それぞ仕ふまつりける」ト記シテヰル。
萬壽三	一六八六	三月十餘日マデ東山ノ尼ガタヨリセヌニヨリ「春やまだ來ぬ」ノ歌チオクル。	十九	五十四	
萬壽四	一六八七	今年ヨリ長元四年マデ五年間、年代ニツキテ考フベキ記事ナシ。作者ガ旅ニ出デテ「竹の葉のそよぐ夜ごとにねざめして」「いづことも露のあはれはわかれじをあさぢが原の」云々ナドノ歌チヨメルハ此ノ五年ノ間ノコトカ。彼ノ作ト一稱セラル、よはのねざめハ此ノ頃ノ生活ト何等カノ交渉ハナキカ。又繼母ガ上總ト名ノルニ對シテ「あさくらや」ノ歌チヨメルモ此ノ年頃ノコトカト思ハル。而シテ彼ノ作ト稱セラレシあさくらハ此ノ事ニ關係ナキカ。	廿	五十五	三月廿三日 前三條院皇女一品禎子内親王入皇太弟(後朱雀)宮。皇太后研子御營也。左大臣頼通以下參入。 九月十四日 枇杷殿研子崩、年三十四。 十一月十九日 禎子還枇杷殿。 十二月四日 藤原道長薨、年六十二。 同日 藤原行成薨、年五十六(日本紀略) ●修子内親王三條宮ニオハシマス(榮華殿上花見)
長元元	一六八八		廿一	五十六	

後一條天皇					
長元二	長元三	長元四	長元五	長元六	長元七
一六八九	一六九〇	一六九一	一六九二	一六九三	一六九四
			父ノ任國常陸ト定マル。父ハ近國ニ任セラレテ作者ヲモ任國ニ伴ヒ華々シキ生活ヲナサント願ヒシニ遠國ニ任セラレ作者ヲ京ニ止メテ獨リ赴クコトヲナゲク。七月十三日父常陸ニ下ル。八月頃太秦ニコモリ父ノ無事歸京センコトヲ祈ル。冬ノ頃父ニ別レシ秋ノ悲ヲ思フ歌アリ。	父ノ任中ノ記事ハ其ノ年ヲ確カニ定ムル能ハズ。但シ其ノ間次ノコトアリ。父ヨリ子しのびノ歌ヲ送ラレテ返歌ヲナス。清水ニ參籠シ夢ニ黄ナル袈裟着タル僧現ハレテ、作者ヲタシナム。初瀨ヘ一尺ノ鏡奉納。天照御神ヲ念ジ申セト人ニス丶メラル。修學院ノ尼ニあらしふくらむ冬の山里ノ歌ヲ送ル。	
廿二	廿三	廿四	廿五	廿六	廿七
五十七	五十八	五十九	六十	六十一	六十二
			二月八日　孝標任常陸年六十。作者年廿五（御物本傍註） ㊟御物本奥ノ註ニハ常陸介ニ任ズトアリ。		

天皇	後一條天皇		後朱雀天皇		
年号	長元八	長元九	長暦元	長暦二	長暦三
皇紀	一六九五	一六九六	一六九七	一六九八	一六九九
記事		父ノ歸京シテ西山ニ落付キシハ今年ナルベシ。ソノ宿ノ閑靜ナル有樣ヲ記セル記事アリ。十月京ニ移ル。	今明兩年ノコト年月ヲ定メイフベキ記事ナシ。但シ母ガ尼ニナリテ同ジ家中ナガラ離レ住ミシハ去年十月以後ノコトナルベシ。父ハ歸京後イタク老衰ヲ感ジ作者ニ家事ヲ打任セテ自ラハ世トウケハナレタルガ如キ生活ヲナスニ至レリ。		中宮嫄子ノ崩後、祐子内親王家ニ出仕ス。内親王ハ關白藤原頼通ノ高倉第ニオハス。一度里ニ退キ十二月マタ出仕、局ヲ賜ハリ日頃侍フ。十日バカリアリテ里ニカヘル。父母ハ作者ノカヘルヲ喜ブ。前世ニ清水寺ノ佛師ナリシコトヲ夢ム。十二月二十五日　宮ノ御佛名ニ召アリ、ソノ夜バカリト思ヒテ出仕シ曉ニハ歸ル。コノ後多ク里ニ住ミ、ヲリ〱出仕ス。作者ガ橘俊通ニ嫁シタルハ、今明年ノコトナルトモ思ハルレド、ナホ卅七歳頃ノコトナルベシ。
作者年齢	廿八	廿九	卅	卅一	卅二
父年齢	六十三	六十四	六十五	六十六	六十七
事項		四月十七日　天皇崩于清涼殿。御年廿九。獻劍璽於皇太弟。九月六日　中宮威子崩。御年三十八(百錬抄)	正月七日中宮嫄子入内。廿九日爲女御。關白女。三月立后(御物本傍註) ●嫄子ハ一條天皇ノ皇子敦康親王ノ皇女、關白頼通養ウテ子トス。	中宮嫄子、祐子内親王ヲ生ム(今鏡)	八月十九日　中宮嫄子第二皇女禖子ヲ生ム(今鏡)扶桑略記　八月廿八日　中宮嫄子崩、年廿四(御物本傍註)　十二月二十一日　女御藤生子入内、内大臣教通女(御物本傍註)

後朱雀天皇			
長久元	長久二	長久三	長久四
一七〇〇	一七〇一	一七〇二	一七〇三
作者ガ現實ニ目ザメテ人生ハ小說ニ非ズトサトリ、マジメニ世ノ中ノコトヲ考フルヤウニナリシハ此ノ頃ヨリナリ。宮ヨリ作者ノ姪ドモニ出仕ヲス、メラレシガ如ク思ハル。カクテ作者ハ姪ドモヲ出仕セシメ、ソレニヒカサレテ自ラモヲリヲリ宮ヘ參レルヤウナリ。	時々宮ニ參ル。	四月宮ノ御供ニテ內裏ニ參リ內侍所ヲ拜ム。又藤壺女御ノ上ラセ給フヲ見テ故宮(嫄子)ヲ思フノ歌アリ。十月一日頃、關白ノ邸高倉殿(祐子・禖子兩宮此邸ニオハス)ニ不斷經アリ。ソノ夜右大辨源資通ト春秋ノ趣ヲ語合フ。前記四月ノ記事ト十月ノ記事トノ間ニ「月もなく花も見ざりし」ノ歌、「わかごとぞ水のうきねに」ノ歌、「冬かれのしのをすゝき」ノ歌ナドノ記事アリ。コハ作者ガ、トギレ〳〵ノ宮ヅカヘヲナセル數年ノ間ニアリシコトヲ思ヒ出ヅルマヽニ書連ネタルナリ。時ノ前後ノ如キハ深ク問ハザルモノノ如シ。	八月、宮ノ御供ニテ內裏ニアリシ時、去年語リシ資通ニ會ヒ、「なにさまで思ひいでけむなほざりの」ノ歌ヲヨム。
卅三	卅四	卅五	卅六
六十八	六十九	七十	
源資通、昨年十二月五日右大辨トナル(御物本奥註)	橘俊通四十歲。正月廿五日下野守ニ任ズ(御物本奥註)	四月十三日 宮達入內給。藤壺儲饗。十四日主上渡御 廿日兩宮自內令出給(御物本傍註) 十二月八日 丑時大內燒亡(御物本傍註) 源資通卅八歲。來年藏人頭トナル(御物本奥註)	三月二十三日 天皇一條院ニ遷御(榮華) 七月二十三日 兩宮入內、御東南對、一條院儀也。 八月十日 兩宮御退出(御物本傍註) 十二月一日 一條院燒亡、二日遷御高陽院。廿一日自高陽院遷御東三條(御物本傍註)

天皇	年號	紀元	事項	年齡		參考
後朱雀天皇	寛徳元	一七〇四	資通ガ琵琶ノ曲ノ知ルカギリヲヒキテキカセント約セシコトヲ果サントテ作者ノアタリヘ訪ネ來タルハ今年ノ春ナルベシ。作者ガ橘俊通ニ嫁シタルハ今年ナランカ。或ハ卅二三歳頃ノコトカトモ思ハル。	卅七		橘俊通四十三歳。
	寛徳二	一七〇五	仲俊ヲ生メルハ今年カ。十一月廿餘日石山ニ參籠シ仲俊ノ前途ヲ祈願ス。	卅八		正月十八日 天皇落飾入道、卽刻崩于東三條院。御年三十七(百錬抄)
後冷泉天皇	永承元	一七〇六	十月廿五日 大嘗會御禊ノ日、初瀨ニ詣デントテ京ヲ出ヅ。ソノ夜「にへのゝ池ノほとり」ナル小家ニ泊ル。廿六日山ノベトイフ所ノ寺ニ泊ル。夢ニ貴女ヲ見ル。廿七日初瀨寺ニツキ三日參籠。稻荷ノ杉ノ夢。歸途ならさかノコナタナルアヤシノ小家ニヤドル。	卅九		十月廿五日 御禊。十一月十五日大嘗會(公卿補任) ❶藤原良頼ハ當時權中納言兼右兵衞督ナリ。 ❷今ノ平等院ハ當時宇治院ト稱シ關白頼通ノ別莊タリ。寺トナリシハ永承七年ノコト。
	永承二	一七〇七	コノ後八年バカリハ年代ヲ知リ得ベキ記事ナシ。但シ次ニアゲタル事項ノ細キハ此ノ間ノコトト思ハル。 1、春頃鞍馬ニコモル。十月頃同ジトコロニコモリ紅葉ノ歌ヲヨム。 2、二年ばかりありて又石山ニコモリ谷河ノ歌ヲヨム。 3、又初瀨ニまうづ。歸途野中ニカリソメノ庵作リテ泊ル。 4、子・甥等ノ出世、夫ノ榮達ナドヲ心ダノミトシテ過ごす。 5、昔ノ友ノ越前守ノ妻トナリテ下レルニ「たえざりし思ひも今はたえにけり」ノ歌ヲ送ル。 6、三月一日頃西山ノ奥ニ花見ニ行キ「さととほみあまり奥なる山路には」ノ歌ヲ詠ム。	四十		

後冷泉天皇						
永承三	永承四	永承五	永承六	永承七	天喜元	天喜二
一七〇八	一七〇九	一七一〇	一七一一	一七一二	一七一三	一七一四
7、太秦ニコモリ宮ニテカタラヒシ友ニ「しげかりしうきよの事もわすられず」ノ歌ヲオクル。 8、昔ノ友ノ筑前ニ下リシヲ夢ニ見テ「夢さめてねざめの床のうくばかり」ノ歌ヲ詠ム。 9、ナルベキリケアリテ秋ノコロ和泉ニ下リ冬ニナリテ帰京ス。 (?)兄定義ガ和泉守タリシハコノ頃カ。						
四十一	四十二	四十三	四十四	四十五	四十六	四十七
	二月七日　修子内親王薨（十三代要略）			三月廿八日　関白左大臣（頼通）供養宇治平等院（百錬抄）	三月四日　関白左大臣頼通供養平等院内阿弥陀堂（百錬抄）	

天皇	後冷泉天皇				
年號	天喜三	天喜四	天喜五	康平元	康平二
西紀	一〇五五	一〇五六	一〇五七	一〇五八	一〇五九
事項	十月十三日ノ夜、阿彌陀ノ來迎ヲ夢ム。		秋ニナリテ夫ノ任國定マル。頃ナルハノ近頃渡リシ家ニ八月十餘日ニ門出ス。八月二十七日夫、任國ニ下ル。仲俊モ共ニ下ル。同二十八日、遣ノ人々來リテ下向ノサマノ花ヤカナリシヲ告グ、又今曉人魂シテ京ノ方ニ向ヘルヲ告グ。此ノ記事ニヨレバ作者ニハ仲俊ノ外ニ女子アリシガ如シ。ソハ「ルかたらしく殘りたる所」トアレバ既ニ此ノ時人ニ嫁シタルモノナラン。然ラバ仲俊ヨリ年長ナルベシ。恐ラクハ俊通ノ前妻ノ娘ナラン。	四月、夫、任國ヨリ歸ル。九月廿五日、夫發病。十月五日、夫逝去。同二十三日、葬送。	甥ノ訪ネ來リシニ「月も出でてやみにくれたるをばすてに」ノ歌ヲ詠ミシハ今年ノコトカ。今マデ親シクセシ人ノ夫ノ死後訪ネヌニ「今は世にあらじ物とや思ふらむ」ノ歌ヲ詠メルハ今年ノコトカ。十月頃月ヲ賞メテ「ひまもなき涙にくもる」ノ歌ヲ詠ミシハ今年ノコトカ。久シク訪レヌ人ニ「しげり行くよもぎが露」ノ歌ヲ送リシハ今年カ。
年齢	四十八	四十九	五十	五十一	五十二
參考			七月廿日　從五位上橘俊通任信濃守得替公文（御物本傍註）	十月五日　俊通卒、年五十七（御物本傍註）	

第二章　更級日記諸本の解説

第五節　寫本

寫本十二種

更級日記は多く寫本によつて世に傳はつた。次に私の調査した主な寫本十二種について解說する。

御物本

一、御物本　一帖　藤原定家筆　帝室御藏

此の御本は更級日記の著作以後約百七十年を隔てた時の寫しであるが、しかも今をさる約七百年前の古寫で、今日世に存する更級日記中最古の寫本である。且、古典の本文に忠實な定家が正確に寫し留めたものであるから、更級日記の研究者にとつては唯一の寶といはなければならぬ。たゞ惜むべきは、後世綴ぢ誤られた爲に複雜な錯簡を作るに至つた。しかも世に存する一切の更級日記は、すべて錯簡以後の御物本から傳寫せられたので、あ

らゆる更級日記が皆錯簡となつてゐる。要するに此の御本は更級日記諸本の祖で、しかも錯簡の源である。更級日記の錯簡が正確に考證せられたのは、此の御本の力で、本書(更級日記錯簡考)の著述は此の御本に起因するのである。

此の御本は單に錯簡の考證を大成せしめただけでなく、流布諸本の誤寫を訂す上にも大切な證本である。

御本は横九寸七分、縦五寸四分の紙を五枚重ねたものを中央から二つに折つて(故に御本の大さは横四寸八分五厘、縦五寸四分)、之を一つのクヽリとし、かゝるクヽリを十クヽリ合せて胡蝶装に綴つてある。五枚重ねが二つ折になつてゐるから、書物として紙數を數へる時には一つのクヽリが十枚づつになる。それが十クヽリゆゑ、全體で書物の紙數百枚となるべきところ、第九のクヽリだけ特別に六枚重ねになつてゐるため、紙數總計百二枚となる。表紙は第一枚と、第百二枚とに、別に金砂子、浪に千鳥の銀模樣を押した紙を貼つてある。銀は既に燒けて赤銅色に變色してゐる。

本文は三枚目の表から書初め、すべて紙の兩面に書き、九十三枚目の裏二行で終り、九十四枚目表に作者の事、同裏に父孝標の略歴、九十五枚目表に橘俊通の略歴を書き、同裏から九十七枚目裏まで源資通の略歴、及び參考に資すべき舊記の拔書を記し、九十八枚目裏に書寫の由來を奥書して定家の筆はこゝに終る。

墨付百九十一面、一面十行を普通とし、九行の所十九面、十一行の所十四面、十二行の所も少々ある。一行の字詰は一定でないが、多くは十六字内外である。本文には所々傍註が施してある。又、後に傍註を加へるつもりで、書寫の際に少しく行間をあけておいたものが、そのまゝ白く殘されたと思はれる所も數個處ある。

さて此の御本は定家が何歳の時の書寫であるか明かでないが、最後の奥書に、

先年傳得此草子。件本爲人被借失。仍以件本書寫人本更書留之。傳々之間字誤甚多。不審事等付朱。若得證本者可見合之。

更級日記を世に紹介したのは藤原定家であらう

爲見合時代勘付舊記等。

とあるによつて見れば、定家は初め此の草子を或處から傳へて所持した。それを人に借失はれたので、その本を寫しておいた人の本によつて更に書寫したものだといふ事がわかる。定家が初め所持した本は如何なるものであつたか。少しく想像に走る次第であるが、彼は更級日記作者の父から六世の直系にあたる參議菅原爲長と格別に親しい仲であつたから、或はその家に傳はつた稿本か、若しくはその直接の寫などを傳へ得たのではあるまいかとも思はれる。

一たい更級日記を世に紹介したのは定家であらうと私は考へてゐる。何となれば更級日記の歌で勅撰集にとられたものは十二首もあるが、更級日記の著作以後に撰ばれた後拾遺・金葉・詞花・千載の四集には其の歌は一首もとられず、定家が撰者の一人に加はつた新古今に至つて一首とられ、その後、定家一人の撰なる新勅撰に一首採られ、定家の子爲家の撰になつた續後撰に一首とられ、曾孫爲兼の撰した玉葉に四首とられ、曾孫爲世の撰んだ續千

載に一首とられ、爲世の子爲藤と孫爲定との撰んだ續後拾遺に一首とられ、爲定一人の撰なる新千載に一首とられ、爲藤の子爲明が主として撰に與つた新拾遺に二首とられてゐる。しかも其の間に花園院の撰び給うた風雅集には更級の歌はとられてゐない(四六頁【附】參照)。尚又更級日記の名が物に記されたのは、定家の日記(明月記寛喜二、六、十七。天福元、三、廿—廿一)が初であると思はれる。その上今に傳はる更級日記の最古の寫本が定家の筆である點から見ても、定家の時まで、更級日記は僅かに作者の家に傳はつてゐたくらゐのもので、寫本も多くはなかつたであらうと考へられるのである。果して然りとせば、定家筆の更級日記は、殆ど原作そのまゝの形を今日に傳へる唯一の證本であるといふ事ができる。

とにかく定家は所持の更級日記を人に貸して失はれた。之を明月記について見ると、寛喜二年六月十七日の條に、但馬前司(源家長)に更級日記を貸したことを記し、「依同心人、不存隔心」といつて、大切な書物を貸した心持を附記してゐる。御本の奥書に「爲人被借失」とあるは、此の家長をさすのではある

まいか。若しさうとすれば、此の時定家は六十九歳であつたから、御本はそれ以後に寫された事になる。今此の御本の筆勢を見るに頗る老熟前田侯爵家に所藏せられる定家七十四歳の寫本土佐日記の筆勢と全く同一の韻致を有する所から考へ、又彼が少壯時代の筆蹟入道大納言資賢卿集(前田侯爵家藏)に比して、遙かに老熟な點から見ても、御本は定家晩年の書寫であると考へられるのである。

此の御本は宸翰御書類の中に同在して、宮中に保存せられたものである。次に之に關する宮内省文書の寫を示す。

從前

宸翰御書類ノ内ニ有之候親王以下古筆類

別册目錄ノ通御引渡申候條御調査ノ上御

落手有之度候也

明治十七年十二月廿三日　　宸翰掛

圖書寮御中

明治十七年十二月廿三日

頭井上毅　御用掛本多　古器物保存掛

稻生眞履

堀　博

宸翰掛ヨリ古筆類引渡ニ付回答案

相伺候也

御掛ニ於テ從前御保存相成候親王以下

古筆類別册目錄ノ通御引渡相成正ニ領

收候也

明治十七年十二月廿三日　圖　書　寮

宸翰掛

（目録のうち更級日記の分）

一　更級日記　目録二枚副　定家卿筆　一帖

箱　青海波月ノ蒔繪

中箱白木桐　紐紫平打

袋　唐物純子　地文蜀葵蜂　紫打紐

外箱　桐黑搔合　眞鍮錠前付

用紙　建五寸四分　横四寸八分强　數計百二葉

墨付九十六葉　餘白六葉　端二葉　末四葉

右の文書によつて見ると、御物更級日記は宸翰の中に同在して保存せられたものであるが、明治十七年に一旦圖書寮へ移管せられた事がわかる。そしてその後再び宮中に移り、今日に及んだものである。

さて御物更級日記の模樣は前記宮內省文書と、口繪一とによつて大體を知る事が出來るが、こゝに少しく之を說明すれば、御本は先づ「靑海波月の蒔繪」の箱に入り、つぎに「唐物緞子」の袋に入り紫の打紐でくゝられ、次に「白木桐箱」に入り紫平打の紐で結ばれ、次に萠黃緞子の服紗に蔽はれて黑塗の桐箱に入り錠を以て鎖されてある。箱の中に次の如き二枚の目錄が納めてある。（口繪二參照）

更級日記目六

一ノクヽリ　五枚重　口二枚白 墨付八枚
二ノクヽリ　五枚重　墨付十枚
三ノクヽリ　同　同
四ノクヽリ　同　同
五ノクヽリ　同　同
六ノクヽリ　同　同
七ノクヽリ　同　同

八ノク、リ　同　同

九ノク、リ　六枚重　墨付十二枚

十ノク、リ　五枚重　墨付六枚　白紙四枚

以上紙數百二枚

内白紙六枚

墨付九十六枚

更級日記　紙數百二枚
墨付九十六枚
白紙　六　枚（端二枚　奥四枚）

此の目錄は後世副へられたもので、御本の百二枚目表(裏の表紙内面)にも後人の筆で「墨付九十六丁但し外題共ニハ九十七丁也」と書付けてある。

二、御物本摸寫　一帖　宮内省圖書寮藏

御物本を忠實に摸寫したもので、紙幅(御物本より縱横各一分程大)、紙數、綴ぢ

方、一面の行數及び一行の字數まで全く同じ。書體も亦よく摸してある。思ふに御物本の副本として作られたのであらう。御物本の綴ぢ誤られた後に作つた本であるから、同様錯簡となつてゐる。但し他の寫本と異り、錯簡の小口が何れも綴ぢ目の境になつてゐるから、錯簡の考證には御物本同様の便宜がある。但し御物本の方は、錯簡の境に於て墨色が變つてゐるが、此の本は錯簡のまゝ續け寫したのだから墨色の變化はない。從つて錯簡の確證としては、やはり御物本をとらなければならぬ。製本は御物本に比すれば遙かに粗、表紙淡藍色金砂子、中ほどに長方形の白紙を貼つて「更級日記」と題す。その文字亦定家流なり。此の本、九十九枚目裏に「寛文二臘六日一校了」とある。その文字の體は本文の摸書の體とは全く異る。

三、脇坂本　一册　松井簡治博士藏

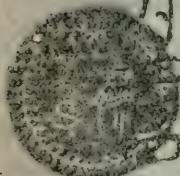
縦八寸三分、横六寸一分。袋綴。紙數九十三枚、但し奥一枚白。一面九行平

假名。此の本は御物本或はその正しい寫しを忠實に、且、正確に寫したもので、字體(漢字と假名、變體假名等)すべて一致し、書風筆勢まで頗る似せてある。御物本の傍註・奥書一字も漏さず。すべてに於て誤寫した文字が三つほどあるだけで、極めて正確な寫本である。恐らく御物本から直接寫したものではないかと思はれる。但し御物本を大形の紙に寫した爲、字詰行數が異なつたので、錯簡の部分が紙面の中に紛れてしまつた(後の第十四節に入れた七葉の挿繪參看)。卽ち御物本が綴ぢ誤られた後に、本の形を變へて寫されたものである。

此の本は前記寛文二年の「摸寫本」に比して、錯簡が紙面の中に紛れた點で劣つてゐるが、寫しとしては、それ以前の古いものである。何となれば此の本の所藏者脇坂安元は寛文二年を先だつこと九年、承應二年に卒してゐるからである。此の本が脇坂安元の所藏であつたことは、定家の奥書のある紙の奥に彼の藏書印なる「藤亨」「安元」の青印が二つおしてあることによつてわかる(次頁の挿繪參看)。安元は德川家康の武臣で、文を好み、和漢の書數千卷

脇坂本奥書の紙面

先年傳得式草子件本
写人被借失仍以件本書
写之本更無為之傳之了
字誤甚多不審書事等
若得證本者可校合
為後人合時代勘付也記

脇坂安元の藏書印を示す

を藏した。淡路守と稱し、號を藤享、又八雲軒といつた。彼が藏した多數の書は廣く散じて今は諸家の文庫に愛藏せられ、又稀に坊間に見る。何れも挿繪に示した印があり、又或物は別に「八雲軒」といふ長方形の印がある。

四 彰考館本　一册　水戸彰考館藏

大さ脇坂本に同じ。袋綴。紙數百三十枚。一面七行。平假名。外題には更級記とある。本文の書風は脇坂本にやゝ似たり。即ち定家流の餘波を存す。但し脇坂本の假名書きの語に漢字をあてたる所多し。定家の傍註及び舊記の書入(奥附)奥書等皆そなはる。但しそれは本文を寫した後に別人が書入れたものと見え、その分は書體拙し。此の本はすべて寫し誤りが頗る多いが、數人の校合や書入で舊に復した所もあり、横にそれた所もあり、誤のまゝ殘つた所もある。此の本が御物本直接の寫しでないことは明らかである。恐らく脇坂本の如き古寫本から寫したものと思はれる。御物本・脇坂本・摸寫本は相互に語句文章が一致し、正確に原本の俤を傳へたもの

と認められるが、此の本に至つては誤寫・脱漏、或は私意の改竄等が多く生じ、それが扶桑拾葉集本を初め、その他の寫本にも傳はるやうになつた。此の本は扶桑拾葉集本の底本である。それは、更級日記寫本の彰考館に藏するものが此の一本である事からもほゞ推測する事ができるが、それ以外左の有力な證跡がある。

一、此の本は御物本・脇坂本に假名で書いてある部分に多く漢字を當てゝゐるが、それは扶桑拾葉集本に殆ど全部一致する。

二、此の本には朱で句讀を切つてある。之は拾葉集の編者の施したものであらうが、その句讀も拾葉集本に殆ど全部一致する。

三、此の本に記入せられた異本の書入も拾葉集本に殘つてゐる。因に云ふ、此の本に異本として傍書したものを調査して見ると、脇坂本の本文と一致するもあり、せぬもある。當時脇坂本と異なる寫本、從つて寫しの精確でない寫本の流布して居たことがわかる。

四、本文を誤つて改めた點が、拾葉集本にそのまゝ殘つてゐる。その例一つ、

○「木むらのあるおかしき所かな」

これは「木叢」で、和名抄にも見える語である。然るに此の本の校訂者は「木むら」を消して「森」と改めてゐる。それは現に拾葉集本に殘つてゐる。しかもそこに編者勘考の貼紙があつて「後に森とあるから、こゝも森の字を誤つたのだらう」といふ意味が記してある。併し定家の寫本には「木むら」と明確に書いてある。

五、本文を誤寫したものが、そのまゝ拾葉集本に現はれてゐる。その一例、

1.「風すくましくひきわたなともしなとしたるに」

これは「なとも」の三字が衍である。此の三字がこで誤り加へられた爲に、後の註解者が「ひきわた」を「引綿」「檜皮」「皺文皮」など種々なものに解釋しようと苦んでゐる。實は「引渡しなどしたるに」である。

なほ彰考館本には「すくましく(透くまじくの意)」を「すさまじく」と誤り改めてある。それもそのまゝ拾葉集本に殘つてゐる。

2.「年はやゝさたすきゆくに」

この「さ」は定家本に「佐」の草書が用ひてある。形が「は」に似てゐるため「年はやゝはたすきゆくに」と誤寫した。そして、こゝにも校訂者等の「二十(ハタ)過ぎならん」とか「將過ぎなり」とか、いろ〳〵苦しい勘考が附してあつて、結局拾葉集には「はたすき」と板行されてしまつた。

要するに此の本は扶桑拾葉集編輯の底本となつたもので、編輯に與つた數人の人々が非常に苦心して手を入れたものである。扶桑拾葉集の底本に用ひた他の本も彰考館に殘つてゐるが、此の更級日記の如く貼紙や書入の多いものはない。かゝる多くの手入は如何なる人々によつて行はれたか、今明瞭に知る事は出來ぬけれど板垣宗膽はたしかに其の一人であつた。それに契沖が大阪から贈つた手紙の切が數葉貼つてあるのは頗る興味がある。次にその一葉を示す。

一、河崎屋より更級日記借候て御本を以寫させ置候拙僧本校合仕候餘り替り不申貴(字體不詳)本間々朱にて註御座候河崎屋本にも御座候

たれにみせたれにきかせん山里のこのあかつきもをちかへるねも

此次にこのつこもりの日たにのかたなる木のうへにほとゝきすかしかましくないたり
みやこにはまつらんものをほとゝきすけふひねもすになきくらすかな
なとのみなかめつゝもろともにある人たゝいま京にもきゝたらん人あらむやかくてなかむらんとおもひおこする人あらんやなといひて
山ふかくたれか思ひはおこすへき月みる人はおほからめとも
といへは
ふかき夜に月みるおりはしらねともまつ山さとそおもひやらるゝ
此方本に此分無御座候御本には有之候を寫候者落し候と覺申候御考可被成候末に至り月もいてゝやみにくれたるをはすてにといふ歌より
よいつねの宿のよもきにおもいやれといふ歌まて河崎屋本落申候」
これによれば、契沖は此の彰考館本を寫させて所持した事がわかる。この契沖本の事は、此の節の終に附記した契沖及び若冲校合本の項を參照せら

れたい。

要するに板垣宗膽などの人々が苦心し、契沖にも種々問合はせて、拾葉集に編入する更級日記の底本ができた。これによつて板下を書かせ、更に校正を經て世に出たものが拾葉集本の「さらしなの日記」である。底本を作る爲にかやうな苦心の施されたのは恐らく、延寶年間のことであらう。扶桑拾葉集といふ名は後西院上皇の下されたもので、光圀卿が此の集を繕寫して上皇に上つたのは延寶八年四月の事である。因に板本の扶桑拾葉集には元祿二年幸仁親王の序があり、又歴代殘闕日記（松井博士藏寫本）によれば扶桑拾葉集は元祿六年の秋に水戸の佐々木次郎太夫方で板行したのである。又契沖本更級日記に海北若冲が記した奥書によれば元祿十三年に光圀卿から契沖へ扶桑拾葉集一部贈られた事がわかる。これらは餘事ながら扶桑拾葉集編纂の經過を知る一資料として書添へておく。

前に記した如く、彰考館本更級日記には定家の傍註・舊記の抄錄・奥書とも皆載せてあるが、扶桑拾葉集には之を省いてたゞ本文のみを載せてある。こ

れは此の集の例で、何れの文もすべて本文のみを輯録したのである。

因に彰考館本更級日記は、終に十五枚だけ次の奥書ある二條良基の文が綴ぢ添へてある。

貞和四年正月廿五日片時草之與或仁而不慮及法皇叡覽預種々御感訖女房奉書殖秘底恐耻斗念不知所謝仍實不及用捨此奥

後福光園院關白判

此の文はこゝには題目がないが、扶桑拾葉集巻十四下に、「人に與ふる詞」と題し、且、奥書を省いて收めてある。之によつても、此の寫本が拾葉集の底本であつた事、及び拾葉集が底本にある奥書を悉く省いたものである事などを知り得るのである。

五、内閣本　一冊　内閣文庫藏

美濃判袋綴。「さらしなの日記」と題する事扶桑拾葉集本に同じ。御物本にある奥書全部を載せ、その次に左の奥書がある。

此日記あが友町田春影のもののたよりにおこせしをつれ〲のすさみ

にうつし侍りぬかたはらにほそくしるせるは扶桑拾葉集にことなるをあげたりさばれこゝかしこあやまり多くしてかな文字のたがへも亦すくなからずふたゝびよき本を得てたゞすことをえばわがさちのみならず記者のさちともいふべし　文化十四年彌生はつの七日鶯の宿に源潛寫す

六、齋藤彥麿本　一冊　南葵文庫藏

半紙判袋綴。此の本には群書類從の奧書、即ち「右さらしな日記以古本書寫。以屋代弘賢藏本及扶桑拾葉集校合畢。檢校保己一」までを寫し付け、次に高田與淸本の奧書、即ち左の文を寫し付け、

文化十一年十月七日安田躬弦が藏本もて校合せり

同年十二月ばかり難波人若山滋古が所藏の古印本を謄寫せし本を得て再校しつるに躬弦が校合せし本も大かた同じさまにてことなるふしなし

文化十三年三月以岸本由豆流所藏之寫本一校

岸本本奥書

○天明元年十二月廿一日夜季鷹盈之千蔭校畢

○寛政五年十二月二日以千蔭大人本校了云々

同年(著者云、文化十三年)閏八月朔日書林須原屋太助懐印本來賣我奪而開之半紙本四冊有之奥書云元祿十七甲申載孟春溯武陽城之西北牛込魚肆書林燕雀堂藏板云々　豈不無双之珍書哉乎　高田與清

此の次に齋藤彦麻呂自身の奥書なる左の文を附す。

右一書は屋代弘賢主所藏の本を以て塙保己一が校合したるに安田躬弦が校本と岸本由豆流が所藏の季鷹縣主加藤千蔭が校合とを書加へまた古寫本古印本數本を以て高田與淸が校合したるをかり得て寫したらざるをかつ〴〵補ひたるなり

文政十三年六月　齋藤彦麻呂

右の奥に別筆を以て天保二年七月二十八日以扶桑拾葉集校了扶トシルセ

シハ則今度校合ノ印也加藤一周」とある。思ふに彦麻呂本を傳へ持つた加藤一周といふ人が更に拾葉集を以て校合したのであらう。

七、伴直方本　一册　南葵文庫藏

美濃判袋綴。奥には御物本奥書「ひたちのかみすかはらのたかすゑのむすめの日記なり」より「土右記……勅使參彼宮云々」までを書添へ、その次に朱にて、

「文化十一戌年四月十三日與友人源浪音校合畢　伴直方」と記し、次行に墨にて、

「同十二亥年以古寫本再校」と記し、さてその次に御物本最後の奥書なる「先年傳得此草子云々」の文を「古寫本奥書」と肩書して載せてある。

此の本は又表紙の次に一枚を添へて日記中の二三の語を註し、又左の記事を附す。

異本更級日記云「しもつふさの國とむさしのさかひにてあるあすた川と

そいふ在五中將のいさこととはんとよみけるわたりなり中將の集には隅田川とありかゝみのせまつさとのわたりのつにとまりて云々」武藏と相模との中にふとゐ川といふ舟にてわたりぬれは相模のくにゝなりぬ」こゝに異本といふは後の第八節に記す所の千蔭・高尚・雅望などの所謂古本で、用ふべからざるものである。

八、圓頓本　一册　南葵文庫藏

美濃判鼠色絹表紙袋綴。奥書に「この一册さらしなの記はさきつとし津田露遊の君よりかりもとめて筆のひまごとに父の新格齋不白うつす　太郎齋圓頓宗雪判」とある。本文の寫しは老筆、此の奥書は未熟な筆跡に見える。此の本には本文の前に、寫しと同じ筆跡で次の記載がある。

更級記は菅原孝標の女の著す處也郎祐子内親王の侍女也兄定義は和泉守に任じて和泉の國府に居す　京北野本殿七座の内の和泉殿にして從五位下菅原定義なり菅神六世の孫從四位上孝標の子にして紀傳の道を

業とす令開祖に耻ぢず

九、歌堂文庫本　一册　佐々木信綱博士藏

美濃判袋綴。井上文雄の藏本であつたもの。「歌堂文庫」の朱印がある。齋藤彦麻呂本の項にあげた高田與清の奥書が全部寫し付けてあつて、その奥に、

天保十三壬寅夏五月十六日、以松屋校合類從本校了。爲歌堂大人　山田秋遠

とある。

十、俚言解稿本　一册　同博士藏

佐々木弘綱翁の原稿。上欄に生川正香・井上文雄・藤尾景秀等の書入がある。

十一、鳥山本　一册　帝國圖書館藏

美濃判袋綴。前學習院敎授鳥山啓氏の手にあつたもの。同氏の奧書を次に記す。

此卷は明治二十六年九月大阪の書肆鹿田靜七よりかひ入れたり朱の傍書はもとよりありたるなり頭書は余が諸本を校合せしなり

時本と記せるは　京都堀時習齋本なり傍註あり奧書あり

群本と記せるは　類從本なり傍註あり奧書あり

寛本と記せるは　寛文二年十二月六日校了の奧書ある寫本なり傍註あり奧書あり（著者云、これは前記「二」にあげた御物本摸寫をさすことゝ、校合の書入に照して明かである）

華本と記せるは　華族女學校藏寫本なり傍註あり奧書あり

元本と記せるは　元祿十二年板の本（著者云、後の板本の項の「二」にいふ元祿十七年板と同じものであらう）傍註なし

享本と記せるは　享保年間寫本西門蘭溪本に引けるもの
西イ本と記せるは　西門蘭溪校本に異本と記して引けるもの
拾本と記せるは　扶桑拾葉集のうちなるもの傍註なし
文本と記せるは　日本文學全書頭書あり
和本と記せるは　和文教科書頭書あり
布本と記せるは　布治園の藏書印ある寫本
余はまた句讀をきり濁音の符號を施し傍書をもなせりもとより記せる
傍書と混せざらん爲群青を以て記せり

十二、圖書寮大本　一册　宮内省圖書寮藏

圖書寮に二部の更級日記がある。その一は前記二の「御物本摸寫」で他の一がこれである。これは摸寫本に比して大形であるから、假に圖書寮大本と呼ぶ。

美濃判袋綴。この本は脇坂本系統の本から寫したものかと思はれる。そ

れは脇坂本が定家の筆を誤寫したところをそのまゝ同じ字形に誤寫してある事から推定せられる。文字は美しけれど誤字・脱字・衍文等が甚だ多い。

以上は私の調査した寫本の主なものであるが、此の外に貴重な寫本として、

契沖及び若沖校合本

のあつた事は南葵文庫藏、類從本の奥に次の奥書がある事によつて知られる。

此日記老師契沖先年校合勅撰其外諸書勘被付又者衍文恐字之疑付予于時元祿十三辰年水戸西山公ヨリ老師方へ扶桑拾葉集一部被遣以其亦校合如此同年末海北若沖

寛保壬戌年春三月以海北若沖之本寫之　野重好

天保七申年六月右以本校合畢　大橋稲麿

即ちこの類從本は、大橋稲麿が小野重好の寫した契沖・若沖校合本によつて校合を施したものである。さてこの若沖奥書の本といふは、七七頁に記した彰

考館本貼附の契沖の手紙の中に見える寫本ではあるまいか。
此の他の寫本、何れも大同小異で、一々擧げる必要はない。次に板本について
記さうと思ふ。

第六節　板本

板本四種

一、扶桑拾葉集本

扶桑拾葉集本

これは扶桑拾葉集卷第六の中に收めてある。題は「さらしなの日記」と記し、
異本の校合が少々あるけれど傍註も奥書もない。前節彰考館本の項參照。

二、元祿十七年板本　半紙判繪入四册

元祿十七年板本

これも題は「さらしなの日記」と記す。四卷で各卷に挿繪が四個づゝある。
奥書には

元祿十七甲申載孟春朔旦

武陽城之西北牛込魚肆　　書林　燕雀堂藏版

とある。

此の本卷四六十六枚の次に板の順序に前後があつて、文章のつゞかぬ所がある。

諸本の書入などに「元祿十二年版の更級日記」といふことが見え西門蘭溪本の奥附の末なる註にも「元祿十二年版の小本」といふ語が見えてゐるが、恐らく同一の本が十二年と十七年とに同じ書肆から板行されたものであらう。余は十二年板のものを見ず。

三、群書類從本　一册

これは群書類從卷第三百二十八、紀行部二に收めてある。御物本にある傍註及び奥書を悉く添へて其の奥に、

有さらしなの日記以古本書寫以屋代弘賢藏本及扶桑拾葉集校合畢

とある。

四、西門蘭溪校本　一册（或は上下二册に分けたるもあり）

天保四年校者の序文がある。同九年十月東都書肆須原屋茂兵衛外數名の出版になつてゐる。序文の中に、

此書元祿十七年板ノ半紙本ヲ正本ニシテ塙本古寫本ニテ校合セシ也但京ヘ上ルマデノ處ハ錯亂多クシテヨミカタケレバ今カキ改メタリコハ吳臨川ガ書經ノ洪範ヲ改正セシ例ニヨレル也

と記してある。卽ち本文中地名の前後したところを書改めて出版したものであるが、これは却つて本文を害したものである。その事は第八節に論ずる。

此の本、御物本にある奧書（一部分省略）を添へて其の奧に、

右此本書トセシ元祿十二、年板序文に十七、とある。二、は誤ならんか。或は八九頁に述べた如く、十二年十七年兩板ありて同本か）ノ小本ニハ無之ニ付令書加ヘテ備見合者也

天保五甲午秋八月

と記してある。

明治以前に出た更級日記の板本で私の調べたものは以上四種である。難波の人若山滋古が所藏した古印本といふは、その謄寫を高田與清が調べて(八〇頁參照)變つた本でないといつてゐる。藤井高尚の見たといふ古き印本は、ふとゐ川・あすだ川の順が變つてゐるといふ。これらは何時の板本か知らず。安永九年に田中道丸が宣長へ更級日記の借覽を乞ひ「おのれ所持のさらしなは半紙すりにて四卷、元祿十七甲申孟春朔云々。かく奥書ある本也」と申送つたのに答へて宣長は、此方のも同じ此外に板本はあるまじく思はる先年京にて見候は寫本なりしやうにうす〳〵覺ゆ」と答へてゐる。高田與清は更級の研究に特別の力を用ひた人であるが、それすら此の元祿本を得て「希世之珍書」と喜んでゐるくらゐで、他の古板本を見てゐない。思ふに若山滋古の古印本といふは元祿本ではあるまいか。要するに更級日記の板本は非常に種類の少いものである。

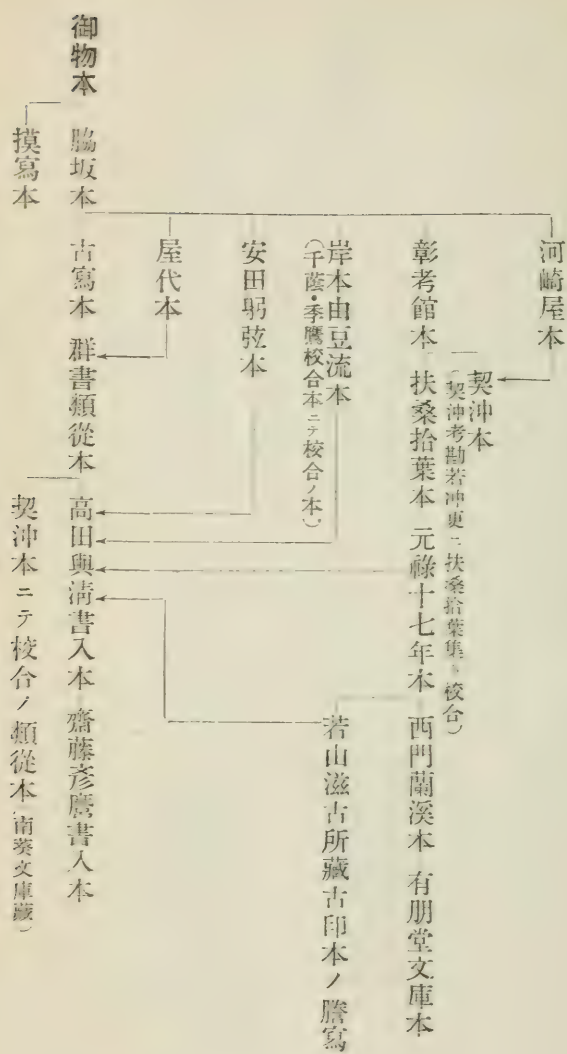
次に明治以後出版せられた主なるものは次の如くである。

書名	編著者	刊行
和文教科書六の卷	下田歌子氏編	明治十九年宮川保全發行
日本文學全書本	萩野博士等校	明治二十三年博文館發行
校註更科日記	佐々木信綱博士校註	明治二十五年博文館發行
群書類從縮册本		明治二十七年經濟雜誌社發行
扶桑拾葉集縮册本		明治三十一年大阪石塚猪男藏出版
改訂更科日記略解	關根正直博士著	明治三十二年明治書院發行
更科日記講義	大塚彥太郞氏講	明治三十二年誠之堂發行
國文大觀本		明治三十九年明文社發行
有朋堂文庫本		大正二年有朋堂發行
國文叢書本		大正三年博文館發行

明治以後出版の更級日記十種

第七節　更級日記諸本系圖

前記の諸本につき、その書體、誤寫及び改竄の部分の異同等を比較し、又諸本中

の書入と奥書とを基としてほゞ次の如き系圖を作ることができる。こゝに採つた本は、目標となるべき主なものだけであるが、此の他多くの寫本は、何れもその子孫と見てよからうと思ふ。

右の系圖に示す如く、御物本は世に存する一切の更級日記の先祖である。而もそれが綴ぢ誤られてゐるのを其のまゝ寫し傳へたから、すべての更級日記が錯簡の形で流布されたのである。

第三章　更級日記の錯簡及び其の復舊

第八節　古來誤つて錯簡と稱せられた部分

更級日記は、いつの世にか其の原本、卽ち第五節の一に解說した御物本が綴ぢ誤られた爲に甚しい錯簡を生じ、遂に正しく讀み解くことのできぬものとなつてしまつた。かくて數百年の間、その證本を見る事ができなかつた爲に、先賢の苦心もかひなく、錯簡はそのまゝになつて、今日に殘されてゐた。然るに昨大正十三年八月一日、御物定家卿筆更級日記を拜觀し、こゝに從來の疑雲を一掃して、更級日記を舊の姿に復し得たのは、國文學のため欣喜に堪へぬことである。これ全く幾多先賢の苦心が、たま〳〵機運に遭遇して一朝に實を結んだものといはなければならぬ。先賢の見るを得なかつた證本を見ること

ができ、それによつて此の功を成し得たのは聖代の恩惠篤きによるもので、誠に感謝の念に堪へぬ次第である。

錯簡に對する古來の意見

さて更級日記に錯簡があると考へられたのは、隨分古くからのことであつたこその意見の物に徴し得るは、橘千蔭が伴蒿溪に送つた言葉(閑田次筆卷一)、藤井高尙が伊勢物語新釋卷一すみだ川の註、石川雅望がねざめのすさび一の卷なる伊勢物語古意すみだ川の註に對する反對意見、西門蘭溪校訂の更級日記萩野・小中村・落合三氏校日本文學全書本さらしな日記、松井博士藏西門本更級日記上卷十一丁ウの朱書、關根博士の更級日記略解等である。以上のうち千蔭、高尙・雅望・蘭溪及び日本文學全書本が錯簡として指摘した所は地名の順序に關するもので、今日證本に就て調査すれば、之は錯簡ならざる所を錯簡と誤り認めたもので、これによつて順序を改むれば寧ろ一層の錯簡を重ねる事になるのである。西門蘭溪校訂本及び日本文學全書本は、卽ち此の新しい錯簡を重ねたものである。たゞ松井博士藏本の朱書と關根博士の略解とは眞の錯簡を指摘したものであるが、なほ錯簡の全部を盡してゐない。

ふとゐ川とあすだ川

以下古來誤つて錯簡と稱せられた部分を擧げ、それが錯簡にあらざる事を述べようと思ふ。第二節の初に記した如く、更級日記の內容は次の四段に區分して見ることができる。

一、東海道の旅　二、歸京後の家庭生活　三、宮仕の事　四、結婚以後の事

右の中、古來錯簡と稱したのは、東海道の旅の記事にある地名の順序の錯亂を指したものである。いかにも此の記事の中に記された地名は、數個處に於て不審な處がある。その中、特に多くの人々に論議せられたのは「ふとゐ川」と「あすだ川（隅田川）」との順序である。次にその部分にあたる更級日記の本文を抄出する。

下總の國と武藏とのさかひにてあるふとゐ川といふかゝみのせまつさとのわたりのつにとまりて――中略。此ノ間武藏ノ旅ナ終ル――野山、蘆荻の中をわくるよりほかのことなくて武藏と相模との中にゐてあすだ河といふ（在五中將のいざこととはむとよみけるわたりなり。中將の集にはすみだ河とあり）舟にて渡りぬれば相模の國になりぬ。

卽ち更級日記の作者は、下總・武藏の國境なる「ふとゐ川」を渡り、それより武藏を過ぎて武藏・相模の國境なる「あすだ川（隅田川）」を渡つたと記してゐる、ところが、隅田川は伊勢物語・古今集等に武藏・下總の境と記されてあるので、千蔭等の人々は更級日記の此の部分を錯簡と認め、西門蘭溪に至つては次の如く改めて校訂本で公にした。

下總と武藏の堺にてあすだ川といふ（在五中將のいざこととはんとよみけるわたりなり、中將の集にはすみだ川とあり、かゞみのせ・まつさとのわたりのつにとまりて――中略。此ノ間武藏ノ旅ナ終ル――野山、蘆荻の中をわくるより外のことなくて武藏と相模との中にふとゐ川といふあり。舟にて渡りぬれば相模の國になりぬ

併しこゝを錯簡と認めたのは考究が足りなかつた結果であり、殊に改删を施すに至つては、武斷も亦甚しといふべきである。 更級日記にある「ふとゐ川」は、承和二年六月二十九日の太政官符に、渡船增加の事を命じて、下總國太日河四艘（元二艘、今加二艘）武藏下總兩國堺住田河四艘云々（類聚三代格）と見えるところの太

日河で、かく平安朝の初に既に其の名が見えてゐる。又東鑑治承四年十一月二日の條に「武衛相乘于常胤廣常等之舟楫、渡太井・隅田兩河、赴武藏國」とあり、仙覺の萬葉集抄(卷三、眞間娘子墓の歌の條)にも「かつしかとは下總國葛飾郡也。彼郡の中に大河あり、ふとゐといふ。その川の東をば葛東の郡といひ、西をば葛西の郡といふ」と說明してゐる。卽ち「ふとゐ川」は今の江戶川の下流の古名で、昔、隅田川が下總・武藏の國堺をなした頃は下總を流れたが、後に武藏の國堺が東に移り、隅田川は武藏の川となり、ふとゐ川が下總・武藏の國堺となつて今日に及んでゐる。但しふとゐの古名は既に忘れられて、今は江戶川と稱するのである。されば更級日記に、ふとゐ川を渡り、次で隅田川を渡つたのは地理に適つてゐる。たゞ隅田川を武藏・相模の堺と記したのは不審であるが、之は老後に記憶をたどつて書いたもの故、作者が誤つたものかと思はれる。然るに蘭溪は隅田川を無理に下總・武藏の堺へ持つて來る爲、こゝを改删した。その結果ふとゐ川が武藏・相模の堺となつたが、蘭溪は之をどう說明する考であらう。尤も千蔭も旣にこゝを錯簡と考へ、「ふとゐ川は今の馬入川ならん」とい

つてゐるが、何等根據のない獨斷である。且又更級日記の本文下總の國と武藏とのさかひにてあるふとゐ川といふかゝみのせまつさとのわたりのつにとまりては注意すべき句である。卽ちふとゐ川といふが上の瀨なるまつさとの渡の津に泊りての意で、まつさとの渡の津は今の江戶川の上の渡津、松戶なる事明らかである。然るに蘭溪はあすだ川といふで句を切り、かゝみのせ・まつさとのわたりの津にとまりてと讀み、かゝみのせまつさとを二つの地名としてゐる。かう讀んでは文も意味をなさず、事實も合はなくなるのである。

かく論じ來れば、この部分の錯簡ならざる事は明瞭である。然るに古來こゝに泥んで、多くの論議が重ねられた。次に其の論の主なものをあげて見よう。

先づ契沖は勢語臆斷の中に次の如く述べてゐる。

更級日記に、下總の國と武藏の境にてあるふとゐ川といふかゝみのせまつさとの津にとまりてなど書きて、武藏の國の日記ををはりて、武藏と相模との中にゐてあすだ川といふは在五中將のいざこととはんとよみける渡り

なり、中將の集にはすみだ河とあり。舟にて渡りぬれば相模の國になりぬ」とあるは心得がたし。中將の集とは此の物語(伊勢物語)をさせるにや。但し孝標女上總の國より都へ上るとて經られたる道を記されたれば、更級日記、一向用ふまじきにもあるまじ。萬葉第三に辨基法師「まつち山夕越え行きていほさきの角太河原にひとりかもねん」とよめるは駿河なりといへり。又業平はみちのくの方へ下向なるに、下總へは何せんとか越えられけんと疑ふもいはれあるか。更級日記を引合はすれば角太河の名、かれこれ疑あるか。

次に賀茂眞淵は伊勢物語古意の中に次の如くいつてゐる。

○隅田川は既に古今集にしかあれば、こゝ(武藏・下總堺)なりとのみ我も人も思へり。然るに更級日記に「下總と武藏のさかひにてふとゐ川といふ云々。野山蘆荻の中を分くるより外のことなくて武藏と相模との中にゐてあすだ川といふ、在五中將のいざこととはむとよみけるわたりなり、中將の集にはすみだ川とあり。舟にて渡りぬれば相模の國になりぬ云々」といへり。

こは所のもの丶教へたるまゝに書きしか。土人の云傳へたるには大きによしあしの侍るめり。又京人の傳へたるも必ずよしとのみ云ひ難し。されば此の次の條(伊勢物語ニ「むかし男むさしの國までまどひ行けり」ト書出セル條)のさま、今有る如くにては前後とおぼゆるにつき、ひが意の旨を下にいふを待つべし。

○前の條(伊勢物語隅田川ノ條)に既に下總に渡れるからは、こゝに武藏の國までと有は前後せるに似たり。すべての條々別のさまして、はた、ついでをもなせる例なれば、かくもあるまじきには侍らずといふ人あるべし。さらばつひに陸奥まで行くべき落着をいひて、また武藏にての事を立かへりいふ文の體ともいふべし。猶思ふに右にひきたる更級日記の如く、此の文(伊勢物語)にも、もとは相模の國と武藏とのあはひなるあすだ川とありつらんを、後人古今集の詞書に偏によりて、武藏と下總のあはひとは改めつるにや。此の文に武藏・下總の云々とあらむには、いかで、かの日記(更級)にしか書かむ。此の歴る處々のついでによるにも、武藏には年經たるさまを書けるにも、日

記更級の如くならんと覺ゆ。

右の如く契沖と眞淵とは、隅田河の所在について不審は起したが、むしろ更級日記の記載を信ずる方に傾き、伊勢物語の方を疑ふ態度である。然るにその後、更級日記を疑つて之を錯簡と考へる說が強くなつた。伴蒿溪の閑田次筆卷一に、

閑田次筆の記述

更級日記に「下總の國と武藏の境にてあるふとゐ川と云々」以下武藏の國の日記終りて「武藏と相模との中にゐてあすだ川といふは在五中將のいざことゝはんと詠みけるわたりなり、中將の集にはすみだ河とあり。舟にて渡りぬれば相模の國になりぬ」とあり。此の段を不審して契沖の勢語臆斷、賀茂氏の古意などにも論せられたり。然るに此頃江戸の橘千蔭の文に、事のついでありていひこされしは、「此の所古本を得て校合せしに、今本甚だの錯亂にて、古本は武藏と下總の間あすだ川とあり。すみだとも、あすだとも、すだともいひ來りしことか。その邊に今もすだ村といふ所もあり。さて又武藏相模の間なるはふとゐ川とみゆ。是は今の馬入川なるべし」といへり。

後又此の古本を寫し送られて家藏とす。 或は今の川筋にはあらで、別にもと隅田河といふ所あり。 そこに梅若の塚などもありと見し人の話なれども、これはかへりてたしかならぬ事か。 いかにとも辨ふべからず。

此の文によれば、千蔭は所謂古本なるものを信じて、こゝを錯簡と斷定したのである。 併し御物本に據つて見れば、此の古本といふものは權威をなさぬものとせねばならぬ。 この所謂古本に惑はされて、誤つた說を發表した人が、なほ他に二人ある。 一は藤井高尚、一は石川雅望である。 高尚は伊勢物語新釋に隅田川を註して、

臆斷・古意などに「武藏と相模との中にゐてあすだ川といふは、在五中將のいざこととはんとよみけるわたりなり」とある更級日記の文によりて、所たがひたりとて、こゝ(伊勢物語)なるを疑はれたるは、ひがごとぞ、それは二人ともにかの日記(更級)の寫し誤りたるをのみ見て、正しき本を見られざりし故也。おのれ、これかれとあまた見たりしに、古き印本(千蔭・雅望は單に古本といへば寫本なるべし。 高尚は古き印本といふ。 更級日記の印本にかゝるもの

もあるか)に「下總の國と武藏の境にてあるあすだ河といふは在五中將のいざこととはんとよみけるわたり也中將の集にはすみだ河とあり。かゞみのせまつさとのわたりのつにとまりて夜ひと夜、舟にてかつ〳〵物など渡す」とありて、武藏の國の日記終りて「武藏と相模との中にゐてふとゐ川といふ舟にてわたりぬれば相模の國になりぬ」とあるは、此の物語(伊勢)に同じ。

石川雅望は、ねざめのすさび一の卷に、賀茂眞淵が伊勢物語古意に述べた隅田川の註に對し、次の如くいつてゐる。

按ずるに眞淵の見られしは世にある所の印本の更科日記なるべし。やつがれが藏書に、萩原宗固といふ人の自筆もて校合せる本あり。それは古本もて寫しなほせるよし記して、こゝに書きつく。

そのつとめてそこをたちて、下總の國と武藏の境にてあるあすだ川とぞいふ在五中將のいざこととはむとよみけるわたりなり、中將の集にはすみだ川とあり。かゞみの瀨まつ里のわたりの津にとまりて夜ひとよ舟にてかつ〳〵ものなどわたす云々。野山蘆荻の中をわくるよりほかの

ことなくて、武藏と相模の中にゐてふとゐ川といふ。舟にてわたりぬれば相模の國になりぬ云々

かくあれば印本とは大にたがへり。此の古本にあすだ川とあるぞさるべく思はる。今もかのわたりのむらに、すだと稱ふる所あり。昔あづま人いひなびたる口つきには、すみだ川ともいひつらんを、都人はすみだ川と書けるにやあらん。さて古本には武藏と相模の境にある川はふとゐ川とありて、あすだ川にはあらず。印本の更科日記の誤れるをもて證となして、古今集・伊勢物語までをひがごと記したりなどやうにいへるは一時の過失なるべし。

右の如く千蔭・高尙・雅望等は、何れも古本と稱するものに惑はされて「ふとゐ川」「あすだ川」を錯簡と認めたが、こゝが錯簡でないことは前に論じた通りである。但し更級日記には他の處に地名の順を誤つた場所が數個處ある。西門蘭溪は是等を併せて錯簡とし、之を改删して校訂本で公にした。左に更級日記東海道旅行の中に記された地名を列記し、その誤つた處を、正しい順序及び西門

本に改刪した順序と對照して示す。

地名錯誤一覽表

御物本地名の順序	正しい順序	西門本に改めた順序
いまたち（九月三日門出シテ移レル處）	地點不明	
（しもつけ）（しもつさノ誤）		
いかた 今ノ千葉市ノ地。九月十五日泊）		
くろとのはま（十七日泊）	今上總ニ此ノ地アリ。モシソレナラバいまたちノ次ニアルベキナリ	
ふとゐかは（しもつさの國とむさしとのさかひ）		あすた川（コレハ西門本却ッテ誤ル）
まつさと（松戸。十八日泊）		
（むさしの國）		
たけしはといふ寺		
はゝさう		

あすた川（むさしとさかみとの中にゐて）		ふとゐ川（コレハ西門本却ツテ誤ル）
〔さかみ〕		
にしとみといふところの山		
もろこしがはら		
あしから山		
〔駿河〕		
せき山		
よこはしりの關		
いはつほ		
ふしの山（遠望）		
きよみかせき（錯誤）	富士川	ふし川
たこのうら（錯誤）	田子の浦	きよみが關（何故コヽヲ改メザリシカ）
おほ井川（錯誤）	清見が關	田子の浦（何故コヽヲ改メザリシカ）
ふし川（錯誤）	大井川	ぬましり

大ゐ川	地點不明	
しかすがの渡	しかすがの渡	ぬましり　）
宮ちの山	宮路山	〔とうたうみ〕
二村の山	二村山	さやの中山
やつはし	八橋	天らう川
〔三川・尾張〕（西門本コノトコロ文ノツヾキヨカラズ）	〔尾張〕	はまなの橋
		ゐのはな
		〔みかは〕
		たかしのはま
		やつはし（錯誤）
		ふたむらの山（錯誤）
		宮ちの山（錯誤）
		しかすかのわたり（參河と尾張となる）（錯誤）
		〔おはり〕
		なるみのうら

すのまた
〔美濃〕
のかみ
ふわのせき
あつみの山
近江
みつさかの山
いぬかみ
かむさき
やす
くるもと
水うみ
なてしま
ちくふしま

勢多のはし
あはつ
關（相坂）
三條の宮の西なる處（京都）

高田與淸の卓見

更級日記の錯簡は、古來論じられたにかゝはらず、たゞ地名の順序にのみ着眼せられて眞の錯簡を逸し、且錯簡ならざる處が錯簡と誤り考へられてゐた。西門蘭溪の如き、その校訂本に序して「京へ上るまでの處は錯亂多くして讀み難ければ今書改めたり。こは吳臨川が書經の洪範を改正せし例によれる也」と言つてゐるが、何ぞ知らん、錯簡は京へ上るまでの處にはなくして、上京以後の處にあるのである。

高田與淸は更級日記を深く研究した結果、所藏の群書類從本に自説を書きつけて「此の日記は道すがら書きなせるものならずいと年へて後、信濃に下りし時（作者は信濃に下らず。かくいひしは與淸の誤）昔を忍び出でて書きつめし

なり。巻の末の方に六波羅の甥(與淸は類從本によりて六波羅の甥と讀んだが、これも正しくは六らうにあたる甥とある本文に從はねばならぬ)が訪ね來りしに、月も出でてやみにくれたるをばすてにこよひたづね來つらんとよみたる歌も見ゆ。されば大方に思ひたもちし事どもを記せしにて、地名の前後に亂れしなどはもとよりのわざなるを、ことわりかなへるやうに正せし寫本あるは後人のさかしらわざなり」と斷定してゐる。此の斷定の誤らぬ事は、今日御物本についても確める事ができる。

齋藤彥麿も片廂前篇隅田川の項に「萬葉集にある隅田川は紀伊國なり。六帖にある隅田川は出羽の國なり。古今集にある隅田川は武藏國と下總國との界なり。隅田川に限らず、國々に同じ地名あまたあれば、とかくいふべきにあらず。更級日記に定かならぬ記しぶりは委しく知らずして書きたる故なり」と記し、與淸とほゞ同じ意見である。

第九節　眞の錯簡

地名の順序に關しては古來上述の如く論議せられ、與淸に至つて、それは錯簡ならずといふ正しい斷定が下された。然らば更級日記には錯簡がないのであるか、否、別に大なる錯簡が隱れてゐる。即ち更級日記の錯簡は地名の順序にあるのではなく、東海道の旅を終へた次の部分、即ち「歸京後の家庭生活」「宮仕の事」の記事に存するのである。然るに古來之について論じた人は殆どなく、ただ前記西門本の朱書と、略解本とに見るだけである。

更級日記流布の傳統

一たい更級日記は古來如何なる人々に讀まれて今日に流布し來つたものか。私の調べたところでは、始め藤原定家によつて世に紹介せられ（六三頁參照）、鎌倉時代を通じては其の子孫の人々に讀まれた。室町時代に於ける消息は不明であるが、德川時代の初には脇坂安元が定家本（御物本）に最も近い寫本を藏し、次で寛文二年に定家本の摸寫が出來、下つて延寶の頃に扶桑拾葉集の底本を作る爲に本文に對する細密な考究が行はれた。契沖・若沖眞淵なども更級

日記は讀んでゐるが、特別の研究は行はなかつた。次いで田中道丸は更級日記の文のしどろな狀態に不審を起した。賀茂季鷹・橘千蔭は二人對校し、岸本由豆流は其の千蔭本で校合を行ひ、萩原宗固は所謂古本なるものによつて校合をなし、安田躬弦・屋代弘賢も寫本を藏して自ら之に校合を加へ、高田與淸は以上の諸本及び他の多くの本を集めて最もよく考究した。慶長以來諸家著述目錄には、與淸の著「更級日記考證四」と載せてあるが、之は公刊せられなかつたものと見える。次で與淸の書入本を基として之を補つた人は齋藤彥麿である。同じ頃橫山由淸も所藏の元祿十七年板本(佐々木博士藏)に校合を加へ、小中村淸矩は所藏の西門本南葵文庫藏に考勘を書入れてゐる。此の間に板本としては、元祿六年の扶桑拾葉集本、同十七年の四冊本、群書類從本、天保九年の西門本等が出た。寫本類の奧書によつて見ると、文化・文政以後、更級日記は殊に廣く流布したやうである。

更級日記は、かやうにして今日に傳つて來たが、此の間に於て眞の錯簡を指摘した人は殆どなかつた。勿論心に之を豫想した人々はあつたでもあらうが、

田中道丸と宣長との問答

世に發表した人はないのである。錯簡が豫想せられたと認むべき一つの材料は、靜嘉堂文庫(岩崎男爵家文庫)に藏する元祿十七年板本の奥に書付けられた朱書である。之は田中道丸と、その師宣長との問答であるが、それに、

庚子二月下旬疑問の中(庚子ハ安永九年デアル。コレハ道丸ガ五十一歳デ本居宣長ニ入門シタ年デアル)

田中道丸問　本居宣長答　(○ハ問、△ハ答)

○さらしなの日記に何ぞ御書入あるを持ち給はゞ是も一卷づつ拜借仕らまほし。

△コレハ所持ナシ。此度社中ノ本ヲカリテ御答ハ申ス也。出入モ校合モナシ。

○おのれ所持のさらしなは半紙ずりにて四卷元祿十七甲申孟春朔武陽城之西北牛込魚肆書林燕雀堂藏版。かく奥にある本也。

△此方ノ本モ同ジ。此外ニ板本ハアルマジク思ハル。先年京ニテ見候ハ寫本ナリシヤウニウス〳〵覺ユ。

○右の外にも板ありやなしや。さてさらしなと名づけたる故よし見えず。又一部の詞つゞきは落窪よりも蜻蛉よりも聞取りやすくて一部の大むね聞知りがたく思はる。

△サラシナト名ヅケタル由ハ見エズ。モシハ身ノ上ノウキヲ慰メカヌル意モテ名ヅケタルカ。ヲバステ山ヲヨメル歌、巻末四十七丁ニアリ。

○下總(上總デアル。下總ハ道丸ノ誤)の國の任にあたりたる人の女にて、元來都生れにて父の任のはてたるにたぐひて都へかへり上りて都にありし女なりと聞ゆ。

△下總ニアラズ常陸也。父孝標常陸介ニ任ジタルコトアリ。此時カ(コレハ宣長ノ誤。孝標常陸介タリシ時、作者ハ京ニ留守ス)但シ巻首ニ東路ノ道ノハテヨリモナホオクツカタニトアルハ陸奥ナドノヤウニモ聞ユレドモ陸奥トハ聞エズ。常陸介ノ時ナルベシ。「東路ノ道ノハテナルヒタチオビノ云々」テフ古歌ノ詞ニテ書ケリ。二丁ニ堺ヲ出デテ下野國イカタト云フトコロニ云々。此ノ下ツケハ下フサノ誤ニテ下總也。常陸國ノ堺ヲ出テ

下總國ニ泊ル也。

○都へ上りて更衣などの宮仕せしにや。又はつせ石山その外諸方へ詣でたりしは宮仕へはなれての事ときこゆ。

△宮仕トテモ、トリシメタル宮仕ニハアラズ。ヲリ〳〵上リタルホドノコトト聞ユ。末ニテハ夫ノアリシコトモミエタリ。

△サラシナ作者ハ菅原孝標朝臣ノ女也。孝標ハ菅公ノ曾孫ニテ即チ今ノ菅原氏ノ堂上方ノ先祖也。女ハ祐子内親王家ニ宮ツカヘセショシ作者部類ニ見エタリ。サテ此ノ日記ハタヾ身ノ上ノコトヲソコハカトナクトビニ書ケルモノニテ何ノ趣意トイフコトモナシ。カゲロフ又ハ和泉式部物語ナドノ類也。落窪・カゲロフナドヨリハヨホド後ナレバ文章モオトレリ。

右、道丸の間に一部の大ねむ開知りがたく思はるといつた言葉は、更級日記に作者の經歷を知るべき肝腎の部分が甚しく錯簡となつてゐる爲に發したもので、更級日記を精讀する人に必ず起るべき疑問である。それを宣長が何の

趣意といふ事もなし」と輕く答へたのは、質問の要點を逸した感がある。とにかく道丸は更級日記の文理の通じない點に不審を起して此の疑問を發したわけで、これはやがて錯簡の豫想とも見ることができる。若し道丸が宣長の答に滿足せず、飽くまで此の疑問を追求したならば、當然錯簡にぶつかつたわけである。

さて前にも記した如く、更級日記の眞の錯簡を捕へたのは、松井博士藏西門本朱書と關根博士の略解本とである。松井博士藏西門本朱書(上卷十一丁ウ)に、

「ひろ〴〵とあれたる所の、すぎきつる山〳〵にもおとらず、大きにおそろしげなる深山木どものやうにて・はゝなくなりにし姪どもゝ、」

とある本文の「深山木どものやうにて」の下に朱點を入れて、

(一) 下卷三十八丁ノオニツヾクカ。

(二) 下文二十五丁オ第九行「みやこのうちともみえぬ所のさまなり」トツヾクベキニヤ。

の二つの考が記してある。右のうち(二)の考が正しいのである。

次に關根博士は、前記朱書の(二)と一致する錯簡を一個處、別に一個處の錯簡を訂正して之を略解本で發表せられた。博士は此の他になほ十數個處を錯簡と認めて改訂を試みられたが、それは何れも錯簡ならざる所を錯簡と認められたものである。一たい錯簡の訂正は甚だ困難なもので、若し誤つて錯簡ならぬ所を一個處抜出して他へ移すと、其の結果更に新しい錯簡を三個處作る事になるから、博士の改訂に多くの新錯簡が增加したのは止むを得ぬことといはなければならぬ。要するに、證本なくしては、何人と雖も完全な訂正は行ひ難いのである。

第十節　證本の發見

私は更級日記を愛し、その作者をなつかしく思ふまゝに、作者の一生を心に描いて見た。併し日記に於て作者の履歷を知るべき主要の部分が、甚しく錯簡となつてゐる爲、心に描く作者の俤は漠として捕捉しがたいのであつた。私は是非此の錯簡を復舊したいと思ひ立ち、先づ第四節の如き年表を作り、之を

尺度として日記の本文を計り、且、文章の連絡に心を潜めて精査した結果、大體の推定を作つて之を佐々木信綱博士に質した。博士は私に激勵の言葉を與へられ、なほ古本の捜索に力めてその確證を得よと言はれた。心にはかけながらも、其の事ははか〴〵しい進行を見ずに過ぎた。然るに昨年八月、佐々木博士は宮内省に於て數々の尊き御物を拜觀せられ、中に定家卿筆更級日記一函あるを知られ、就て一讀せられた上、貴重の古寫本なるが故に、私に拜觀の光榮を負はせて下さつたのである。

それは大正十三年八月一日、私にとつて忘れ難き日である。早朝、博士に從つて宮内省に赴き、導かれて豐明殿の御廂に參入すれば、御物御調査の折からとて、數々の御重寶が殿内に据ゑられてある。その中から掛りの方が取出して下さつた一函の御書物、それが定家卿筆更級日記であつた。外箱、袱紗、中箱、袋と次々に開かれて、最後に青海波、月の蒔繪の貴い小箱が開かれると、七百年の古色に染められた一帖の御本、折からの朝風にさと香る紙の匂もいとめでたく拜せられた。

やがて博士と共に校合を進めて行くと、かねて錯簡ならずやと推定した小口が御本の綴ぢ目に現はれてゐる。あゝ錯簡の根源は正しく此の御本であつた。私の胸は躍り手は震へた。錯簡の原因は書物を綴ぢ直す時の粗忽ではなからうかと、かねて思つてゐた其の證跡を今日の前に見たのである。併し御本の綴ぢ方は前に記した如き胡蝶裝であるから、紙一枚の挿しかへは、場合によつて種々の狂ひを文章の上に生じるのである。十分の精査を遂げなければ、今俄に悉くの錯簡について斷定を下す事はできない。仍て重ねての拜觀を願ひ出でて其の日は退出した。かねての推定を明確に解決するのは、數日以後に差許された拜觀の日である。私は其の日の待遠しさに堪へず、翌日直に圖書寮に赴き、何かの手がゝりもやと、先づ其處に藏する更級日記を見せてもらつた。それは第五節の二に解說した御物本の摸寫であつた。こゝに重ねての天祐を喜びつゝ、此の摸寫本について調査し、錯簡の大體を解決することができた。その後、重ねて數回御物本を拜觀し、十分に精査を遂げた末、全部の錯簡を正確に斷定する事を得たのである。次に節を改めて錯簡の狀態

を記さう。

第十一節　錯簡の狀態

更級日記の錯簡は御物本の綴ぢ誤から生じた。然らば如何に綴ぢ誤られたか。それを説明する爲には、再びこゝに御物本の製本について述べる必要がある。

御物本製本の模樣

御物本は一二二頁にある甲圖の如き紙を五枚重ねて、乙圖・丙圖に見る如く二つ折にし、その一折を一つのクヽリとし、之を十クヽリ重ねて綴ぢ合せたものである。丁圖は此の十クヽリが、まだ綴ぢ合せられない時の有樣を示してゐる。便宜上この各クヽリに名を與へ、初の方から順に一ノクヽリ・二ノクヽリ・三ノクヽリ・四ノクヽリ・五ノクヽリ・六ノクヽリ・七ノクヽリ・八ノクヽリ・九ノククリ・十ノクヽリと呼ぶことにする。

一つのクヽリは紙數五枚（九ノクヽリだけは六枚。但しこれは錯簡に關係なし）であるが、書物として數へる時には、乙圖・丙圖で了解し得る如く十枚となり

甲圖

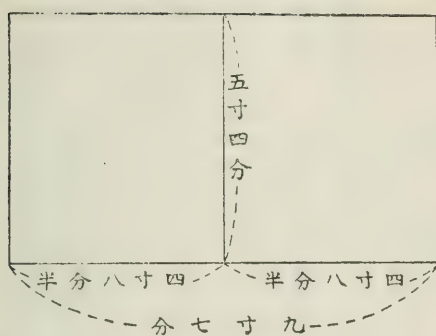
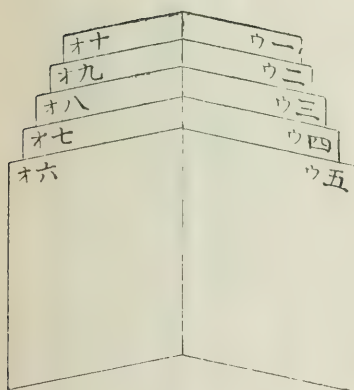
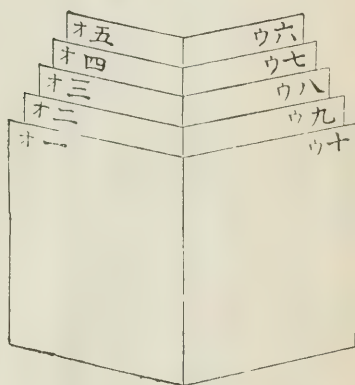
五寸四分

四寸八分半　四寸八分半

九寸七分

丙圖

オ十　ウ一
オ九　ウ二
オ八　ウ三
オ七　ウ四
オ六　ウ五

乙圖

甲圖中央の線は折目をあらはす。

乙圖は第一枚の紙から次第に向ふへ重ねて中央に折を入れ、外側から見た所をあらはす。

丙圖は第一枚の紙から次第にこちらへ重ねて中央に折を入れ内側から見たところをあらはす。

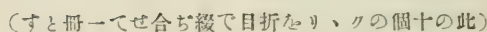
一オは第一枚のオモテ、十ウは第十枚のウラの意、他は之に準ず。

御物本綴ぢ誤りの狀態

丁圖

更級日記
一ノクヽリ
二ノクヽリ
三ノクヽリ
四ノクヽリ
五ノクヽリ
六ノクヽリ
七ノクヽリ
八ノクヽリ
九ノクヽリ
十ノクヽリ
錯簡ナシ
此ノ四ツノクヽリ錯簡トナル
錯簡ナシ
此ノ八ツノクヽリ何レモ五枚重ネ
此クヽリダケ六枚重ネ
此クヽリ五枚重ネ
紙数總計五十一枚
書物トシテハ總計百〇二枚

（此の十個のくゝりを折目で綴ぢ合せて一冊とす）

ウラ・オモテ兩面に書いてあるから、文字の面は二十面となる。又書物として紙を數へる時に、第一枚は第十枚と同一の紙、第二枚は第九枚と同一の紙、第三枚は第八枚と同一の紙、第四枚は第七枚と同一の紙、第五枚は第六枚と同一の紙である。これも乙圖・丙圖で了解する事が出來る。

御物本の製本は右の如くである。これが如何に綴ぢ誤られたかといふに、次の二樣の誤をなしてあるのである。

一、くゝりの順序を前後せしめ

た事

二、一つのクヽリの中の紙の順序を混亂せしめた事

先づクヽリの順序を如何に誤つたかといふに、一ノクヽリから十ノクヽリまである中、三・四・五・六の四つのクヽリを、次の如く前後せしめたのである。

六ノクヽリにあるべきものを三ノクヽリとし、

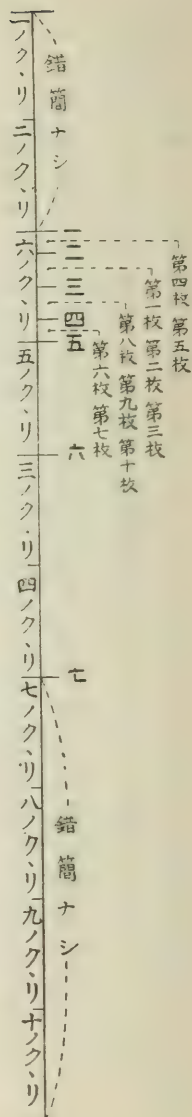
五ノクヽリにあるべきものを四ノクヽリとし、

三ノクヽリにあるべきものを五ノクヽリとし、

四ノクヽリにあるべきものを六ノクヽリとしてしまつた。

次に、右の中、六ノクヽリ(現在の御物本では三ノクヽリとなつてゐる)の中の紙の順序を誤つて、内部の二枚、卽ち第四枚(第七枚と同一紙)と第五枚(第六枚と同一紙)を第一枚(第十枚と同一紙)の外に重ねてしまつた。それ故此のクヽリの紙の順は、第四・第五・第一・第二・第三・第八・第九・第十・第六・第七といふ混亂を生じた。

以上の誤を纏めて圖式で表はせば次の通りである。

一ノクヽリ
錯簡ナシ
二ノクヽリ
六ノクヽリ
一
二
三
四
五
第四枚 第五枚
第一枚 第二枚 第三枚
第八枚 第九枚 第十枚
第六枚 第七枚
五ノクヽリ
六
三ノクヽリ
四ノクヽリ
七
七ノクヽリ
八ノクヽリ
錯簡ナシ
九ノクヽリ
十ノクヽリ

備考 二ノクヽリの最後の紙、卽ち第二十枚ウラに、六ノクヽリの第四枚卽ち第五十四枚のオモテが接して、こゝに錯簡の第一を生じた。それはこの圖式で、縱線の右側につけた横線の、一といふ符號の所にあたる。次に六ノクヽリの第五枚、卽ち第五十五枚のウラに、六ノクヽリの第一枚、卽ち第五十一枚のオモテが接して、こゝに錯簡の第二を生じた。それは同じく二といふ符號を付けた横線の所にあたる。以下、三・四・五・六・七の符號を付けた横線の所が、何れも錯簡となる事は、圖式の左側に附したクヽリの順序と、右側に附した六ノクヽリ中の紙の順序とについて考へたならば、自ら了解せらるゝであらう。

右の圖式中、縱線の右側なる一・二・三・四・五・六・七の横線の處で文章が接續せぬやうになる事は容易に了解せらるゝであらう。本書(更級日記錯簡考)に於て、錯簡の小口と稱するものは卽ち此の一・二・三・四・五・六・七の處をさすので、本書は又これらの小口を、それぞれ錯簡第一・錯簡第二・錯簡第三・錯簡第四・錯簡第五・錯簡第六・錯簡第七と呼ぶことにしてある。

なほ右圖式を簡單に表記して見よう。卽ち現在の御物本は次の順序に誤り綴ぢられてゐるのである。

一ノク、リ
二ノク、リ
●六ノク、リ（中の紙にも誤あり）現在の御物本では之を三のク、リと呼ふ
●五ノク、リ……………………現在の御物本では之を四のク、リと呼ぶ
●三ノク、リ……………………現在の御物本では之を五のク、リと呼ぶ
●四ノク、リ……………………現在の御物本では之を六のク、リと呼ぶ
七ノク、リ
八ノク、リ
九ノク、リ
十ノク、リ

かくして御物本には、二十枚ウ（表紙を第一枚とし、順に數へて）と二十一枚オとの堺に錯簡第一が生じ、二十二枚ウと二十三枚オとの堺に錯簡第二が生じ、二十五枚ウと二十六枚オとの堺に錯簡第三が生じ、二十八枚ウと二十九枚オとの堺に錯簡第四が生じ、三十枚ウと三十一枚オとの堺に錯簡第五が生じ、四十

枚ゥと四十一枚ォとの堺に錯簡第六が生じ、六十枚ゥと六十一枚ォとの堺に錯簡第七が生じたのである。（口繪參照）

今この綴ぢ誤の次第を想像するに、何時の時代かに（脇坂本書寫以前なること確かなれば、少くとも三百年以上の昔）御本の綴ぢ絲が切れて、その五・六の二クリ（現在の四ノク、リと三ノク、リ）が拔出し、其の上、六ノク、リ（現在の三ノク、リ）の中から、內部の紙二枚が拔出したのを、誤つて外部に重ね、且、五・六のク、リの順を顚倒して、そのまゝ二ノク、リの次へ挿入れたものと思はれる。

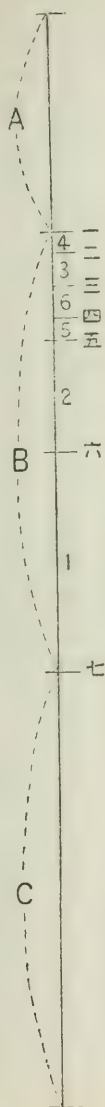
それ故、現在の御物本を、舊の形に復すには、先づその三・四の二ク、リ（正しかつた時には六・五のク、リであつたもの）を拔き出し、三ノク、リ（正しかつた時の六ノク、リ）の外部二枚の紙を內部へ入れ、次に三・四（正しかつた時の六・五）の順を顚倒し、之を一ノク、リから新たに一・二・三・四と數へて、四ノク、リの次へ入れゝばよいのである。

【備考】現在の御物本で三ノク、リ・四ノク、リ・五ノク、リ・六ノク、リと呼ぶ四つは、正しい形としての、三ノク、リ・四ノク、リ・五ノク、リ六ノク、リとはその實

質を異にする事を知らねばならぬ。それは一二六頁の表記で承知せられたい。

第十二節　錯簡七個處

前節に述べた如く、御物本の綴ぢ誤は更級日記に七個處の錯簡を作つた。前節に於ては此の錯簡を書物の構造の上から説明したが、此の節に於ては、之を更級日記本文の上から説明しようと思ふ。

前節に用ひたとほゞ同じ圖式を次に掲げる。前節の圖式は紙の順序の混亂を示したのであるが、次の圖式は、文章の混亂を示すのである。

備考　此の圖式のAは前節の圖式の一ノク、リ・二ノク、リの部分にあたり、Bは六ノク、リ・五ノク、リ・三ノク、リ・四ノク、リの部分にあたり、Cは七ノク、リ以下にあたる。

右の縦線を更級日記の全文とする。 Aは「東海道の旅」の記事の部分にあたる。Bは「歸京後の家庭生活」と「宮仕に關する事」との二つの記事の部分にあたる。Cは大體「結婚以後」の記事の部分にあたる。

右の中で、AとCとには錯簡がない。 Bにあたる部分の文章が混亂してゐる。その混亂を復舊するには、Bを六つの小部分に分割して（圖式一・二・三・四・五・六・七の横線で分割する如く）、その各部分を正しく置換へなければならぬ。 如何なる順に置換へれば正しくなるかを述べる前に、先づ各部分に於ける文の内容を示さう。

【備考】 一・二・三・四・五・六・七は文章を切斷する小口の符號で、本書に於て錯簡第一・錯簡第二などの稱を用ひるものが、それぞれ之にあたる事は、前篇の圖式に於ても述べた通りである。 4・3・6・5・2・1のアラビヤ數字を用ひた符號は、一の切口から二の切口までの間にある文章、二の切口から三の切口までの間にある文章以下之に準ずる等に對する符號である。

一……二（十） 宮仕の後、家にある姪や父母が案じられること。 里下り。 前世の有樣を夢に見ること（作者三十二歲）

二……三(3)　父が常陸の任を果して歸京した後、隱退の志をのべる言葉の末から始まり、西山の住居の有樣、母の剃髮、父の隱退、作者の宮仕に出で立つたこと(作者二十九歲から三十二歲まで)

三……四(6)　少女時代の空想からさめた述懷の言葉の續きから始まり、宮仕を退いて後、をり〳〵召されて出仕すること。內裏への御供。冬の一夜の宮仕の思出の言葉の中途で文脈他に轉ず(作者三十三歲から三十五六歲まで)

四……五(5)　前世の夢のつゞき。御佛名の夜の出仕。宮仕を退いた次第。少女時代の空想からさめて現實を悟る。その述懷の言葉の中途で文脈他に轉ず(作者三十二歲から三十三歲頃)

五……六(2)　眞面目に物詣もせず、物語にあるやうな人物を理想として夢の如き日を送つたこと。父が常陸介となつて下ること。その留守中、母と家に籠つて活した有樣。父の歸京。父が隱退の志を述べる言葉の中途で文脈他に轉ず(作者二十四五歲か

ら二十九歳)

六……七(1) 東海道の旅を終へて京に着き、その住居の有樣。物語を耽讀す。繼母の離緣。乳母の死。行成女の死。をばより源氏物語を貰ふ。前途の空想。怪しの猫のこと。火事。姉の死。父の官途停滯。暫く東山に移る。暫しの旅。父に代り繼母へ贈歌。とりとめなき事のみ思ひつづけ眞面目に物詣もしなかつた事を言ひさして文脈他に轉ず(作者十三歳の末から二十四五歳頃まで)

右各部の內容を通覽すれば、この順序に錯亂ある事は容易に肯かれるであらう。試に之を1 2 3 4 5 6 7の順に置換へて見れば、記事の次第が順序立つ事も容易に認められるであらう。卽ち更級日記は、初めこの順序に書かれたものが、前記の如く4 3 6 5 2 1の順に錯亂したのである。この錯亂は文章接續の上に於て、前記圖式の一・二・三・四・五・六・七の各橫線(此の橫線は前文の末の一字と次の文の初の一字との中間なる空隙に施した線なることを承知せら

れたい)の所で七個處の錯簡を作るに至つた。

次に本文を抄出して錯簡の位置を示す。本文中――を以て示し(一)(二)(三)(四)(五)(六)(七)の符號を附した所が、それぞれ圖式の一・二・三・四・五・六・七に當るのである。

錯簡第一の位置

世間流布の諸本について、その位置を求められる便宜のため、こゝに木板扶桑拾葉集本・木板群書類從集本・西門蘭溪本・日本文學全書本・國文大觀本・有朋堂文庫本の六種につき、その位置の頁と行とを示す。

〔扶〕十九丁ウ一行　〔群〕十五丁ウ五行　〔西〕十一丁ウ終行
〔日〕一三頁十二行　〔國〕八頁十二行　〔有〕四六二頁八行

あづまぢのみちのはてよりも――コノ次ニ東海道ノ旅及ビ京着ノ記事アリ――いとくらくなりて三條の宮のにしなる所につきぬひろびろとあれたる所のすきゝつる山々にもおとらすおほきにおそろしけなるみやま木とものやうにて(一)はゝなくなりにしめひともゝむまれしよりひとつにてよるはひたりみきにふしおきするもあはれに思いてられなとして心もそらになかめくらさる――コノ次ニ宮仕後、家ナル姪ヤ父母ノ案ジラレルコト、里下リ、前世

ノ様ヲ夢ミルコトナドノ記事アリ――

錯簡第二の位置

〔扶〕二十丁ゥ終行末　〔群〕十七丁ォ九行　〔西〕十三丁ォ六行
〔日〕十五頁五行　〔國〕九頁十行　〔有〕四六三頁十一行

はゝなくなりにしめひどもゝ――コノ次ニ宮仕後、家ナル姪ヤ父母ノ案ジラレルコト、里下リ、前世ノ様ヲ夢ミルコトノ記事アリ――と見てのちきよ水にねむころにまいりつかうまつらましかはさきの世にそのみてらに佛ねむし申けむちからにをのつからようも(二)おこかましく見えしかは我はかくてとちこもりぬへきとのみのこりなけに世を思ひいふめるに心ほそさたえす――コノ次ニ父常陸ヨリ帰リテ後ノ住居ナル西山ノ家ノ有様、母ノ剃髪、父ノ隠退、作者宮仕ニ出デタツテ我ガ家ヲ思フ記事アリ――

錯簡第三の位置

〔扶〕二十三丁ォ五行　〔群〕十九丁ゥ九行　〔西〕十五丁ォ六行
〔日〕十七頁七行　〔國〕十頁十五行　〔有〕四六五頁十一行

おこがましく見えしかは――コノ次ニ父隱退ノ志ヲノベルコト、西山ノ家ノ有樣、母の剃髮、父ノ隱退、作者宮仕ニ出デタチテ我ガ家ヲ思フ記事アリ――こひしくおぼつかなくのみおぼゆ〔三〕くるをしいかによしなかりける心なりと思しみはてゝまめ〳〵しくすくすとならはさてもありはてす――コノ次ニ宮仕ヲ退イテ後、ヲリ〳〵召サレテ出仕スルコト、内裏ヘノ御供、冬ノ一夜召サレテ出仕シタ思ヒ出ノ記事ノ中途マデアリ――

錯簡第四の位置

〔扶〕二十五丁オ六行　〔群〕二十二丁オ七行　〔西〕十七丁オ四行
〔日〕一九頁八行　〔國〕一二頁二行　〔有〕四六七頁十行

くるをしいかによしなかりける心なりと思しみはてゝ――コノ次ニ宮仕ヲ退イテ後ヲリ〳〵召サレテ出仕スルコト、内裏ヘノ御供ノ記事アリ――冬になりて月なくゆきもふらすなからほしのひかりにそらさすかにくまなくさえわたりたる夜のかきり殿の御方にさふらふ人〳〵と物語りしあかしつゝあくれはたち〔四〕やあらましいといふかひなくまうてつかうまつることもなく

てやみにき――コノ次ニ御佛名ノ夜ノ出仕、宮仕ヲ退イタ次第、少女時代ノ空想カラサメテ現實ヲ悟ルコト、ソノ述懷ノ言葉ノ中途マデアリ――

錯簡第五の位置

〔扶〕二十六丁ウ八行　〔群〕二十三丁ウ八行　〔西〕十八丁ウ二行
〔日〕二一一頁三行　〔國〕一一三頁二行　〔有〕四六九頁五行

やあらましいといふかひなくまうてつかうまつることもなくてやみにき――コノ次ニ御佛名ノ夜ノ出仕、宮仕ヲ退イタ次第、少女時代ノ空想カラサメテ現實ヲサトルコトノ記事アリ――ひかる源氏はかりの人はこの世におはしけりやはかほる大將の宇治にかくしすへ給へきもなき世なりあな物（五）くるをやくにて物まうてをわつかにしてもはか〳〵しく人のやうならむともねむせられすこのころの世の人は十七八よりこそ經よみをこなひもすれ――コノ次ニ作者ガ眞面目ニ物詣モセズ、物語中ノ人物ヲ理想トシテ夢ノ如キ日ヲ送リシコト、父ガ常陸介トナッテ下ッタコト、父ノ歸京、及ビ父ガ隱退ノ志ヲノベル言葉ノ中途マデノ記事アリ――

錯簡第六の位置

〔扶〕三十四丁ゥ六行　〔群〕三十一丁ゥ四行　〔西〕二十五丁ォ九行
〔日〕二九頁一行　〔國〕一七頁十五行　〔有〕四七六頁九行

くるをやくにて――コノ次ニ作者ガ眞面目ニ物詣モセズ、物語中ノ人物ヲ理想トシテ夢ノ如キ日ヲ送リシコト、父ガ常陸介トナッテ下ッタコト、父ノ歸京ナドノ記事アリ――たいらかにまちつけたるうれしさもかきりなけれと人のうへにても見しにおいおとろへて世にいてましらひしは(六)みやこの内とも見えぬ所のさまなりありもつかすいみしうものさはかしけれともいつしかと思し事なれはものかたりもとめて見せよ〳〵とはゝをせむれは三條の宮にしそくなる人の衞門の命婦とてさふらひけるたつねてふみやりたれはめつらしかりてよろこひて御前のをおろしたるとてわさとめてたきさうしともすゝりのはこのふたにいれておこせたり――コノ次ニ作者ガ二十四五歳頃マデノ生活ノ記事アリ――

錯簡第七の位置

〔扶〕五十丁ゥ三行　〔群〕四十五丁ォ四行　〔西〕三十八丁ゥ五行
〔日〕四四頁十行　〔國〕二七頁終行　〔有〕四九一頁九行

みやこの内とも――コノ次ニ作者十三歳ヨリ二十四五歳マデノ記事、父ニ代リテあさくらやノ歌ヲ去リシ繼母ニ贈ル記事アリ――かやうにそこはかとなきことを思つゝ〳〵わかれ〳〵しつゝまかてしを思いてけれは
月もなく花も見さりし冬の夜の心にしみてこひしきやなそ
我もさ思ことなるに云々(以下錯簡ナクシテ終ニ至ル)

第十三節　錯簡訂正と本文の接續

前節の圖式で說明した如く更級日記はBの部分に於て文章が不合理に六分割せられ、それが前後錯亂した結果、文章の上に錯簡第一から第七までの接續せざる所を生ずるに至つた。從つてB內の六部分を正しく置換へれば、此の七個處がすべて接續するやうになるわけである。今その接續の模樣を一覽するため、次の方法を用ひる。

一、更級日記の全文を八部分(前節の圖式の符號によりて、Aと、4・3・6・5・2・1(卽ちB)と、Cと、合計八部分)に分割する。

二、此の八部分の文章を、中略して、首尾の句だけ書き、各部分に一行づつを與へて八行に並べ記す。卽ち次の通り、

A.〔あづまぢのみちのはてよりも……中略……………みやま木どものやうにて

B.
4. はゝなくなりにしめひどもも……中略……………をのづからようも
3. おこがましく見えしかば…………中略…………こひしくおぼつかなくのみおぼゆ
6. くるをし…………中略……………人〳〵と物がたりしあかしつゝあくれはたち
5. やおらまし…………中略……薫大將の宇治に隱しすゑ給べきもなき世なりゐな物
2. ●くるをやくにて物詣をわつかにしても…中略…老ひ衰へて世に出でまじらひしは
1. 都の内とも見えぬ所のさまなり……中略…………そこはかとなきことを思つゞく●

C.〔わかれ〳〵しつゝまかでしを思出でければ……下略(以下終マデ錯簡ナシ)

さて前揭の本文を行を追うて讀んで行けば從來の更級日記のまゝで、卽ち錯簡の形である(その錯簡は各行末から次行へ移る所にそれ〴〵現はれてゐる)

が、之をA・1・2・3・4・5・6・7・Cの順に讀めば、

A あづまぢのみちのはてよりも……中略……みやま木どものやうにて都[1]の内とも見えぬ所のさまなり……中略……そこはかとなきことを思つゞく[2]くるをやくにて物詣を僅にしても……中略……老い衰へて世に出でまじらひしはおこがましく見えしかば……[3]中略……こひしくおぼつかなくのみおぼゆ。[4]はゝなくなりにしめひども……中略……をのづからようも[5]やあらまし……中略……薫大將の宇治に隱しすゑ給べきもなき世なり、おな物くるをし[6]……中略……人／＼と物がたりしあかしつゝあくればたち C わかれ／＼しつゝまかでしを……下略

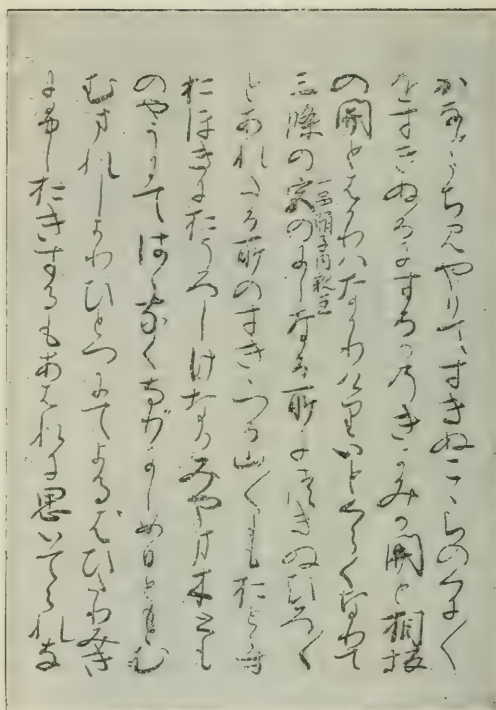
右の如く接續して語句も文章もよく整ふのである。たゞ一個處1から2へ移る接續「思つゞくくるをやくにて」は語をなさぬ。之は紙の變り目にあたる處である爲、定家が書寫の際に、前の紙の最後の一字「く」を、次の紙の最初へ誤つて二度書いたもので、つまりくが一字衍字となつたのである。さればこゝは「思ひつゞくるをやくにてぞ、即ち「思ひつゞける事を仕事にして」とか、そんな事

ばかり思ひつゞけてゐて」とかいふ意味なのである。

第十四節　錯簡考究の困難

數百年間世に流布して來た更級日記は、すべて上述の錯簡を持つてゐる。若し定家卿筆の原本が、圖書寮に藏する摸寫本の如く、各紙面の字數及び製本の形まで原本そのまゝに作られて世に流布してあつたならば、錯簡は今日を待たずして發見せられたのであらう。然るにすべての寫本が、原本よりも大形に作られ、その一枚に寫し取る文字の分量が多くなつた爲に、錯簡の小口が、みな紙面の中に紛れてしまつた。その有様は、以下次々に挿んだ脇坂本錯簡の圖版に於て見る通りである。私の調べた、所ではかく錯簡が紙面内に紛れた寫本で最も古いものは脇坂本である。

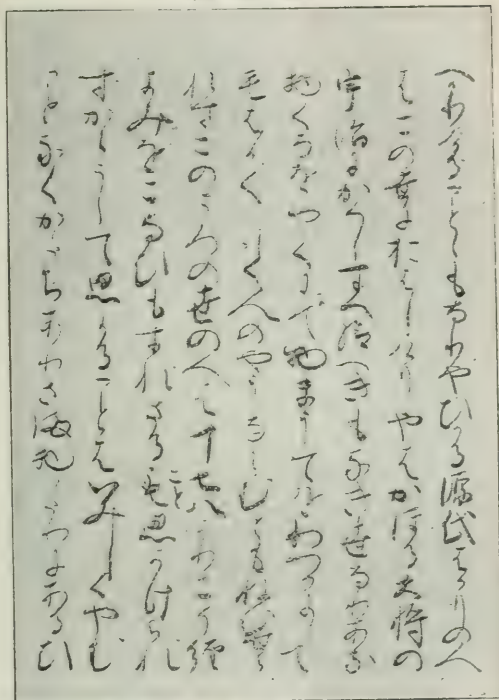
脇坂本は、かく錯簡を紙面内に紛れさせてしまつたけれど、併し本文を忠實に寫してあるから、錯簡の小口を發見するに甚だ都合がよい。然るにそれ以後の寫本になると、錯簡の小口の或處に改刪を施して、そこを塗りつぶしてしま

つた。その最も著しい一つの例は、錯簡第五の「あな物くるをやくにて物まうてをわつかにしても」といふ所である。彰考館本はこゝに貼紙を施して「をの下落字あるべし」と考勘し、拾葉集本及び類從本は「あな物くるをや。くにて物まうでをわつかにしても」と改め、元祿十七年板本は「あなくるをしや。國にて物まうでをわづかにしても」と改め、圓頓本・西門本は「くるをし」を「くるほし」としてあるが、他は元祿十七年板本と同樣に改めてゐる。脇坂本にも一四二頁の圖版に見る如く「やくにて」の「に」の下に、小字で「に」が一字書

錯簡第一
（七行目）

脇坂本十七枚裏

入れてあるが、これは後人の朱書で、異本發生以後に書加へられたもの、此の本の本來の面目ではない。

錯簡第五
（四行目）

脇坂本二十七枚表

「あな物くるをやくにて」となつてゐれば、如何にも語句が整はぬから、こゝが錯簡の小口ではないかとの見當もつくが、「あなくるほしや。國にて物まうでをわづかにしても」と改められ、しかも「國」と漢字までであてられると、表面上文章の形が整うて見えるのである。

更級日記は錯簡を生ずる以前、即ち初め定家が寫した時に於てすら「傳々之間

字誤甚多」きものとなつてゐた。その後更に傳寫せらるゝ間に、誤字・脱字・二重寫し等が頗る多くなつて錯簡の小口以外にも讀み解き難い處が甚だ多いのである。それを徒らに私意によつて改刪を施した爲に、遂に錯簡の小口までも塗りつぶしてしまつたのである。

錯簡第二

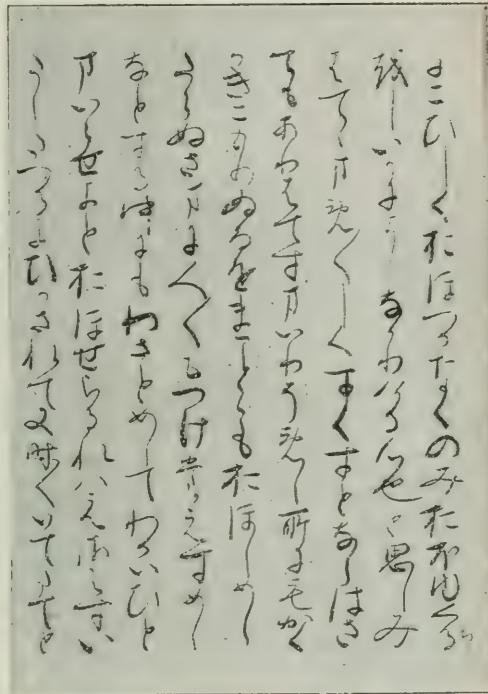
（五行目）

脇坂本十九枚裏

かゝる次第故、錯簡の考究は頗る困難な事柄であつた。私は先づ更級日記を數回熟讀玩味して、全文を内容の上から大小約七十の部分に分け、之を大括弧・小括弧で樣々に括つて見た。一方又更級日記語句索引を作つて、怪しい語句の檢索

を試みた。語句の檢索を助けてくれたものは脇坂本である。併し語句の調査は錯簡考究の上に餘り大した效果はなかつた。此の仕事の上に最も有效

錯簡第三
（一行目）

脇坂本二十二枚裏

であつたものは第四節にあげた年表である。これは更級日記時代の人の手に成つた記錄、及び其の時代の事を記した史料によつて作つたのである。かくして大體の推定は、試みたものの、それは飽くまで推定であり、且、不完全なものであつた。此の推定を補正して最後の斷案を下し得たのは、錯簡の根原なる御物本を拜観し得たからである。しかもそれは「古本

の捜索に努めよと教へられた佐々木信綱博士の師恩に負ふもの、深く銘して忘る能はざるところである。

錯簡第四
〔五行日本〕

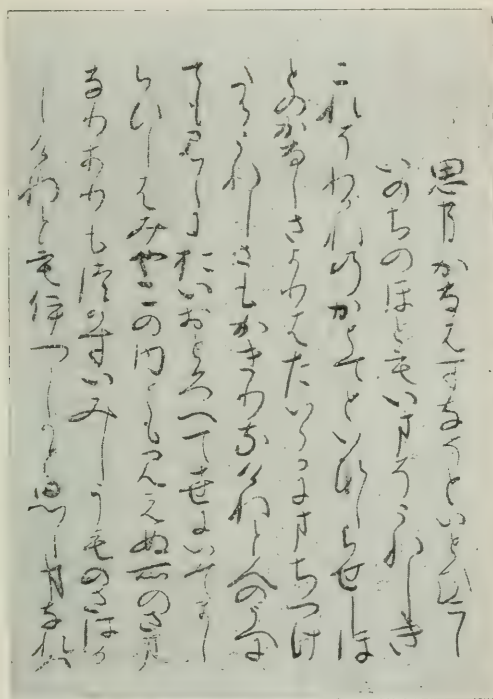
脇坂本二十四枚表

以下いさゝか蛇足の嫌はあるが、錯簡の部分を解釋せんとして、古人の苦しまれた跡を窺ふ料として諸本の書入から二三の例をあげて見よう。

錯簡第一

ひろ／＼とあれたる所のすきゝつる山々にしもおとらすおほきにおそろしけなるみやま木とものやうにて・はゝなくなりにしめひともゝ云々

〔井上文雄？朱書〕「やうにて」こゝにていひさしたり

錯簡第二

「おのつからようも・おこかましく見えしかは」

〔或本朱書〕「ようも」の下脱文あるべし

錯簡第三

「こひしくおほつかなくのみおほゆ・くるをしいかによしなかりける云々」

錯簡第六

（七行目）

――錯簡第五ノ圖版ハ第一ノ次ニ出ス――

脇坂本三十六枚裏

諸本多く「……おぼゆ。くちをし……」と改む。

錯簡第四

「あくれはたち・やあらまし」

〔或本朱書〕 脫文か。「たちやあらまし」の「あら」は「いで」か。

錯簡第七

（六行目）

鵜坂本五十六枚裏

〔彥麿本・歌堂文庫本其の他の書入〕「たちは立后のことか」

〔或本書入〕是もあやまりなり、このわたり脫文ありげにてきゝわきがたし。

錯簡第五

「あな物・くるをやくにて物まうてをわつかにしても」

〔或本書入〕「物くるをやくにて」の――の處を國と改め、國は上總なりと註す。

此の條についてはなほ一四一頁參照。

錯簡第六

「おいおとろへて世にいてましらひしは・みやこの內とも見えぬ所のさまなり」

〔或本書入〕老いてなほ世の事務にたづさはりてあるは見苦しくて、優美になれたる都の中の風とも見えかぬるさまなり。

錯簡第七

「かやうにそこはかとなきことを思つゝく・わかれ〳〵しつゝまかてしを思いてけれは

月もなく花も見さりし冬のよの心にしみてこひしきやなそ」

〔彰考館本〕「わかれ〳〵しつゝ」この語異本になし。

〔或本朱書〕按ずるに「わかれ〳〵しつゝ」は繼母に別れたることにて、此の歌は父の歌か。

〔著者いふ。此の處錯簡を復舊すれば、「わかれ」は作者が宮仕の朋輩に別れる事、歌は作者の歌として明瞭に意味がとれる〕

右の如く從來解しかねた點が、錯簡の復舊によつて明かに解し得ることとなつた。且又、錯簡の小口以外にも、從來解しかねた語句は澤山あるが、これも復舊した文によつて讀みなほせば、釋然として解し得るものが少くない。要するに更級日記は、復舊した形によつて、更に新しく研究をしなければならぬ。

第四章　御物本更級日記

第十五節　御物本更級日記本文

次ニアゲタ本文ハ活字ノ都合上變態假名ヲ普通ノ假名ニ改メタダケデ、他ハ嚴密ニ御物本ノママデアル。御物本ニハ處々傍註ガアルガ、ココニハ見易クスル爲ニ傍線ヲ以テ其ノ位置ヲ示シ、註文ハ上欄ニ取出シテアル　本文中ニ(三一オ)(三一ウ)ナド割入レテアルハ、御物本ノ丁數ヲ示スモノデ、(三一オ)トアル以上ノ文ハ三一枚目表ニ書カレタ分、(三一ウ)以上ハ三一枚目裏ニ書カレタ分デアル。

あつまちのみちのはてよりも猶おくつかたにおいゝてたる人いか許かはあやしかりけむをい

かにおもひはしめける事にか世中に物かたりといふ物のあんなるをいかて見はやとおもひつゝつれ〳〵なるひるまよひゐなとにあねまゝはゝなとやうの人〳〵のその物かたりかのものかたりひかる源氏のあるやうなと(二オ)ところ〳〵かたるをきくにいとゝゆかしさまされとわかおもふまゝにそらにいかてかおほえかたらむいみしく心もとなきまゝにとうしんにやくしほとけをつくりてゝあらひなとして人まにみそかにいりつゝ京にとくあけ給て物かたりのおほく候なるあるかきり見せ給へと身をすてゝぬかをつきいのり申すほとに(二ウ)十三になるとしのほらむとて九月三日かとてしていまたちといふ所にうつる年ころあそひなれつるところをあらはにこほちゝらしてたちさはきて日のいりきはのいとすこくきりわたりたるにくるまにのるとてうち見やりたれは人まにはまいりつゝぬかをつきしやくし佛のたち給へるを見すてたてまつるかなしくてひとしれすうちなかれぬかとてしたる(四オ)所はめくりなとも なくてかりそめのかやゝのしとみなともなしすたれかけまくなとひきたり南はゝるかに野の方見やらるひむかし西はうみちかくていとおもしろしゆふきり立渡ていみしうおかしけれはあさいなともせすかた〳〵見つゝこゝをたちなむこともあはれにかなしきにおなし月の十五日あめかきくらしふるにさかひをいてゝしも(四ウ)つけのくにのいかたといふ所にとまりぬ

「しもつけ」ノけハさノ誤

まのしてら
まのゝてうノ
如クモ見ユ

いほなともうきぬはかりに雨ふりなとすれはおそろしくていもねられす野中にをかたちたる所にたゝ木そみつたてるその日は雨にぬれたる物ともほしくにゝたちをくれたるひと〳〵まつとてそこに日をくらしつ十七日のつとめてたつ昔しもつさのくにゝまのしてらといふ人すみけりひきぬのを千むら万(五オ)むらをらせさらさせけるか家のあととてふかき河を舟にてわたるむかしの門のはしらのまたのこりたるとておほきなるはしらかはのなかによつたてり

ひと〳〵うたよむをきゝて心のうちに

くちもせぬこのかはゝしらのこらすは
むかしのあとをいかてしらまし

その夜はくろとのはまといふ所にとまる(五ウ)かたつかたはひろ山なる所のすなこはる〳〵としろきに松原しけりて月いみしうあかきに風のをともいみしう心ほそし人〳〵おかしかりてうたよみなとするに

まとろましこよひならてはいつか見む
くろとのはまの秋のよの月

そのつとめてそこをたちてしもつさのくにとむさしとのさかひにてあるふとゐかはといふか

傍線ノ所次ノ註アリ
定｜後大學頭文章博士今泰號和泉殿云々
著者云、定ハ定義ニ｜ハ義チ音讀シテギトシキノ略體ナル｜チ書キシモノナルベシ

原本ヽと文字小サク且虫クヒノ爲ワヅカニ見ユ

かみのせまつさとの(六八オ)わたりのつにとまりて夜ひとよ舟にてかつ〳〵物なとわたすめのとなる人はおとこなともなくなしてさかひにてこうみたりしかはいとなれてへちにのほるいとこひしけれはいかまほしく思にせうとなる人いたきてゐていきたりみな人はかりそめのかりやなといへと風すくましくひきわたしなとしたるにこれはおとこなともそはねは(六八ウ)いとてはなちにあら〳〵しけにてとまといふ物をひとへうちふきたれは月のこりなくさしいりたるに紅のきぬうへにきてうちなやみてふしたる月かけさやうの人にはこよなくすきていとしろくきよけにてめつらしとおもひてかきなてつゝうちなくをいとあはれに見すてかたくおもへといそきゐていかるゝ心地いとあかすわりなしおもかけにおほえてかなしけれは月のけうも(七オ)おほえすくんしふしぬつとめて舟に車かきすへてわたしてあなたのきしにくるまひきたてゝをくりにきつる人〳〵これよりみなかへりぬのほるはとまりなとしていきわかるるほとゆくもとまるもみなゝきなとすおさな心地にもあはれに見ゆ今はむさしのくにゝなりぬことにおかしき所も見えすはまもすなこしろくなともなくこひちのやうにてむらさきおふヽと(七ウ)きく野もあしおきのみたかくおいてむまにのりてゆみもたるすゑ見えぬまてたかくおいしけりて中をわけゆくにたけしはといふ寺ありはるかにはゝさうなといふ所のらうのあ

原本すゝきうノ四字朱點アリ

とのいしすゑなとありいかなる所そとゝへはこれはいにしへたけしはといふさか也くにの人のありけるを火たきやの火たく衛しにさしたてまつりたりけるに御前の庭をはくとてなとや(八オ)くるしきめを見るらむわかくにゝ七三つくりすへたるさかつほにさしわたしたるひたえのひさこのみなみ風ふけはきたになひき北風ふけは南になひきにしふけは東になひき東ふけは西になひくを見てかくてあるよとひとりこちつふやきけるをその時みかとの御むすめいみしうかしつかれ給たゝひとりみすのきはにたちいて給てはしらに(八ウ)よりかゝりて御覧するにこのをのこのかくひとりこつをいとあはれにいかなるひさこのいかになひくならむといみしうゆかしくおほされけれはみすをゝしあけてあのをのこゝちよれとめしけれはかしこまりてかうらんのつらにまいりたりけれはいひつることいまひとかへりわれにいひてきかせよとおほせられけれはさかつほのことをいまひとかへり申けれは我(九オ)ゐていきて見せよさいふやうありとおほせられけれはかしこくおそろしと思けれとさるへきにやありけむおいたてまつりてくたるにろんなく人をひてくらむと思てその夜勢多のはしのもとにこの宮をすへたてまつりてせたのはしをひとまはかりこほちてそれをとひこえてこの宮をかきおいたてまつりて七日七夜といふにむさしのくにゝいきつきにけり(九ウ)みかとときききみこうせ給ひ

ぬとおほしまとひもとめ給に武藏のくにの衞しのをのこなむいとかうはしき物をくひにひきかけてとふやうにゝけけると申いてゝこのをのこをたつぬるになかりけりろんなくもとのくにゝこそゆくらめとおほやけよりつかひくたりてをふに勢たのはしこほれてえゆきやらす三月といふにむさしのくにゝいきつきてこのをのこをたつぬるに(十オ)このみこおほやけつかひをめして我さるへきにやありけむこのをのこの家ゆかしくてゐてゆけといひしかはゐてきたりいみしくこゝありよくおほゆこのをのこつみしれうせられは我はいかてあれとこれもさきの世にこのくにゝあとをたるへきすくせこそありけめはやかへりておほやけにこのよしをそうせよとおほせられけれはいはむ方なくてのほりてみかとに(十ウ)かくなむありつるとそうしけれはいふかひなしそのをのこをつみしてもいまはこの宮をとりかへしみやこにかへしたてまつるへきにもあらすたけしはのをのこにいけらむ世のかきり武藏のくにをあつけとらせておほやけこともなさせしたゝ宮にそのくにをあつけたてまつらせ給よしの宣旨くたりにけれはこの家を內裏のことくつくりてすませたてまつりける(十一オ)家を宮なとうせ給にけれは寺になしたるをたけしはてらといふ也その宮のうみ給へることもはやかてむさしといふ姓をえてなむありけるそれよりのち火たきやに女はゐる也とかたる野山あしおきのなかを

原にゐて、、ノ二字朱點アリ

わくるよりほかのことなくてむさしとさかみとの中にゐてあすた河といふ在五中将のいさことゝはむとよみけるわたりなり中将のしふには(十一ウ)すみた河とあり舟にてわたりぬれはさかみのくにゝなりぬにしとみといふ所の山ゑよくかきたらむ屏風をたてならへたらむやう也かたつかたは海はまのさまもよせかへる浪のけしきもいみしうおもしろしもろこしかはらといふ所もすなこのいみしうしろきを二三日ゆく夏はやまとなてしこのこくうすくにしきをひけるやうになむさきたるこれは(十二オ)秋のすゑなれは見えぬといふに猶ところ〳〵はうちこほれつゝあはれけにさきわたれりもろこしかはらに山となてしこもさきけむこそなと人〳〵おかしかるあしから山といふは四五日かねておそろしけにくらかりわたれりやう〳〵いりたつふもとのほとたにそらのけしきはか〳〵しくも見えすえもいはすしけりわたりていとおそろしけなり(十二ウ)ふもとにやとりたるに月もなくくらき夜のやみにまとふやうなるにあそひ三人いつくよりともなくいてきたり五十許なるひとり二十許なる十四五なるとありいほのまへにからかさをさゝせてすへたりをのことも火をともして見れはむかしこはたといひけむかまことといふかみいとなかくひたひいとよくかゝりていろしろくきたなけなくてさてもありぬへき(十三オ)しもつかへなとにてもありぬへしなと人〳〵あはれかるにこゑすへてにるものなくそらにすみのほりてめてたくうたをうたふ人〳〵いみしうあはれかりてけちかくて人〳〵もてけうするにゝしくにのあそひはえかゝらしなといふをきゝてなにはわたりに

原本あふにノ三字朱點アリ

くらふれはとめてたくうたひたり見るめのいときたなけなきにこゑさへにるものなく（十三ウ）うたひてさはかりおそろしけなる山中にたちてゆくを人〳〵あかす思てみなゝくをおさなき心地にはましてこのやとりをたゝむことさへあかすおほゆまたあかつきよりあしからをこゆまいて山のなかのおそろしけなる事いはむ方なし雲はあしのしたにふまる山のなから許の木のしたのわつかなるにあふひのたゝみすちはかりあるを世はなれて（十四オ）かゝる山中にしもおいけむよと人〳〵あはれかる水はその山に三所そなかれたるからうしてこえいてゝせき山にとゝまりぬこれよりは駿河也よこはしりの關のかたはらにいはつほといふ所ありえもいはすおほきなるいしのよほうなる中にあなのあきたる中よりいつる水のきよくつめたきことかきりなしふしの山はこのくに也わかおいゝてし（十四ウ）くにゝてはにしをもてに見えし山也その山のさまいと世に見えぬさまなりさまことなる山のすかたのこむしやうをぬりたるやうなるにゆきのきゆる世もなくつもりたれはいろこきゝぬにしろきあこめきたらむやうに見えて山のいたゝきのすこしたひらきたるよりけふりはたちのほるゆふくれは火のもえ立も見ゆきよみかせきはかたつかたは（十五オ）海なるに關屋ともあまたありてうみまてくきぬきしたりけふりあふにやあらむきよみかせきの浪もたかくなりぬへしおもしろきことかきりなしたこの浦は浪たかくて舟にてこきめくるおほ井かはといふわたりあり水の世のつねならすすりこなとをこくてなかしたらむやうにしろき水はやくなかれたりふし河といふはふしの

天らう、
原文ら文字ちノ如ク見ユ。
但シ此ノ他ニ
モちノ如クニ
書ケルら文字
二三アリ

山より(十五ウ)おちたる水也そのくにの人のいてゝかたろやうひとゝせころ物にまかりたり
しにいとあつかりしかはこの水のつらにやすみつゝ見れは河上の方よりきなる物なかれきて
物につきてとゝまりたるを見れはほくなりとりあけて見れはきなるかみにしてこくうるわ
しくかゝれたりあやしくて見れはらいねんなるへきくにともをちもくのことみなかきて(十
六オ)このくにらいねんあくへきにもかみなして又そへて二人をなしたりあやしあさましと
思てとりあけてほしておさめたりしをかへる年のつかさめしにこのふみにかゝれたりしひと
つたかはすこのくにのかみとありしまゝなるを三月のうちになくなりて又なりかはりたるも
このかたはらにかきつけられたりし人なりかゝる事なむありし(十六ウ)らいねんのつかさめ
しなとはことしこの山にそこはくの神〴〵あつまりてない給なりけりと見給へしめつらかな
る事にてさふらふとかたるぬましりといふ所もすか〴〵とすきていみしくわつらひいてゝと
うたうみにかゝるさやのなか山なとこえけむほともおほえすいみしくゝるしけれは天らう、と
いふ河のつらにかりやつくりまうけたりけれはそこにて日ころ(十七オ)すくるほとにそやう
やうをこたる冬ふかくなりたれは河風けはしくふきあけつゝたえかたくおほえけりそのわた
りしてはまなのはしについたりはまなのはしくたりし時はくろ木をわたしたりしこのたひは
あとたに見えねは舟にてわたるいり江にわたりしはし也とのうみはいといみしくあしく(十
七ウ)浪たかくていり江のいたつらなるすともにこと物もなく松原のしけれるなかより浪の

よせかへるもいろ／＼のたまのやうに見えまことに松のすゑよりなみはこゆるやうに見えていみしくおもしろしそれよりかみはゐのはなといふさかのえもいはすわひしきをのほりぬればみかはのくにのたかしのはまといふやつはしは名のみしてはしの方もなくなにの(十八オ)見所もなしふたむらの山の中にとまりたる夜おほきなるかきの木のしたにいほをつくりたれは夜ひとよいほのうへにかきのおちかゝりたるを人／＼ひろひなとす宮ちの山といふ所こゆるほと十月つこもりなるに紅葉ちらてさかりなり

　あらしこそふきこさりけれみやちの山
　またもみちはのちらてのこれる

參河と尾張となるしかすかのわたり(十八ウ)けに思わつらひぬへくおかしおはりのくになるみのうらをすくるにゆふしほたゝみちにみちてこよひやとらむもちうけんにしほみちきなはこゝをもすきしとあるかきりはしりまとひすきぬみのゝくにゝなるさかひにすのまたといふわたりしてのかみといふ所につきぬそこにあそひともいてきて夜ひとようた／＼ふにもあしからなりし思いてられてあはれに(十九オ)こひしきことかきりなし雪ふりあれまとふにものゝけうもなくてふわのせきあつみの山なとこえて近江國おきなかといふ人の家にやとりて四五日ありみつさかの山のふもとによるひるしくれあられふりみたれて日のひかりもさやかならすいみしう物むつかしそこをたちていぬかみかむさきやすくるもとなといふ所／＼なにと

原本傍線ノ所ニ次ノ傍註アリ一品脩子内親王

なくすきぬ(十九ウ)水うみのおもてはる〳〵としてなてしまちくふしまなどいふ所の見えたるいとおもしろし勢多のはしみなくつれてわたりわつらふあはつにとゝまりてしはすの二日京にいるくらくいきつくへくとさるの時許にたちてゆけは關ちかくなりて山つらにかりそめなるきりかけといふ物したるかみより丈六の佛のいまたあらつくりにおはするか(二十オ)かほはかり見やられたりあはれに人はなれていつこともなくておはするほとけかなとうち見やりてすきぬこゝらのくに〳〵をすきぬるにするかのきよみか關と相坂の關とはかりはなかりけりいとくらくなりて三條の宮のにしなる所につきぬひろ〳〵とあれたる所のすきゝつる山〳〵にもおとらすおほきにおそろしけなるみやま木ともゝのやうにて(二十ウ)

◉以上ハ御物本ノ「一ノクヽリ」ト「二ノクヽリ」トノ二重ネニ書カレタ本文デアル。御物本ハコヽカラ以下四ツノクヽリガ綴ヂ誤ッテアル。故ニ紙數四十枚(表裏八十面)ノ間ニ錯簡七個處ヲ生ジタ。今一六一頁以下ニ此ノ八十面ヲ上下對照シテ示ス。上段ナルハ錯簡ノマヽノ順序、下段ナルハコレヲ正シタ順序デアル。前ノ「みやま木とものやうにて」カラ上段ニツヅケテ讀メバ錯簡本從來ノスベテノ更級日記ノ狀態ヲ知リ得ベク、下段ニツヅケテ讀メバ、ココニ初メテ復舊セラレタ正シイ更級日記ノ狀態ヲ知リ得ルノデアル。

各面ノ行數及ビ一行ノ字數ハ御物本ト同ジク組ンデアル。各面ノ下ニ記シタ數字ハ上段下段トモ正シイ丁ヅケヲ示シタモノ、下ナルハ順ヲ追ウテ進ミ、上ナルハ順次ガ錯亂シテヰル。先ヅ錯簡第一ノ處デハ二十丁ウラカラ五十四丁オモテニツヅキ、錯簡第二ノ處デハ五十五丁ウラカラ五十一丁オモテニツヅキ、錯簡第三ノ處デハ五十三丁ウラカラ五十八丁オモテニツヾキ、錯簡第四ノ處デハ六十丁ウラカラ五十六丁オモテニツヅキ、錯簡第五ノ處デハ五十七丁ウラカラ四十一丁オモテニツヅキ、錯簡第六ノ處デハ五十丁ウラカラ二十一丁オモテニツヅキ、錯簡第七ノ處デハ四十丁ウラカラ六十一丁オモテニツヅイテヰル。此ノ錯簡ノ處ハ本文ノ傍ニ※印ヲ附シ、欄外ニ註シテオク。口繪四以下ト、ソレゾレ對照セラレヨ。

御物本ノ本文ニアル傍註ハ、スベテ下段ノ文ニツイテ欄外ニ示シ、上段ノ文ニツイテハ、傍線ヲ以テ其ノ所在ヲ示スニ止メ、註文ハ之ヲ省略シタ。

※錯簡第一

下段傍線ノ處京
本ニハ次ノ傍註
アリ
寛仁四年有閏
十二月
長和二年正月
廿七日新一品
宮自按察家遷
給三條宮

下段傍線ノ處原
本次ノ註アリ
上總大輔後拾
遺作者中宮大
進從五上高階
成行女
孝標朝臣爲上
總時爲女仍號
上總

※はゝなくなりにしめひともゝむまれ
しよりひとつにてよるはひたりみきに
ふしおきするもあはれに思いてられ
なとして心もそらになかめくらさる
たちきゝかいまむ人のけはひして
いといみしくものつゝまし十日
はかりありてまかてたれはてゝはゝ
すひつに火なとをこしてまちゐたり
けりくろまよりおりたるをうち
見ておはする時こそ人めも見えさふらひなとも

（五十四オ）

ありけれこの日ころは人こゑもせす
まへに人かけも見えすいと心ほそく
わひしかりつるかうてのみもまろか身
をはいかゝせむとかするとうちなくを
見るもいとかなしつとめてもけふ
はかくておはすれはうちと人お
ほくこよなくにきわゝしくもなり
たるかなとうちいひてむかひゐたるも
いとあはれになにのにほひのある
にかとなみたくましうきこゆ

（同　ウ）

みやこの内とも見えぬ所のさまなり
ありもつかすいみしうものさはか
しけれともいつしかと思し事なれは
ものかたりもとめて見せよ〳〵とはゝ
をせむれは三條の宮にしそく
なる人の衛門の命婦とてさふらひ
けるたつねてふみやりたれはめつ
らしかりてよろこひて御前のをお
ろしたるとてわさとめてたきさう
しともすゝりのはこのふたにいれて

（二十一オ）

をこせたりうれしくいみしくてよる
ひるこれを見るよりうちはしめ
又〳〵も見まほしきにありもつかぬ
みやこのほとりにたれかは物かたり
もとめ見する人のあらむまゝはゝ
なりし人は宮つかへせしかくたり
しなれは思しにあらぬことゝもなと
ありて世中うらめしけにてほかに
わたるとていつゝはかりなるちこ

（同　ウ）

下段傍線ノ處原本ニハ次ノ註アリ
治安元年

（五十五オ）

ひしりなとすらさきの世のことゆめ
に見るはいとかたかなるをいとかう
あとはかないやうにはか〱しからぬ心地
にゆめに見るやうきよ水のらい
堂にゐたれは別當とおほしき人
いてきてそこはさきの生にこのみ
てらのそうにてなむありし佛師に
てほとけをいとおほくつくりたて
まつりしくとくによりてありしす
さうまさりて人とむまれたるなり

（同　ウ）

このみたうの東におはする丈六の
佛はそこのつくりたりし也はくを
をしさしてなくなりにしそとあ
ないみしさはあれにはくをした
てまつらむといへはなくなりにしかは
こと人はくをしたてまつりてこと人
くやうもしてしと見てのちきよ水に
ねむころにまいりつかうまつらまし
かはさきの世にそのみてらに佛ねむ
し申けむちからにをのつからようも

（二十二オ）

ともなとしてあはれなりつる心のほと
なむわすれむ世あるましきなと
いひて梅の木のつまちかくていと
おほきなるをこれか花のさかむおり
はこむよといひをきてわたりぬるを
心の内にこひしくあはれ也と思つゝ
しのひねをのみなきてその年も
かへりぬいつしか梅さかなむこむとあ
りしをさやあるとめをかけてまち
わたるに花もみなさきぬれとをとも

（同　ウ）

せす思わひて花をおりてやる
たのめしを猶やまつへき霜
かれし梅をも春はわすれさりけり
といひやりたれはあはれなることゝ
もかきて
猶たのめ梅のたちえはちきりをかぬ
おもひのほかの人もとふなり
その春世中いみしうさはかしう
てまつさとのわたりの月かけあはれ
に見し

※錯簡第二

下段傍線ノ處原本ニハ次ノ註アリ
権大納言記 三月十九日卯刻病者氣絕悲歎之甚不知所爲

下段傍線ノ處原本次ノ註アリ
1 四月九日歛観 隆寺北地
2 長家
右ノ四月九日云々ハ前頁ノ註ノツヅキナリ

おこかましく見えしかは我はかくて[※]
とちこもりぬへきそとのみのこりな
けに世を思ひいふめるに心ほそさた
えす東は野のはる〴〵とあるにひむ
かしの山きはゝひえの山よりしてい
なりなといふ山まてあらはに見え
わたり南はならひのをかの松風
いとみゝちかう心ほそくきこえて
内にはいたゝきのもとまて田とい
ふものゝひたひきならすをとなと
ゐ中の心ちして

（オ一十五）

いとおかしきに月のあかき夜なとは
いとおもしろきをなかめあかし
くらすにしりたりし人さとゝをく
なりてをともせすたよりにつけて
なにことかあらむとつたふる人に
おとろきて

　思いてゝ人こそとはね山さとの
　まかきのおきに秋風はふく

といひにやる十月になりて京にう
つろふにゝあまにになりておなし

（ウ　同）

めのとも三月ついたちになくなり
ぬせむ方なく思なけくに物かたりの
ゆかしさもおほえすなりぬいみ
しくなきくらして見いたしたれは
ゆふ日のいとはなやかにさしたるに
さくらの花のこりなくちりみたる

　ちる花も又こむ春は見もやせむ
　やかてわかれし人そこひしき

又きけは侍従の大納言の御むすめ

（オ三十二）

[1]なくなり給ひぬなり殿の中将[2]のおほ
しなけくなるさまわかものゝかなし
きおりなれはいみしくあはれなりと
きくのほりつきたりし時これ手
本にせよとてこのひめきみの御てを
とらせたりしをさ夜ふけてねさ
めさりせはなとかきてとりへ山
たにゝけふりのもえたゝははか
なく見えしわれとしらなむと
いひしらすおかしけにめてたく

（ウ　同）

家の内なれとかたことにすみはなれて
ありてゝはたゝ我をおとなにしすへ
て我は世にもいてましらはすかけ
にかくれたらむやうにてゐたるを見
るもたのもしけなく心ほそくお
ほゆるにきこしめすゆかりある
所になにとなくつれ〴〵に心ほそく
てあらむよりはとめすをこたいのおや
は宮つかへ人はいとうき事也と思て

（オ二十五）

すくさするを今の世の人はさのみ
こそはいてたてさてもをのつから
よきためしもありさてても心見よと
いふ人〳〵ありてしふ〳〵にいたし
たてらるまつ一夜まゐるきくの
こくうすき八はかりにこきかいねり
をうへにきたりさこそ物かたりに
のみ心をいれてそれを見るよりほか
にゆきかよふるいしそくなとたに
ことになくこたいのおやとものかけ

（ウ　同）

かき給へるを見ていとゝなみたをそへ
まさるかくのみ思くんしたるを心も
なくさめむと心くるしかりてはゝ物
かたりなともとめて見せ給けるに
をのつからなくさみゆくむらさき
のゆかりを見てつゝきの見まほ
しくおほゆれと人かたらひなとも
えせすたれもいまたみやこなれぬ
ほとにてえ見つけすいみしく心も
となくゆかしくおほゆるまゝにこの

（二十四オ）

源氏の物かたり一のまきよりして
みな見せ給へと心の内にいのるおやの
うつまさにこもり給へるにもこと事
なくこの事を申ていてむまゝに
この物かたり見はてむとおもへと見え
すいとくちおしく思なけかるゝに
をはなる人のゐ中よりのほりたる
所にわたいたれはいとうつくしう
おいなりにけりなとあはれかり

（ウ　同）

下段――ノ處原本ハ空白ニシテ傍ニ細微ニ一中消シト書ケリ

はかりにて月をも花をも見るより
ほかの事はなきならひにたちいつる
ほとの心地あれかにもあらすうつゝとも
おほえてあかつきにはまかてぬさと
ひたる心地には中〳〵さたまりたらむ
さとすみよりはおかしき事をも見
きゝて心もなくさみやせむと思おり〳〵
ありしをいとはしたなくかなし
かるへきことにこそあへかめれとおも
へといかゝせむしはすになりて

〔五十三オ〕

又まいるつほねしてこのたひは日
ころさふらふうへには時〳〵よる〳〵
ものほりてしらぬ人の中にうち
ふしてつゆまところまれすはつかしう
ものゝつゝましきまゝにしのひて
うちなかれつゝあかつきには夜ふ
かくおりてひくらしてゝのおいおと
ろへて我をことしもたのもしからむ
かけのやうに思たのみむかひゐたる
にこひしくおほつかなくのみおほゆ

〔ウ　同〕

めつらしかりてかへるになにをかたてま
つらむまめ〳〵しき物はえさなか
りなむゆかしくし給なるものをたて
まつらむとて源氏の五十餘巻ひつ
にいりなからさい――とをきみ
せり河しらゝあさうつなといふ物
かたりともひとふくろとりいれてえて
かへる心地のうれしさそいみしきや
はしる〳〵わつかに見つゝ心もえす
心もとなく思源氏を一の巻よりして

〔二十五オ〕

人もましらす木ちやうの内にう
ちふしてひきいてつゝ見る心地き
さきのくらひもなにゝかはせむひるは
ひくらしよるはめのさめたるかき
り火をちかくともしてこれを見る
よりほかの事なけれはをのつから
なとはそらにおほえうかふをいみ
しきことに思に夢にいときよけ
なるそうのきなる地のけさきたるか
きて法華經五巻をとくならへと

〔ウ　同〕

※くるなしいかによしなかりける心也
と思しみはてゝまめ〳〵しくすくすと
ならはさてもありはてすまいり
そめし所にもかくかきこもりぬる
をまことゝもおほしめしたらぬ
さまに人〳〵もつけたえすめし
なとする中にもわさとめしてわかい
ひとまいらせよとおほせらるれは
えさらすいたしたつるにひかされて
又時〳〵いてたてとすきにし方の

（五十八オ）

やうなるあいなたのみの心をこりを
たにすへきやうもなくてさすかに
わかい人にひかれており〳〵さしいつる
にもなれたる人はこよなくなにこ
とにつけてもありつきかほに我は
いとわかうとにあるへきにもあらす
又おとなにせらるへきおほえも
なく時〳〵のまらうとにさしはなた
れてすゝろなるやうなれとひとへに
そなたひとつをたのむへきならねは

（同　ウ）

いふと見れと人にもかたらすなら
はむとも思かけす物かたりの事をのみ
心にしめてわれはこのころわろき
そかしさかりにならはかたちもかきり
なくよくかみもいみしくなかくな
りなむひかるの源氏のゆふかほ
宇治の大将のうき舟の女きみのや
うにこそあらめと思ける心まついと
はかなくあさまし五月ついたちころ
つまちかき花たちはなのいとしろく

（六十二オ）

ちりたるをなかめて
時ならすふる雪かとそなかめまし
花橘のかほらさりせは
あしからといひし山のふもとに
くらかりわたりたりし木のやうに
しけれる所なれは十月許の紅葉
よもの山邊よりもけにいみしく
おもしろくにしきをひけるやう
なるにほかよりきたる人のとまいり

（同　ウ）

下段傍線ノ處原本ニハ次ノ註アリ
妍子枇杷殿
禎子陽明門院

下段傍線ノ處原本「治安二年」ト註アリ

（五十九オ）

我よりまさる人あるもうらやましく
もあらす中／＼心やすくおほえて
さんへきおりふしまいりてつれ／＼な
るさんへき人と物かたりなとして
めてたきこともおかしくおもしろ
きおり／＼もわか身はかやうにたち
ましりいたく人にも見しられむに
もはゝかりあんへけれはたゝおほ
かたの事にのみきゝつゝすくすに

（同　ウ）

内の御ともにまいりたるおりあり
あけの月いとあかきにわかねむし
申すあまてる御神は内にそおは
しますなるかしかゝるおりにまい
りておかみたてまつらむと思て四月
はかりの月のあかきにいとしのひて
まいりたれははかせの命婦はしる
たよりあれはとうろの火のいとほ
のかなるにあさましくおい神さひて

（二十七オ）

つるみちにもみちのいとおもしろき
所のありつるといふにふと

いつこにもおとらし物をわかやとの
世を秋はつるけしき許は

物かたりの事をひるはひくらし思
つゝけよるもめのさめたるかきりは
これをのみ心にかけたるに夢に見ゆ
るやうこのころ皇太后宮の一品の宮の
御れうに六角堂にやり水をなむ
つくるといふ人あるをそはいかにと

（同　ウ）

とへはあまてる御神をねむしませ
いふと見て人にもかたらすなに
ともおもはてやみぬるいといふかひ
なし春ことにこの一品宮をなか
めやりつゝ

さくとまちちりぬとなけく春はたゝ
わかやとかほに花を見るかな

三月つこもりかたつちいみに人の
もとにわたりたるにさくらさかりに

さすかにいとよう物なといひゐたるか人ともおほえす神のあらはれたまへるかとおほゆ又の夜も月のいとあかきにふちつほのひむかしのとをゝしあけてさへき人〳〵物かたりしつゝ月をなかむるにむめつほの女御のゝほらせ給なるをとなひいみしく心にくゝいうなるにも故宮の

（六十オ）

おはします世ならましかはかやうにのほらせ給はましなと人〳〵いひいつるけにいとあはれなりかし

　あまのとを雲井なからもよそに見て
　むかしのあとをこふる月かな

冬になりて月なくゆきもふらすなからほしのひかりにそらさすかにくまなくさえわたりたる夜のかきり殿の御方にさふらふ人〳〵と物かたりしあかしつゝあくれはたち

（同　ウ）

おもしろくいまゝてちらぬもありかへりて又の日

　あかさりしやとの櫻を春くれて
　ちりかたにしもひとめ見し哉

といひにやる花のさきちるおりことにめのとなくなりしおりそかしとのみあはれなるにおなしおりなくなり給し侍従大納言の御むすめの手を見つゝすゝろにあはれなるに

（二十八オ）

五月許夜ふくるまて物かたりをよみておきゐたれはきつらむ方も見えぬにねこのいとなこうないたるをおところきて見れはいみしうおかしけなるねこありいつくよりきつるねこそと見るにあねなる人あなかま人にきかすないとおかしけなるねこなりかはむとあるにいみしうひとなれつゝかたはらにうちふしたりたつぬる人やあるとこれをかく

（同　ウ）

※やあらましいといふかひなくまうて
つかうまつることもなくてやみにき
十二月廿五日宮の御佛名にめしあれは
その夜はかりと思てまいりぬしろき
きぬともにこきかいねりをみなきて
四十餘人はかりいてゐたりしるへし
いてし人のかけにかくれてあるか中
にうちほのめいてあか月にはまかつ
ゆきうちゝりつゝいみしくはけしく
さえこほるあかつきかたの月の

（五十六オ）

ほのかにこきかいねりのそてにうつれ
るもけにぬるゝかほなりみちすから
　年はくれ夜はあけかたの月かけの
　そてにうつれるほとそはかなき
かうたちいてぬとならはさても宮つかへ
の方にもたちなれ世にまきれたる
もねちけかましきおほえもなき
ほとはをのつから人のやうにもお
ほしもてなさせ給やうもあらまし
おやたちもいと心えすほともなく

（同　ウ）

してかふにすへて下すのあたりにも
よらすつとまへにのみありて物もき
たなけなるはほかさまにかほを
むけてくはすあねおとゝの中につと
まとはれておかしかりらうたかる
ほとにあねのなやむことあるにもの
さはかしくてこのねこをきたおもて
にのみあらせてよはねはかしかまし
くなきのゝしれともなをさるにて
こそはと思てあるにわつらふあね

（二十九オ）

おとろきていつらねこはこちゐてこと
あるをなとゝとへは夢にこのねこ
のかたはらにきてをのれはしゝうゐ
大納言殿の御むすめのかくなりたる
なりさるへきえんのいさゝかありて
この中のきみのすゝろにあはれと
思いて給へはたゝしはしこゝにある
をこのころ下すのなかにありていみ
しうわひしきことゝいひていみしう
なくさまはあてにおかしけなる

（同　ウ）

こめすへつさりとてそのありさまの
たちまちにきら〳〵しきいきほひ
なとあんへいやうもなくいとよし
なかりけるすゝろ心にてもことの
ほかにたかひぬるありさまなり
かし
いくちたび水の田せりをつみしかは
思しことのつゆもかなはぬ
とはかりひとりこたれてやみぬそのゝ
ちはなにとなくまきらはしきに
ものかたりのことも

（五十七オ）

うちたえわすられて物まめやかなる
さまに心もなりはてゝそなとて
おほくの年月をいたつらにてふし
をきしにをこなひをも物まうて
をもせさりけむこのあらましこと
とても思しことゝもはこの世にあん
へかりけることゝもなりやひかる源氏
はかりの人はこの世におはしけり
やはかほる大将の宇治にかくし
すへ給へきもなき世なりあな物

（同　ウ）

ひとゝ見えてうちおとろきたれは
このねこのこゑにてありつるかいみしく
あはれなる也とかたり給をきくに
いみしくあはれ也そのゝちはこのねこ
を北をもてにもいたさす思かしつく
たゝひとりゐたる所にこのねこかむか
ひゐたれはかいなてつゝ侍従大納言の
ひめきみのおはするな大納言殿にし
らせたてまつらはやといひかくれはかほ
をうちまもりつゝなこうなくも心の

（三十オ）

なしめのうちつけにれいのねこ
にはあらすきゝしりかほにあはれ也
世中に長恨歌といふふみを物かたり
にかきてある所あんなりときくに
いみしくゆかしけれとえいひよらぬに
さるへきたよりをたつねて七月七日
いひやる
ちきりけむ昔のけふのゆかしさに
あまの河なみうちいてつるかな
返し

（同　ウ）

∴くるなやくにて物まうてをわつかにし
てもはか〳〵しく人のやうならむとも
ねむせられすこのころの世の人は
十七八よりこそ經よみをこなひも
すれさること思かけられすからうし
て思よることはいみしくやむことなく
かたちありさま物かたりにあるひかる
源氏なとのやうにおはせむ人を
年にひとたひにてもかよはしたて
まつりてうき舟の女君のやうに山さ
とに

（四十一オ）

かくしすへられて花紅葉月雪を
なかめていと心ほそけにてめてたか
らむ御ふみなとを時〳〵まちみなと
こそせめとはかり思つゝけあらまし
事にもおほえけりおや　なり
なはいみしうやむことなくわか身も
なりなむなとたゝゆくゑなき事を
うち思すくすにおやからうしてはる
かにとほきあつまになりて年ころは
いつしか思やうにちかき所になりたらは

（同　ウ）

たちいつるあまの河邊のゆかしさに
つねはゆゝしきこともわすれぬ
その十三日の夜月いみしくくまなく
あかきにみな人もねたる夜中許に
えんにいてゐてあねなる人そらを
つく〳〵となかめてたゝいまゆく衞な
くとひうせなはいかゝ思へきとゝふに
なまおそろしとおもへるけしきな
見てこと事にいひなしてわらひなと
してきけはかたはらなる所にさき

（三十一オ）

をふくるまとまりておきのは〳〵と
よはすれとこたへさなりよひわつら
ひてふえをいとおかしくふきすま
してすきぬなり
ふえのねのたゝ秋風ときこゆるに
なとおきのはにそよとこたへぬ
といひたれはけにとて
おきのはのこたふるまてもふきよらて
たゝにすきぬるふえのねそうき
かやうにあくるまてなかめあかいて

（同　ウ）

第十五節　御物本更級日記本文

下段傍線ノ處原本ニハ次ノ註アリ
治安三年
此火事無所見

下段傍線ノ處原本次ノ註アリ
萬壽元年歟

まつむねおく許かしつきたてゝゐて
くたりて海山のけしきも見せそれ
をはさる物にてわが身よりもたかう
もてなしかしつきて見むとこそ
おもひつれ我も人もすくせのつた
なかりければあり〱てかくはるかな
るくにゝなりにたりおさなかりし
時あつまのくにゝゐてくたりてたに
心地もいさゝかあしければこれをや
このくにゝ見すてゝまとはむとすらむと

（四十二オ）

思ふ人のくにのおそろしきにつけ
てもわか身ひとつならはやすらかな
らましをところせうひきくして
いはまほしきこともえいはすせまほ
しきこともえせすなとあるかわひ
しうもあるかなと心をくたきしに
いまはまいておとなになりにたるを
ゐてくたりてわかいのちもしらす京
のうちにてさすらへむはれいのこと
あつまのくにゐなかひとになりて

（ウ　同）

夜あけてそみな人ねぬるそのかへる
年四月の夜中はかりに火のことありて
大納言殿のひめきみと思かしつきし
ねこもやけぬ大納言殿のひめきみと
よひしかはきゝしりかほになきて
あゆみきなとせしかはてゝなりし
人もめつらかにあはれなる事也
大納言に申さむなとありしほとに
いみしうあはれにくちおしくおほゆ
ひろ〱とものふかきみ山のやうには

（三十二オ）

ありなから花紅葉のおりはよもの
山邊もなにならぬを見ならひた
るにたとしへなくせはき所の庭の
ほともなく木なともなきにいと心
うきにむかひなる所にむめこうはい
なとさきみたれて風につけてかゝえ
くるにつけてもすみなれしふるさと
かきりなく思いてらる

にほひくるとなりの風を身にしめて
ありしのきはのむめそこひしき

（ウ　同）

まとはむいみしかるへし京とても
たのもしうむかへとりてむと思ふるい
しそくもなしさりとてわつかになり
たるくになしゝ申すへきにもあら
ねは京にとゝめてなかきわかれにて
やみぬへき也京にもさるへきさまに
もてなしてとゝめむとは思よる事にも
あらすとよるひるなけかるゝをきく
心地花もみちのおもひもみなわす
れてかなしくいみしく思なけかる
れと

（オ三十四）

いかゝはせむ七月十三日にくたる
五日かねては見むも中／＼なへけれは
内にもいらすまいてその日はたち
さはきて時なりぬれはいまはとて
すたれをひきあけてうち見あはせ
てなみたをほろ／＼とおとしてや
かていてぬるを見をくる心地めもくれ
まとひてやかてふされぬるにとま
るをのこのをくりしてかへるにふと
ころかみに

（ウ　同）

その五月のついたちにあねなる人こ
うみてなくなりぬよそのことたにおさ
なくよりいみしくあはれと思わたるに
ましていはむ方なくあはれかなしと
おもひなけかるはゝなとはみなゝく
なりたる方にあるにかたみにとまりた
るおさなき人／＼を左右にふせたる
にあれたるいたやのひまより月のも
りきてちこのかほにあたりたるか
いとゆゝしくおほゆれはそてをうち

（オ三十三）

おほひていまひとりをもかきよせて
思そいみしきやそのほとすきてし
そくなる人の許よりむかしの人の
かならすもとめてをこせよとありしかは
もとめしにそのおりはえ見いてす
なりにしをいましも人のをこせたる
かあはれにかなしきことゝてかはね
たつぬる宮といふ物かたりをゝこせたり
まことにそあはれなるや返ことに
　うつもれぬかはねをなにゝたつねけむ

（ウ　同）

おもふ事心にかなふ身なりせは
　秋のわかれをふかくしらまし
とはかりかゝれたるをもえ見やられす
事よろしき時こそこしおれかゝり
たる事も思つゝけゝれともかくも
いふへき方もおほえぬまゝに
　かけてこそおもはさりしかこの世にて
　しはしもきみにわかるへしとは
とやかゝれにけむいとゝ人めも見えす
さひしく心ほそくうちなかめつゝい
つこはかりと

（四十四オ）

あけくれ思やる道のほともしりに
しかはゝるかにこひしく心ほそき
ことかきりなしあくるよりくるゝまて
東の山きはをなかめてすくす
八月許にうつまさにこもるに一條
よりまうつる道におとこくるまふた
つはかりひきたてゝ物へゆくにもろ
ともにくへき人まつなるへしすき
てゆくにすいしんたつものをゝこせて
　花見にゆくときみを見るかな

（同　ウ）

　こけのしたには身こそなりけれ
めのとなりし人いまはなにゝつけ
てかなとなく／＼もとありける所にかへり
わたるに
　ふるさとにかくこそ人はかへりけれ
　あはれいかなるわかれなりけむ
むかしのかたみにはいかてとなむ思
なとかきてすゝりの水のこほれはみ
なとちられてとゝめつといひたるに
　かきなかすあとはつらゝにとちてけり

（四十三オ）

　なにをわすれぬかたみとか見む
といひやりたる返ことに
　なくさむる方もなきさのはまちとり
　なにかうき世にあともとゝめむ
このめのとはか所見てなく／＼かへりたりし
　のほりけむのへは烟もなかりけむ
　いつこをはかとたつねてか見し
これをきゝてまゝはゝなりし人
　そこはかとしりてゆかねとさきにたつ
　なみたそみちのしるへなりける

（同　ウ）

下段傍線ノ處原本ニハ次ノ註アリ
定義朝臣

下段傍線ノ處原本ニハ次ノ註アリ
萬壽元年若二年歟

といはせたればかゝるほとの事はいら
へぬもひんなしなとあれは
　千くさなる心ならひに秋のゝの
とはかりいはせていきすきぬ七日さ
ふらふほともたゝあつまちのみ思ひ
やられてよしなしことからうしては
なれてたひらかにあひ見せ給へと
申すは佛もあはれときゝいれさせ
給けむかし冬になりてひくらし
あめふりくらいたる夜くもかへる風

（四十五オ）

はけしうゝちふきてそらはれて
月いみしうあかうなりてのきちか
きおきのいみしく風にふかれて
くたけまとふかいとあはれにて
　秋をいかに思いつらむ冬ふかみ
　あらしにまとふおきのかれはゝ
あつまより人きたり神拜といふ
わさしてくにの内ありきしに水
をかしくなかれたる野のはる／＼とある
に木むらのあるおかしき所かな

（同　ウ）

かはれたつぬる宮をこせたりし人
　すみなれぬのへのさゝはらあとはかも
　なく／＼いかにたつねわひけむ
これを見てせうとはその夜をくり
にいきたりしかは
　見しまゝにもえし煙はつきにしを
　いかゝたつねしのへのさゝはら
雪の日をへてふるころよしの山に
すむあまきみを思やる
　ゆきふりてまれの人めもたえぬらむ
よしのゝ山のみねのかけみち

（三十五オ）

かへるとしむ月のつかさめしにおやの
よろこひすへきことありしにかひなき
つとめておなし心におもふへき人の
もとよりさりともと思つゝあくるをま
ちつる心もとなさといひて
　あくるまつかねのこゑにもゆめさめて
　秋のもゝ夜の心地せしかな
といひたる返ことに
　あか月をなにゝまちけむ思事
なるともきかぬかねのをとゆへ

（同　ウ）

見せてとまつ思いてゝこゝはいつことか
いふとゝへはこしのひのもりとなむ申
すとこたへたりしが身によそへら
れていみしくかなしかりしかはむま
よりおりてそこにふた時なむな
かめられし

　とゝめをきてわかこと物や思けむ
　見るにかなしきこしのひのもり

となむおほえしとあるを見る心地
いへはさらなり返ことに

　こしのひをきくにつけてもとゝめをきし

（四十六オ）

　ちゝふの山のつらきあつまち

かうてつれ〳〵となかむるになとか物ま
うてもせさりけむはゝいみしかり
しこたいの人にてはつせにはあな
おそろしならさかにて人にとら
れなはいかゝせむいし山せき山こ
えていとおそろしくらまはさる
山ゐていてむいとおそろしやおや
のほりてともかくもとさしはなち
たる人のやうにわつらはしかりて

（同　ウ）

四月つこもりかたさるへきゆへありて
東山なる所へうつろふみちのほと
田のなはしろ水まかせたるもうへたるも
なにとなくあおみおかしう見えわた
りたる山のかけくらうまへちかう見
えて心ほそくあはれなるゆふくれ
くひないみしくなく

　たゝくともたれかくひなのくれぬるに
　山地をふかくたつれてはこむ

靈山ちかき所なれはまうてゝおかみ

（三十六オ）

たてまつるにいとくるしけれは山て
らなるいし井によりて手にむすひつゝ
のみてこの水のあかすおほゆるかなと
いふ人のあるに

　おく山のいしまの水をむすひあけて
　あかぬものとはいまのみやしろ

といひたれは水のむ人

　山の井のしつくにゝころ水よりも
　こは猶あかぬ心地こそすれ

かへりてゆふ日けさやかにさしたるに

（同　ウ）

（四十七オ）

わつかに清水にゐてこもりたりそ
れにもれいのくせはまことしかへい事
も思ひ申されすびかんのほとにて
いみしうさはかしうおそろしき
までおぼえてうちまどろみいりたるに
み帳の方のいぬふせきの内にあおき
をりものゝ衣をきてにしきをかし
らにもかつきあしにもはいたるそう
の別當とおぼしきかよりきてゆく
さきのあはれならむもしらす

（同ウ）

さもよしなし事をのみとうちむつ
かりてみ帳の内にいりぬと見てもうち
おどろきてもかくなむ見えつるとも
かたらす心にも思とゝめてまかでぬ
はゝ一尺の鏡をいさせてえゐて
まいらぬかはりにとてそうをいた
したてゝはつせにまうてさすめり
三日さふらひてこの人のあへからむ
さま夢に見せ給へなどいひてま
うでさするなめりそのほとは精

（三十七オ）

宮この方ものこりなく見やらるゝに
このしつくにゝこる人に京にかへる
とて心くるしけに思てまたつとめて
　山のはにいり日のかけはいりはてゝ
　心ほそくそなかめやられし
念佛するそうのあか月にぬかつく
なとのたうとくきこゆれはとをゝし
あけたれはほの／＼とあけゆく山きわ
こくらきこすゑともきりわたりて花
もみちのさかりよりもなにとなくしけり

（同ウ）

わたれるそらのけしきくもらはし
くおかしきにほとゝきすさへいとち
かきこすゑにあまたゝひないたり
　たれに見せたれにきかせむ山さとの
　このあかつきもおちかへる音も
このつこもりの日たにの方なる木のう
へにほとゝきすかしかましくないたり
　みやこにはまつらむ物を郭公
　けふ日ねもすになきくらすかな
なとのみなかめつゝもろともにある人

進せさすこのそうかへりて夢をた
に見てまかてなむかほいなきこといかゝ
かへりても申すへきといみしうぬかつき
をこなひてねたりしかは御帳の方
よりいみしうけたかうきよけに
おはする女のうるわしくさうそき
給へるかたてまつりしかゝみをひき
さけてこのかゝみにはふみやそひ
たりしとゝひ給へはかしこまりてふ
みもさふらはさりきこのかゝみをなむ

（四十八オ）

たへまつれと侍しとこたへたてまつれは
あやしかりける事かなふみそふへ
きものをとてこのかゝみをこなたに
うつれるかけを見よこれ見れはあは
れにかなしきそとてさめ〳〵となき
給を見れはふしまろひなき
なけきたるかけうつれりこのかけを
見れはいみしうかなしなこれ見よと
ていまかたつかたにうつれるかけを見
せたまへはみすともあおやかに木長

（同ウ）

たゝいま京にもきゝたらむ人あら
むやかくてなかむらむと思をこする
人あらむやなといひて
　山ふかくたれか思はをこすへき
　月見る人はおほからめとも
といへは
　ふかき夜に月見るおりはしられとも
　まつ山さとそ思やらるゝ
あか月になりやしぬらむと思ほとに
山の方より人あまたくるをとす
おとろきて

（三十八オ）

見やりたれはしかのえんのもとまて
きてうちないたるちかうてはなつか
しからぬものゝこゑなり
　秋の夜のつまこひかぬるしかのねは
　とを山にこそきくへかりけれ
しりたる人のちかきほとにきてかへりぬ
ときくに
　またひとめしらぬ山邊の松風も
　をとしてかへるものとこそきけ
八月になりて廿よ日のあかつきかたの月

（同ウ）

をしいてたるしたよりいろ〳〵のきぬ
こほれいて梅さくらさきたるにうく
ひすこつたひなきたるを見せてこ
れを見るはうれしなとの給となむ
見えしとかたるなりいかに見えけるそ
とたにみゝもとゝめす物はかなき
心にもつねにあまてる御神をねむ
し申せといふ人ありいつこにおは
します神佛にかはなとさはいへと
やう〳〵思ひわかれて人にとへは神に

（四十九オ）

おはします伊勢におはします紀
伊のくにゝきのこくさうと申すはこの
御神也さては内侍所にすへらい神
となむおはしますといふ伊勢の
くにまては思かくへきにもあらさ
なり内侍所にもいかてかはまいり
おかみたてまつらむそらのひかりを
ねむし申すへきにこそはなとうき
ておほゆしそくなる人あまにな
りてすかく院にいりぬるに冬ころ

（同　ウ）

いみしくあはれに山の方はこくらく
たきのおともにる物なくのみなかめ
られて
　思しる人に見せはや山さとの
　秋のよふかきありあけの月
京にかへりいつるにわたりし時は
水はかり見えし田ともゝみなかり
はてゝけり
　なはしろの水かけ許見えし田の
　かりはつるまてなかゐしにけり
十月つこもりかたにあからさまにきて

（三十九オ）

見れはこくらうしけれりしこのはと
ものこりなくちりみたれていみしく
あはれけに見えわたりて心ちよけに
さゝらきなかれし水もこのはにうつ
もれてあとはかり見ゆ
　水さへそすみたえにけるこのはちる
　あらしの山の心ほそさに
そこなる尼に春まていのちあらは
かならすこむ花さかりはまつゝけよ
なといひてかへりにしを年かへりて

（同　ウ）

なみたさへふりはへつゝそ思やる
　あらしふくらむ冬の山さと
返し
　わけてとふ心のほとの見ゆるかな
　こかけをくらき夏のしけりを
あつまにくたりしおやからうして
のほりて西山なる所におちつきたれ
はそこにみな渡て見るにいみし
うゝれしきに月のあかき夜ひと
よものかたりなとして

（五十オ）

かゝる世もありける物をかきりとて
　きみにわかれし秋はいかにそ
といひたれはいみしくなきて
　思事かなはすなそといとひこし
　いのちのほともいまそうれしき
これそわかれのかとてといひしらせ
しほとのかなしさよりはたいらか
にまちつけたるうれしさもかきり
なけれと人のうへにても見しに
おいおとろへて世にいてましらひしは

（同ウ）

三月十餘日になるまてをともせねは
　ちきりをきし花のさかりをつけぬ哉
　春やまたこぬ花やにほはぬ
たひなる所にきて月のころ竹の
もとちかくて風のをとにめのみさめ
てうちとけてねられぬころ
　竹の葉のそよく夜ことにねさめして
　なにともなきに物そかなしき
秋ころそこをたちてほかへうつろひ
てそのあるしに

（四十オ）

　いつことも露のあはれはわかれしを
　あさ地かはらの秋そこひしき
まゝはゝなりし人くたりしくにの
名を宮にもいはるゝにこと人かよは
してのちも猶その名をいはるときゝ
ておやのいまはあいなきよしいひに
やらむとあるに
　あさくらやいまは雲井にきく物を
　猶木のまろかなのりをやする
かやうにそこはかなきことを思つゝく

（同ウ）

※錯簡第六
下段へ一字行ナ
ルベシ

下段「おや」ノ下
原本二字バカリ
白°本傍ニ細ク小
サクと文字見ユ
下段傍線ノ處原
本次ノ註アリ
長元五年二月
八日任常陸六
十　女子廿五

※みやこの内とも見えぬ所のさまなり
ありもつかすいみしうものさはか
しけれともいつしかと思し事なれは
ものかたりもとめて見せよ〳〵とはゝ
なせむれは三條の宮にしそく
なる人の衞門の命婦とてさふらひ
けるたつねてふみやりたれはめつ
らしかりてよろこひて御前のをお
ろしたるとてわさとめてたきさう
しともすゝりのはこのふたにいれて

（二十一オ）

をこせたりうれしくいみしくてよる
ひるこれを見るよりうちはしめ
又〳〵も見まほしきにありもつかぬ
みやこのほとりにたれかは物かたり
もとめ見する人のあらむまゝはゝ
なりし人は宮つかへせしかくたり
しなれは思しにあらぬことゝもなと
ありて世中うらめしけにてほかに
わたるとていつゝはかりなるちこ

（ウ　同）

くるをやくにて物まうてをわつかにし
てもはか〳〵しく人のやうならむとも
ねむせられすこのころの世の人は
十七八よりこそ經よみおこなひも
すれさること思かけられすからうし
て思よることはいみしくやむことなく
かたちありさま物かたりにあるひかる
源氏なとのやうにおはせむ人を
年にひとたひにてもかよはしたて
まつりてうき舟の女君のやうに山さとに

（四十一オ）

かくしすへられて花紅葉月雪を
なかめていと心ほそけにてめてたか
らむ御ふみなとを時〳〵まち見なと
こそせめとはかり思つゝけあらまし
事にもおほえけりおや　　なり
なはいみしうやむことなくわか身も
なりなむなとたゝゆくゑなき事を
うち思すくすにおやからうしてはる
かにとをきあつまになりて年ころは
いつしか思やうにちかき所になりたらは

（ウ　同）

ともなとしてあはれなりつる心のほと
なむわすれむ世あるましきなと
いひて梅の木のつまちかくていと
おほきなるをこれか花のさかむおり
はこむよといひをきてわたりぬるを
心の内にこひしくあはれ也と思つゝ
しのひねをのみなきてその年も
かへりぬいつしか梅さかなむこむとあ
りしをさやあるとめをかけてまち
わたるに花もみなさきぬれとをとも

（二十二オ）

せす思わひて花をおりてやる
たのめしを猶やまつへき霜
かれし梅をも春はわすれさりけり
といひやりたれはあはれなることゝ
もかきて
猶たのめ梅のたちえはちきりをかぬ
おもひのほかの人もとふなり
その春世中いみしうさはかしう
てまつさとのわたりの月かけあはれに見し

（ウ　同）

まつむねあく許かしつきたてゝゐて
くたりて海山のけしきも見せそれ
をはさる物にてわか身よりもたかう
もてなしかしつきて見むとこそ
おもひつれ我も人もすくせのつた
なかりけれはあり〳〵てかくはるかな
るくにゝなりにたりおさなかりし
時あつまのくにゝゐてくたりてたに
心地もいさゝかあしけれはこれをや
このくにゝ見すてゝまとはむとすらむと

（二十四オ）

思ふ人のくにのおそろしきにつけ
てもわか身ひとつならはやすらかな
らましをところせうひきくして
いはまほしきこともえいはすせまほ
しきこともえせすなとあるかわひ
しうもあるかなと心をくたきしに
いまはまいておとなになりにたるを
ゐてくたりてわかいのちもしらす京
のうちにてさすらへむはれいのこと
あつまのくにゐなかひとになりて

（ウ　同）

めのとも三月ついたちになくなり
ぬせむ方なく思なけくに物かたりの
ゆかしさもおほえすなりぬいみ
しくなきくらして見いたしたれは
ゆふ日のいとはなやかにさしたるに
さくらの花のこりなくちりみたる

　ちる花も又こむ春は見もやせむ
　やかてわかれし人そこひしき

又きけは侍従の大納言の御むすめ

（二十三オ）

なくなり給ひぬなり殿の中将のおほ
しなけくなるさまわかものゝかなし
きおりなれはいみしくあはれなりと
きくのほりつきたりし時これ手
本にせよとてこのひめきみの御てを
とらせたりしをさ夜ふけてねさ
めさりせはなとかきてとりへ山
たにゝけふりのもえたゝははか
なく見えしわれとしらなむと
いひしらすおかしけにめてたく

（同　ウ）

まとはむいみしかるへし京とても
たのもしうむかへとりてむと思ふるい
しそくもなしさりとてわつかになり
たるくにをしゝ申すへきにもあら
ねは京にとゝめてなかきわかれにて
やみぬへき也京にもさるへきさまに
もてなしてとゝめむとは思よる事にも
あらすとよるひるなけかるゝをきく
心地花もみちのおもひもみなわす
れてかなしくいみしく思なけかるれと

（四十三オ）

いかゝはせむ七月十三日にくたる
五日かねては見むも中〳〵なへけれは
内にもいらすまいてその日はたち
さはきて時なりぬれはいまはとて
すたれをひきあけてうち見あはせ
てなみたをほろ〳〵とおとしてや
かていてぬるを見をくる心地めもくれ
まとひてやかてふされぬるにとま
るをのこのをくりしてかへるにふと
ころかみに

（同　ウ）

かき給へるを見ていとゝなみたをそへ
まさるかくのみ思くんしたるを心も
なくさめむと心くるしかりてはゝ物
かたりなともとめて見せ給にけに
をのつからなくさみゆくむらさき
のゆかりを見てつゝきの見まほ
しくおほゆれと人かたらひなとも
えせすたれもいまたみやこなれぬ
ほとにてえ見つけすいみしく心も
となくゆかしくおほゆるまゝにこの

（二十四オ）

源氏の物かたり一のまきよりして
みなみせ給へと心の内にいのるおやの
うつまさにこもり給へるにもこと事
なくこの事を申ていてむまゝに
この物かたり見はてむとおもへと見え
すいとくちおしく思なけかるゝに
をはなる人のゐ中よりのほりたる
所にわたいたれはいとうつくしう
おいなりにけりなとあはれかり

（同　ウ）

おもふ事心にかなふ身なりせは
秋のわかれをふかくしらまし
とはかりかゝれたるをもえ見やられす
事よろしき時こそこしおれかゝり
たる事も思つゝけゝれともかくも
いふへき方もおほえぬまゝに
かけてこそおもはさりしかこの世にて
しはしもきみにわかるへしとは
とやかゝれにけむいとゝ人めも見えす
さひしく心ほそくうちなかめつゝいつこはかりと

（四十四オ）

あけくれ思やる道のほともしりに
しかはゝるかにこひしく心ほそき
ことかきりなしあくるよりくるゝまて
東の山きはをなかめてすくす
八月許にうつまさにこもるに一條
よりまうつる道におとこくるまふた
つはかりひきたてゝ物へゆくにもろ
ともにくへき人まつなるへしすき
てゆくにすいしんたつものをゝこせて
花見にゆくときみを見るかな

（同　ウ）

めつらしかりてかへるになにをかたて
まつらむまめ／＼しき物はまさなか
りなむゆかしくし給なるものをた
てまつらむとて源氏の五十餘巻ひつ
にいりなからさい――とをきみ
せり河しらゝあさうつなといふ物
かたりとものひとふくろとりいれてえて
かへる心地のうれしさそいみしきや
はしる／＼わつかに見つゝ心もえす
心もとなく思源氏を一の巻よりして

（二十五オ）

人もましらす木ちやうの内にう
ちふしてひきいてつゝ見る心地き
さきのくらひもなにゝかはせむひるは
ひくらしよるはめのさめたるかき
り火をちかくともしてこれを見る
よりほかの事なけれはをのつから
なとはそらにおほえうかふをいみ
しきことに思に夢にいときよけ
なるそうのきなる地のけさきたるか
きて法華經五巻をとくならへと

（同　ウ）

といはせたれはかゝるほとの事はいら
へにもひんなしなとあれは
　千くさなる心ならひに秋のゝの
とはかりいはせていきすきぬ七日さ
ふらふほともたゝあつまちのみ思ひ
やられてよしなしことからうしては
なれてたひらかにあひ見せ給へと
申すは佛もあはれときゝいれさせ
給けむかし冬になりてひくらし
あめふりくらいたる夜くもかへる風

（四十五オ）

はけしうゝちふきてそらはれて
月いみしうあかうなりてのきちか
きおきのいみしく風にふかれて
くたけまとふかいとあはれにて
　秋をいかに思いつらむ冬ふかみ
　　あらしにまとふおきのかれはゝ
あつまより人きたり神拜といふ
わさしてくにの内ありきしに水
おかしくなかれたる野のはる／＼とある
に木むらのあるおかしき所かな

（同　ウ）

いふと見れと人にもかたらすなら
はむとも思かけす物かたりの事をのみ
心にしめてわれはこのころわろき
そかしさかりにならはかたちもかきり
なくよくかみもいみしくなかくな
りなむひかるの源氏のゆふかほ
宇治の大將のうき舟の女きみのや
うにこそあらめと思ける心まついと
はかなくあさまし五月ついたちころ
つまちかき花たちはなのいとしろく

（二十六オ）

ちりたるをなかめて
　時ならすふる雪かとそなかめまし
　花橘のかほらさりせは
あしからといひし山のふもとに
くらかりわたりたりし木のやうに
しけれる所なれは十月許の紅葉
よもの山邊よりもけにいみしく
おもしろくにしきをひけるやう
なるにほかよりきたる人のとまいり

（同ウ）

見せてとまつ思いてゝこゝはいつことか
いふとゝへはこしのひのもりとなむ申
すとこたへたりしか身によそへら
れていみしくかなしかりしかはむま
よりおりてそこにふた時なむな
かめられし
　とゝめをきてわかこと物や思けむ
　見るにかなしきこしのひのもり
となむおほえしとあるを見る心地
いへはさらなり返ことに
　こしのひをきくにつけてもとゝめをきし

（四十六オ）

　ちゝふの山のつらきあつまち
かうてつれ〳〵となかむるになとか物ま
うてもせさりけむはゝいみしかり
しこたいの人にてはつせにはあな
おそろしならさかにて人にとら
れなはいかゝせむいし山せき山こ
えていとおそろしくらまはさる
山ゐていてむいとおそろしやおや
のほりてともかくもとさしはなち
たる人のやうにわつらはしかりて

（同ウ）

つるみちにもみちのいとおもしろき
所のありつるといふにふと

　いつこにもおとらし物をわかやとの
　世を秋はつるけしき許は

物かたりの事をひるはひくらし思
つゝけよるもめいさめたるかきりは
これをのみ心にかけたるに夢に見ゆ
るやうこのころ皇太后宮の一品の宮の
御れうに六角堂にやり水をなむ
つくるといふ人あるをそはいかにと

（二十七オ）

とへはあまてる御神をねむしませと
いふと見て人にもかたらすなに
ともおもはてやみぬるいといふかひ
なし春ことにこの一品宮をなか
めやりつゝ

　さくとまちちりぬとなけく春はたゝ
　わかやとかほに花を見るかな

三月つこもりかたつちいみに人の
もとにわたりたるにさくらさかりに

（同　ウ）

わつかに清水にゐてこもりたりそ
れにもれいのくせはまことしかへい事
も思ひ申されすひかんのほとにて
いみしうさはかしうおそろしき
までおほえてうちまところみいりたるに
み帳の方のいぬふせきの内にあおき
をりものゝ衣をきてにしきをかし
らにもかつきあしにもはいたるそう
の別當とおほしきかよりきてゆく
さきのあはれならむもしらす

（四十七オ）

さもよしなし事をのみとうちむつ
かりてみ帳の内にいりぬと見てもうち
おとろきてもかくなむ見えつるとも
かたらす心にも思とゝめてまかてぬ
はゝ一尺の鏡をいさせてゐて
まいらぬかはりにとてそうをいた
したてゝはつせにまうてさすめり
三日さふらひてこの人のあへからむ
さま夢に見せ給へなといひてま
うてさするなめりそのほとは精

（同　ウ）

下段「たへ丶まつれ」ノ字ハ原本ニてノ字ノ縦畫ヲ短縮シタルモノノ如ク見ユ

おもしろくいまゝてちらぬもあり
かへりて又の日
あかさりしやとの櫻を春くれて
ちりかたにしもひとめ見し哉
といひにやる花のさきちるおりことに
めのとなくなりしおりそかしと
のみあはれなるにおなしおりな
くなり給し侍従大納言の御むすめ
の手を見つゝすゝろにあはれなるに

（二十八オ）

五月許夜ふくるまて物かたりをよ
みておきゐたれはきつらむ方も見
えぬにねこのいとなこうないたるを
おとろきて見れはいみしうおかし
けなるねこありいつくよりきつる
ねこそと見るにあねなる人あな
かま人にきかすないとおかしけなる
ねこなりかはむとあるにいみしう
ひとなれつゝかたはらにうちふした
りたつぬる人やあるとこれをかく

（同ウ）

進せさすこのそうかへりて夢をた
に見てまかてなむかほいなきこといかゝ
かへりても申すへきといみしうぬかつき
をこなひてねたりしかは御帳の方
よりいみしうけたかうきよけに
おはする女のうるわしくさうそき
給へるかたてまつりしかゝみをひき
さけてこのかゝみにはふみやそひ
たりしとゝひ給へはかしこまりてふ
みもさふらはさりきこのかゝみをなむ

（四十八オ）

たへ丶まつれと侍しとこたへたてまつれは
あやしかりける事かなふみそふへ
きものをとてこのかゝみをこなたに
うつれるかけを見よこれ見れはあは
れにかなしきそとてさめ〳〵となき
給を見れはふしまろひなき
なけきたるかけうつれりこのかけを
見れはいみしうかなしなこれ見よと
ていまかたつかたにうつれるかけを見
せたまへはみすともあおやかに木長

（同ウ）

下段「すへら」ノ三字ハ原本すくいうノ組ヲ[illegible]ル

してかふにすへて下すのあたりにも
よらすつとまへにのみありて物もき
たなけなるはほかさまにかほた
むけてくはすあれおとゝの中につと
まとはれておかしかりらうたかる
ほとにあれのなやむことあるにもの
さはかしくてこのねこなきたおもて
にのみあらせてよはねはかしかまし
くなきのゝしれともなをさるにて
こそはと思てあるにわつらふあね

（二十九オ）

おとろきていつらねこはこちゐてこと
あるをなとゝとへは夢にこのねこ
のかたはらにきてをのれはしゝうの
大納言殿の御むすめのかくなりたる
なりさるへきえんのいさゝかありて
この中のきみのすゝろにあはれと
思いて給へはたゝしはしこゝにある
をこのころ下すのなかにありていみ
しうわひしきことゝいひていみしう
なくさまはあてにおかしけなる

（同　ウ）

なしいてたるしたよりいろ〳〵のきぬ
こほれいて様さくらさきたるにうく
ひすこつたひなきたるなと見せてこ
れを見るはうれしなとの絵となむ
見えしとかたるなりいかに見えけるそ
とたにみゝもとゝめす物はかなき
心にもつねにあまてる御神をねむ
し申せといふ人ありいつこにおは
します神仏にかはなとさはいへと
やう〳〵思ひわかれて人にとへは神に

（四十九オ）

おはします伊勢におはします紀
伊のくにゝきのこくさうと申すはこの
御神也さては内侍所にすへら神
となむおはしますといふ伊勢の
くにまては思かくへきにもあらさ
なり内侍所にもいかてかはまいり
おかみたてまつらむそらのひかりた
ねむし申すへきにこそはなとうき
ておほゆしそくなる人あまにな
りてすかく院にいりぬるに冬ころ

（同　ウ）

下段傍線ノ處原本次ノ註アリ
下句本
郎チ此ノ歌ハド
句ヲ上句ニヲキ
カヘテ意ヲトレ
トノ義ナリ
本トハ上句ノコ
ト

ひとゝ見えてうちおとろきたれは
このねこのころにてありつるかいみしく
あはれなる也とかたり給をきくに
いみしくあはれ也そのゝちはこのねこ
を北おもてにもいたさす思かしつく
たゝひとりゐたる所にこのねこかむか
ひゐたれはかいなてつゝ侍従大納言の
ひめきみのおはするな大納言殿にし
らせたてまつらはやといひかくれはかほ
をうちまもりつゝなこうなくも心の

(オ　十　三)

なしめのうちつけにれいのねこ
にはあらすきゝしりかほにあはれ也
世中に長恨歌といふゝみを物かたり
にかきてある所あんなりときくに
いみしくゆかしけれとえいひよらぬに
さるへきたよりをたつねて七月七日
いひやる
　ちきりけむ昔のけふのゆかしさに
　あまの河なみうちいてつるかな
返し

(ウ　　同)

なみたさへふりはへつゝそ思やる
あらしふくらむ冬の山さと
返し
　わけてとふ心のほとの見ゆるかな
　こかけをくらき夏のしけりを
あつまにくたりしおやからうして
のほりて西山なる所におちつきたれ
はそこにみな渡て見るにいみし
うゝれしきに月のあかき夜ひと
よものかたりなとして

(オ　十　五)

かゝる世もありける物をかきりとて
きみにわかれし秋はいかにそ
といひたれはいみしくなきて
　思事かなはすなそといとひこし
　いのちのほともいまそうれしき
これそわかれのかとてといひしらせ
しほとのかなしさよりはたいらか
にまちつけたるうれしさもかきり
なけれと人のうへにても見しに
おいおとろへて世にいてましらひしは

(ウ　　同)

たちいつるあまの河邊のゆかしさに
　つれはゆゝしきこともわすれぬ
その十三日の夜月いみしくゝまなく
あかきにみな人もねたる夜中許に
えんにいてゐてあねなる人そらを
つく〱となかめてたゝいまゆく衞な
くとひうせなはいかゝ思へきとゝふに
なまおそろしとおもへるけしきを
見てこと事にいひなしてわらひなと
してきけはかたはらなる所にさき

（三十一オ）

をふくるまとまりておきのはく〱と
よはすれとこたへさなりよびわつら
ひてふえをいとをかしくふきすま
してすきぬなり
　ふえのねのたゝ秋風ときこゆるに
　なとおきのはのそよとこたへぬ
といひたれはけにとて
　おきのはのこたふるまてもふきよらて
　たゝにすきぬるふえのねそうき
かやうにあくるまてなかめあかいて

（同　ウ）

おこかましく見えしかは我はかくて
とちこもりぬへきそとのみのこりな
けに世を思ひいふめるに心ほそさた
えす東は野のはる〱とあるにひむ
かしの山きはゝひえの山よりしてい
なりなといふ山まてあらはに見え
わたり南はならひのをかの松風
いとみゝちかう心ほそくきこえて
内にはいたゝきのもとまて田とい
ふもののゝひたひきならすをとなと
ゐ中の心ちして

（五十一オ）

いとをかしきに月のあかき夜なとは
いとおもしろきをなかめあかし
くらすにしりたりし人さとゝをく
なりてをともせすたよりにつけて
なにことかあらむとつたふる人に
おとろきて
　思いてゝ人こそとはれ山さとの
　まかきのおきに秋風はふく
といひにやる十月になりて京にう
つろふはゝあまになりておなし

（同　ウ）

下段傍線ノ處原本ニハ次ノ註アリ
諸子內親王
當今三皇女
母中宮嫄子崩
後也
御坐干關白殿
號一宮

夜あけてそみな人ねぬるそのかへる
年四月の夜中はかりに火のことありて
大納言殿のひめきみと思かしつきし
ねこもやけぬ大納言殿のひめきみと
よひしかはきゝしりかほになき
てあゆみきなとせしかはてゝなりし
人もめつらかにあはれなる事也
大納言に申さむなとありしほとに
いみしうあはれにくちおしくおほゆ
ひろ〳〵とものふかきみ山のやうには

（三十二オ）

ありなから花紅葉のおりはよもの
山邊もなにならぬを見ならひた
るにたとしへなくせはき所の庭の
ほともなく木なともなきにいと心
うきにむかひなる所にむめこうはい
なとさきみたれて風につけてかゝえ
くるにつけてもすみなれしふるさと
かきりなく思いてらる
　にほひくるとなりの風を身にしめて
ありしのきはのむめそこひしき

（ウ　同）

家の内なれとかたことにすみはなれて
ありてゝはたゝ我をおとなにしすへ
て我は世にもいてましらはすかけ
にかくれたらむやうにてゐたるを見
るもたのもしけなく心ほそくお
ほゆるにきこしめすゆかりある
所になにとなくつれ〳〵に心ほそく
てあらむよりはとめすをこたいのおや
は宮つかへ人はいとうき事也と思て

（二十五オ）

すくさするを今の世の人はさのみ
こそはいてたてさてもをのつから
よきためしもありさても心見よと
いふ人〳〵ありてしふ〳〵にいたし
たてらるまつ一夜まいるきくの
こくうすき八はかりにこきかいねり
をうへにきたりさこそ物かたりに
のみ心をいれてそれを見るよりほか
にゆきかよふるいしそくなとたに
ことになくこたいのおやとものかけ

（ウ　同）

その五月のついたちにあねなる人こ
うみてなくなりぬよそのことたにおさ
なくよりいみしくあはれと思わたるに
ましていはむ方なくあはれかなしと
おもひなけかるはゝなとはみなゝく
なりたる方にあるにかたみにとまりた
るおさなき人〳〵を左右にふせたる
にあれたるいたやのひまより月のも
りきてちこのかほにあたりたるか
いとゆゝしくおほゆれはそてをうち

（三十三オ）

おほひていまひとりをもかきよせて
思そいみしきやそのほとすきてし
そくなる人の許よりむかしの人の
かならすもとめてをこせよとありしかは
もとめしにそのおりはえ見いてす
なりにしをいましも人のをこせたる
かあはれにかなしきこととてかはね
たつぬる宮といふ物かたりをゝこせたり
まことにそあはれなるや返ことに
　うつもれぬかはねをなにゝたつねけむ

（ウ　同）

はかりにて月をも花をも見るより
ほかの事はなきならひにたちいつる
ほとの心地あれかにもあらすうつゝとも
おほえてあかつきにはまかてぬさと
ひたる心地には中〳〵さたまりたらむ
さとすみよりはおかしき事をも見
きゝて心もなくさみやせむと思おり〳〵
ありしをいとはしたなくかなし
かるへきことにこそあへかめれとおも
へといかゝせむしはすになりて

（三十五オ）

又まいるつほねしてこのたひは日
ころさふらふうへには時〳〵よる〳〵
ものほりてしらぬ人の中にうち
ふしてつゆまとろまれすはつかしう
ものゝつゝましきまゝにしのひて
うちなかれつゝあかつきには夜ふ
かくおりてひくらしてゝのおいおと
ろへて我をことしもたのもしからむ
かけのやうに思たのみむかひゐたる
にこひしくおほつかなくのみおほゆ

（ウ　同）

こけのしたには身こそなりけれ
めのとなりし人いまはなにゝつけ
てかなとなく〱もとありける所にかへり
わたるに
　ふるさとにかくこそ人はかへりけれ
　あはれいかなるわかれなりけむ
むかしのかたみにはいかてとなむ思
なとかきてすゝりの水のこほれはみ
なとちられてとゝめつといひたるに
　かきなかすあとはつらゝにとちてけり

（三十四オ）

　なにをわすれぬかたみとか見む
といひやりたる返ことに
　なくさむる方もなきさのはまちとり
　なにかうき世にあともとゝめむ
このめのとはか所見てなく〱かへりたりし
のほりけむのへは煙もなかりけむ
いつこをはかとたつねてか見し
これをきゝてまゝはゝなりし人
　そこはかとしりてゆかねとさきにたつ
　なみたそみちのしるへなりける

（同ウ）

はゝなくなりにしめひとももゝむまれ
しよりひとつにてよるはひたりみきに
ふしおきするもあはれに思いてられ
なとして心もそらになかめくらさる
たちきゝかいまむ人のけはひし
ていといみしくものつゝまし十日
はかりありてまかてたれはてゝはゝ
すひつに火なとをこしてまちゐたり
けりくるまよりおりたるをうち
見ておはする時こそ人めも見えさふらひなとも

（五十四オ）

ありけれこの日ころは人こゑもせす
まへに人かけも見えすいと心ほそく
わひしかりつるかうてのみもまろか身
をはいかゝせむとかするとうちなくを
見るもいとかなしつとめてもけふ
はかくておはすれはうちと人お
ほくこよなくにきわゝしくもなり
たるかなとうちいひてむかひゐたるも
いとあはれになにのにほひのある
にかとなみたくましうきこゆ

（同ウ）

かはれたつぬる宮をこせたりし人
すみなれぬのへのさゝはらあとはかも
なく〳〵いかにたつねわひけむ
これを見てせうとはその夜をくり
にいきたりしかは
見しまゝにもえし煙はつきにしを
いかゝたつねし野へのさゝはら
雪の日をへてふるころよしの山に
すむあまきみを思やる
ゆきふりてまれの人めもたえぬらむ
よしのゝ山のみねのかけみち

（三十五オ）

かへるとしむ月のつかさめしにおやの
よろこひすへきことありしにかひなき
つとめておなし心におもふへき人の
もとよりさりともと思つゝあくるをま
ちつる心もとなさといひて
あくるまつかねのこゑにもゆめさめて
秋のもゝ夜の心地せしかな
といひたる返ことに
あか月をなにゝまちけむ思事
なるともきかぬかねのをとゆへ

（同ウ）

ひしりなとすらさきの世のことゆめ
に見るはいとかたかなるをいとかう
あとはかないやうにはか〳〵しからぬ心地
にゆめに見るやうきよ水のらい
堂にゐたれは別當とおほしき人
いてきてそこはさきの生にこのみ
てらのそうにてなむありし佛師に
てほとけをいとおほくつくりたく
まつりしくとくによりておりしす
さうまさりて人とむまれたるなり

（五十五オ）

このみたうの東におはする丈六の
佛はそこのつくりたりし也はくを
をしさしてなくなりにしそとあ
ないみしさはあれにはくをした
てまつらむといへはなくなりにしかは
こと人はくをしたてまつりてこと人
くやうもしてしと見てのちきよ水に
ねむころにまいりつかうまつらまし
かはさきの世にそのみてらに佛ねむ
し申けむちからにをのつからようも

（同ウ）

四月つこもりかたさるへきゆへありて
東山なる所へうつろふみちのほと
田のなはしろ水まかせたるもうへたるも
なにとなくあおみおかしう見えわた
りたる山のかけくらうまへちかう見
えて心ほそくあはれなるゆふくれ
くひないみしくなく
たゝくともたれかくひなのくれぬるに
山地なふかくたつねてはこむ
靈山ちかき所なれはまうてゝおかみ

（三十六オ）

たてまつるにいとくるしけれは山て
らなるいし井によりて手にむすひつゝ
のみてこの水のあかすおほゆるかなと
いふ人のあるに
おく山のいしまの水をむすひあけて
あかぬものとはいまゝみやしる
といひたれは水のむ人
山の井のしつくにゝこる水よりも
こは猶あかぬ心地こそすれ
かへりてゆふ日けさやかにさしたるに

（同　ウ）

やあらましいといふかひなくまうて
つかうまつることもなくてやみにき
十二月廿五日宮の御佛名にめしあれはき
その夜はかりと思てまいりぬしろき
きぬともにこきかいねりをみなきて
四十餘人はかりいてゐたりしるへし
いてし人のかけにかくれてあるか中
にうちほのめいてあか月にはまかつ
ゆきうちゝりつゝいみしくはけしく
さえこほるあかつきかたの月の

（五十六オ）

ほのかにこきかいねりのそてにうつれ
るもけにぬるゝかほなりみちすから
年はくれ夜はあけかたの月かけの
そてにうつれるほとそはかなき
かうたちいてぬとならはさても宮つかへ
の方にもたちなれ世にまきれたる
もねちけかましきおほえもなき
ほとはをのつから人のやうにもお
ほしもてなさせ給やうもあらまし
おやたちもいと心えすほともなく

（同　ウ）

宮この方ものこりなく見やらるゝに
このしつくにゝこる人は京にかへる
とて心くるしけに思てまたつとめて
　山のはにいり日のかけはいりはてゝ
　心ほそくそなかめやられし
念佛するそうのあか月にぬかつく
なとのたうとくきこゆれはとをゝし
あけたれはほの〳〵とあけゆく山きは
こくらきこすゑともきりわたりて花
もみちのさかりよりもなにとなくしけり

〔三十七オ〕

わたれるそらのけしきくもらはし
くおかしきにほとゝきすさへいとち
かきこすゑにあまたゝひないたり
　たれに見せたれにきかせむ山さとの
　このあかつきもおちかへるねも
このつこもりの日たにの方なる木のう
へにほとゝきすかしかましくないたり
　みやこにはまつらむ物を郭公
　けふ日ねもすになきくらすかな
なとのみなかめつゝもろともにある人

〔同　ウ〕

こめすへつきりとてそのおりさまの
たちまちにきら〳〵しきいきほひ
なとおんへいやうもなくいとよし
なかりけるすゝろ心にてもことの
ほかにたかひぬるありさまなり
かし
　いくちたひ水の田せりをつみしかは
　思しことのつゆもかなはぬ
とはかりひとりこたれてやみぬそのゝ
ちはなにとなくまきらはしきに
ものかたりのことも

〔五十七オ〕

うちたえわすられて物まめやかなる
さまに心もなりはてゝそなとて
おほくの年月をいたつらにてふし
おきしにをこなひをも物まうて
をもせさりけむこのあらましこと
とても思しことゝもはこの世にあん
へかりけることゝもなりやひかる源氏
はかりの人はこの世におはしけり
やはかほる大将の宇治にかくし
すへ給へきもなき世なりあな物

〔同　ウ〕

たゝいま京にもきゝたらむ人あら
むやかくてなかむらむと思をこする
人あらむやなといひて
　山ふかくたれか思はをこすへき
　月見る人はおほからめとも
といへは
　ふかき夜に月見るおりはしらね
　とも
　まつ山さとそ思やらるゝ
あか月になりやしぬらむと思ほとに
山の方より人あまたくるをとすおとろきて

（三十八オ）

見やりたれはしかのえんのもとまて
きてうちないたるちかうてはなつか
しからぬものゝこゑなり
　秋の夜のつまこひかぬるしかのねは
　とを山にこそきくへかりけれ
しりたる人のちかきほとにきてかへりぬ
ときくに
　またひとめしらぬ山邊の松風も
　なとしてかへるものとこそきけ
八月になりて廿よ日のあかつきかたの月

（同　ウ）

くるをしいかによしなかりける心也
と思しみはてゝまめ／＼しくすくすと
ならはさてもありはてすまいり
そめし所にもかくかきこもりぬる
をまことゝもおほしめしたらぬ
さまに人／＼もつけたえすめし
なとする中にもわさとめしてわかい
ひとまいらせよとおほせらるれは
えさらすいたしたつるにひかされて
又時／＼いてたてとすきにし方の

（五十八オ）

やうなるあいなたのみの心をこりな
たにすへきやうもなくてさすかに
わかい人にひかれており／＼さしいつる
にもなれたる人はこよなくなにこ
とにつけてもありつきかほに我は
いとわかうとにあるへきにもあらす
又おとなにせらるへきおほえも
なく時／＼のまらうとにさしはなた
れてすゝろなるやうなれとひとへに
そなたひとつをたのむへきならねは

（同　ウ）

下段縦線ノ處原本ニ次ノ註アリ
長久三年四月十三日宮達入内給藤壺儲饗十四日主上渡御廿日兩宮自内令出給

いみしくあはれに山の方はこくらく
たきのをともにゐる物なくのみなかめ
られて
　思しる人に見せはや山さとの
　秋のよふかきありあけの月
京にかへりいつるにわたりし時は
水はかり見えし田ともゝみなかり
はてゝけり
　なはしろの水かけ許見えし田の
　かりはつるまてなかゐしにけり
十月つこもりかたにあからさまにきて

（三十九オ）

見れはこくらうしけれりしこのはと
ものこりなくちりみたれていみしく
あはれけに見えわたりて心ちよけに
さゝらきなかれし水もこのはにうつ
もれてあとはかり見ゆ
　水さへそすみたえにけるこのはちる
　あらしの山の心ほそさに
そこなる尼に春まていのちあらは
かならすこむ花さかりはまつゝけよ
なといひてかへりにしを年かへりて

（同ウ）

我よりまさる人あるもうらやましく
もあらす中〳〵心やすくおほえて
さんへきおりふしまいりてつれ〳〵な
るさんへき人と物かたりなとして
めてたきこともおかしくおもしろ
きおり〳〵もわか身はかやうにたち
ましりいたく人にも見しられむに
もはゝかりあんへけれはたゝおほか
たの事にのみきゝつゝすくすに

（五十九オ）

内の御ともにまいりたるおりあり
あけの月いとあかきにわかねむし
申すあまてる御神は内にそおはし
ますなるかしかゝるおりにまい
りておかみたてまつらむと思て四月
はかりの月のあかきにいとしのひて
まいりたれははかせの命婦はしる
たよりあれはとうろの火のいとほ
のかなるにあさましくおい神さひて

（同ウ）

下段縦線ノ處原
本次ノ註アリ
女御藤生子長
暦三年十二月
廿一日入内
内大臣教通女

中宮嫄子長暦
元年正月七日
入内廿九日爲
女御關白女
三月立后同
三年八月廿
八日崩廿四

三月十餘日になるまてをともせねは
ちきりをきし花のさかりをつけぬ哉
春やまたこぬ花やにほはぬ
たひなる所にきて月のころ竹の
もとちかくて風のをとにめのみさめ
てうちとけてねられぬころ
竹の葉のそよく夜ことにねさめして
なにともなきに物そかなしき
秋ころそこをたちてほかへうつろひ
てそのあるしに

（四十オ）

いつことも露のあはれはわかれしを
あさ地かはらの秋そこひしき
まゝはゝなりし人くたりしくにの
名を宮にもいはるゝにこと人かよは
してのちも猶その名をいはるときゝ
ておやのいまはあいなきよしいひに
やらむとあるに
あさくらやいまは雲井にきく物を
猶木のまろかなのりをやする
かやうにそこはかなきことを思つゝく

（同　ウ）

さすかにいとよう物なといひゐたる
か人ともおほえす神のあらはれ
たまへるかとおほゆ久の夜も月の
いとあかきにふちつほのひむかしの
とをゝしあけてさへき人〳〵物かた
りしつゝ月をなかむるにむめつほ
の女御のゝほらせ給なるをとなひ
いみしく心にくゝいうなるにも故宮の

（六十オ）

おはします世ならましかはかやう
にのほらせ給はましなと人〳〵い
ひいつるけにいとあはれなりかし
あまのとを雲井なからもよそに見て
むかしのあとをこふる月かな
冬になりて月なくゆきもふらす
なからほしのひかりにそらさすかに
くまなくさえわたりたる夜のかき
り殿の御方にさふらふ人〳〵と物
かたりしあかしつゝあくれはたち

（同　ウ）

わかれ／＼しつゝゑかてしを思いてければ

月もなく花も見ざりし冬のよの
心にしみてこひしきやなぞ

我もさ思ふことなるをおなし心なるもおかしうて

さえし夜の氷は袖にまたとけて
冬の夜なからねをこそはなけ

御前にふしてきけは池の鳥とものよもすからこゑ／＼はふきさはくをとのするにめもさめて

（六十一オ）

わかことそ水のうきねにあかしつゝ
うはけのしもをはらひわふなる

とひとりこちたるをかたわらにふし給へる人きゝつけて

ましておもへ水のかりねのほとたにそ
うわけのしもをはらひわける

かたらふ人とおつほねのへたてなるやりとをあけあはせて物かたりなとしくらす日又かたらふ

ふ人のうへにものしたまふをたひ／＼よひおろすに(六十一ウ)せちにことあらはいかむとあるにかれたるすゝきのあるにつけて

冬かれのしのゝをすゝき袖たゆみ
まねきもよせし風にまかせむ

上達部殿上人なとにたいめんする人はさたまりたるやうなれはうゐ／＼しきさと人はありなしをたにしらるへきにもあらぬに十月ついたちころのいとくらき夜ふたん經にこゑよき人／＼よむほとなりとて(六十二オ)そなたちかきとくち[1]にふたり[2]はかりたちいてゝきゝつゝ物かたりしてよりふしてあるにまいりたる人のあるをにけいりてつほねなるひと／＼よひあけなとせむも見くるしさはれたゝおりからこそかくてたゝといふいまひとりのあれはかたわらにてきゝゐたるにおとなしくしつやかなるけはいにて物なといふくちおしから(六十二ウ)さなりいまひとりはなとゝひて世のつねのうちつけのけさうひてなともいひなさす世中のあはれなることゝもなとこまやかにいひいてゝさすかにきひしうひきいりかたいふし／＼ありて我も人もこたえなとするをまたしらぬ人のありけるなとめつらしかりてとみにたつへくもあらぬほとほしのひかりたに見えすくらきにうちしくれつゝこのはに(六十三オ)かゝるをとの

傍線ノ處原本次ノ註アリ
1 高倉殿歟關白亭雨宮御坐
2 今年卅五

原本ニハ「つもり」ト「たる」ノ間ニ朱點アリテ「ひかりあひ」ノ五字ヲ傍ニ書ク部ヲ定家卿ガ脱字ヲシテ後ニ書加ヘタルナリ

原本ニハ「あさ緑」ノ歌ノ上ニ「新古今」ト注ス

おかしきを中〳〵にえむにおかしき夜かな月のくまなくあかゝらむもはしたなくまはゆかりぬへかりけり春秋の事なといひて時にしたかひ見ることには春かすみおもしろくそらものとかにかすみ月のおもてもいとあかうもあらすとをうなかるゝやうに見えたるに琵琶のふかうてうゆるゝかにひきならしたる(六十三ウ)いといみしくきこゆるに又秋になりて月いみしうあかきにそらはきりわたりたれと手にとるはかりさやかにすみわたりたるにかせのをとむしのこゑとりあつめたる心地するに箏のことかきならされたるゐやう定のふきすまされたるはなその春とおほゆかし又さかとおもへは冬の夜のそらさへさえわたりいみしきにゆきのふり(六十四オ)つもりひかりあひたるにひちりきのわなゝきいてたるは春秋もみなわすれぬかしといひつゝけていつれにか御心とゝまるとゝふに秋の夜に心をよせてこたへ給をさのみおなしさまにはいはしとて

あさ緑花もひとつにかすみつゝ
おほろに見ゆる春の夜の月

とこたへたれは返〳〵うちすんしてさは秋のよはおほしすてつるなゝりな(六十四ウ)

こよひより後のいのちのもしもあらは

さは春の夜をかたみとおもはむ

といふに秋に心よせたる人

　人はみな春に心をよせつめり

　我のみや見む秋のよの月

とあるにいみしうけうし思わつらひたるけしきにてもろこしなとにも昔より春秋のさためはえし侍らさなるをこのかうおほし(六十五オ)わかせ給けむ御心ともおもふにゆへ侍らむかしわか心のなひきそのおりのあはれともおかしとも思事のある時やかてそのおりのそらのけしきも月も花も心にそめらるゝにこそあへかめれ春秋をしらせ給けむことのふしなむいみしうゝけたまはらまほしき冬の夜の月はむかしよりすさま(六十五ウ)しきものゝためしにひかれて侍けるに又いとさむくなとしてことに見られさりしを齋宮の御もきの勅使にてくたりしにあかつきにのほらむとて日ころふりつみたる雪に月のいとあかきにたひのそらとさへおもへは心ほそくおほゆるにまかり申にまいりたれはよの所にもにす思なしさへけおそろしきにさへきところにめして(六十六オ)圓融院の御世よりまいりたりける人のいといみしく神さひふるめいたるけはいのいとよしふかくむかしのふることゝもいひいてうちなきなとしてようし

原本ニハ六十六丁ウラニ次ノ註アリ
萬壽二年廿一日齋宮御着裳勅使藏人右兵衛佐資通進發來月五日着裳云々
著者曰、「二年」ノ下「十一月」ヲ脱ス。類經[illegible]記ニヨリテ知ルベシ。

原本六十七丁表ノ最後ニ次ノ註アリ
長久三年十二月八日丑時大内燒亡

傍線ノ處原本ニハ次ノ註アリ
長久四年七月廿三日雨宮入内[illegible]東南對一條院儀迄八月十日雨宮御退出

らへたるひわの御ことをきしいてられたりしはこの世のことゝもおほえす夜のあけなむもおしう京のことも(六十六ウ)思たえぬはかりおほえ侍しよりなむ冬の夜の雪ふれる夜は思しられて火をけなとをいたきてもかならすいてゐてなむ見られ侍おまへたちもかならすさおほすゆへ侍らむかしさらはこよひよりはくらきやみの夜のしくれうちせむは又心にしみ侍なむかし齋宮の雪の夜におとるへき心ちもせすなむといひて(六十七オ)わかれにしのちはたれとしられしと思しを又のとしの八月に内へいらせ給によもすから殿上にて御あそひありけるにこの人のさふらひけるもしらすそのよはしもにあかしてほそとのゝやりとをゝしあけて見いたしたれはあか月方の月のあるかなきかにおかしきを見るにくつのこゑきこえてと經(六十七ウ)なとする人もあり經の人はこのやりとくちにたちとまりて物なといふにこたへたれはふと思いてゝ時雨の夜こそかた時わすれすこひしく侍れといふにことなかうこたふへきほとならねは

なにさまて思いてけむなをさりの
このはにかけしゝくれはかりを

ともいひやらぬを人〳〵又きあへはやかてすへりいりてそのよさり(六十八オ)まかてにしか

原本六十八丁裏ノ中程ニ次ノ註アリ
同年十二月一日一條院燒亡
二日遷御高陽院
廿一日自高陽院遷御東三條院

原本「かしまみて」ノ五字朱ヲ附ス

原本六十九丁裏ノ初ニ次ノ註アリ
資通干時右大辨正四位下
九月十九日藏人頭

はもろともなりし人たつねて返しゝたりしなとものちにそきくありしゝくれのやうならむに
いかてひわのねのおほゆるかきりひきてきかせむとなむあるときくにゆかしくて我もさるへ
きおりをまつにさらになしはるころのとやかなるゆふ(六十八ウ)つかたまいりたなりときゝ
てその夜もろともなりし人とゐさりいつるにとに人／＼まいりうちにもれいのひと／＼あれ
はいてさいていりぬあの人もさや思けむしめやかなるゆふくれをゝしはかりてまいりたりけ
るにさはかしかりけれはまかつめり

かしまみてなるとのうらにこかれいつる
心はえきやいそのあま人(六十九オ)

とはかりにてやみにけりあの人からもいとすくよかに世のつねならぬ人にてその人はかの人
はなともたつねとはてすきぬいまはむかしのよしなし心もくやしかりけりとのみ思しりはて
おやのものへゐてまいりなとせてやみにしもゝとかしく思いてらるれはいまはひとへにゆた
かなるいきおひになりて(六十九ウ)ふたはの人をもおもふさまにかしつきおほしたてわか身
もみくらの山につみあまるはかりにてのちの世までのことをもおもはむと思はけみてしも月
の廿よ日いし山にまいるゆきうちふりつゝみちのほとさへおかしきにあふさかのせきを見る

（一）「、」或ハ挂殺カ

（二）原本ニハ傍線ノ處ニ次ノ註アリ　永承元年　年卅九

にもむかしこえしも冬そかしと思いてらるゝにそのほとしもいとあらうふいたり（七十オ）

あふさかの關のせき風ふくこゑは

むかしきゝしにかはらさりけり

せきてらのいかめしうつくられたるを見るにもそのおりあらつくりの御かほはかり見られしおり思いてられて年月のすきにけるもいとあはれ也うちいてのはまのほとなと見しにもかはらすくれかゝるほとにまうてつきてゆやにおりてみたうにのほるに人こゑもせす（七十ウ）山かせおそろしうおほえてをこなひさしてうちまとろみたる夢に中堂より御かう給はりぬとくかしこへつけよといふ人あるにうちおとろきたれはゆめなりけり、とおもふによきことならむかしと思てをこなひあかす又の日もいみしく雪ふりあれて宮にかたらひきこゆる人のくし給へるともへのかたりして心ほそさをなくさむ三日（七十一オ）さふらひてまかてぬそのかへる年の十月廿五日大嘗會の御禊とのゝしるにはつせの精進はしめてその日京をいつるにさるへき人〳〵一代に一度の見ものにてゐ中せかいの人たに見る物を月日おほかりその日しも京をふりいてゝいかむもいとものくるおしくなかれてのものかたりともなりぬへき（七十一ウ）事也なとはらからなる人はいひはらたてともこともおやなる人はいかにも〳〵心にこそあら

原本ニハ傍線ノ處ニ次ノ註アリ
良頼

めとていふにしたかひていたしたつる心はへもあはれ也ともにゆく人／＼もいといみしく物
ゆかしけなるはいとおしけれとものゝ見てなにゝかはせむかゝるおりにまうてむ心さしをさり
ともおほしなむかならす佛の御しるしを（七十二オ）見むと思たちてそのあか月に京をいつる
に二條のおほちをしもわたりていくにさきにみあかしもたせともの人／＼上えすかたなるを
そこらさしきともにうつるとていきちかふむまもくるまもかち人もあれはなそ／＼とやす
からすいひおとろきあさみわらひあさける物ともゝありよしよりの兵衛のかみと申ゝ人の家
のまへをすくれはそれさしきへ（七十二ウ）わたり給なるへしかとひろうをしあけてひと／＼
たてるかあれは物まうて人なめりな月日しもこそ世におほかれとわらふなかにいかなる心あ
る人にか一時かめをこやしてなににかはせむいみしくおほしたちて佛の御とくかならす見給
へき人にこそあめれよしなしかし物見てかうこそ思たつへかりけれとまめやかにいふ人ひと
りそあるみちけんそう（七十三オ）ならぬさきにと夜ふかういてしかはたちおくれたる人／＼
もまちいとおそろしうふかききりをもすこしはるけむとて法性寺の大門にたちとまりたるに
ゐなかより物見にのほるものとも水のなかるゝやうにそ見ゆるやすへて道もさりあへす物の
心しりけもなきあやしのわらはへまてひきよきてゆきすくるをくるまをおとろきあさみたる

原本やひろノ三字朱ヲ附ク

ことかきり（七十三ウ）なしこれらを見るにけにいかにいてたちしみちなりともおほゆれとひ
たふるに佛をねむしたてまつりて宇治の渡にいきつきぬそこにも猶しもこなたさまにわたり
する物とも立こみたれは舟のかちとりたるをのこともふねをまつ人のかすもしらぬに心おこ
りしたるけしきにて袖をかいまくりてかほにあてゝさおにをしかゝりてとみに舟も（七十四
オ）よせすうそふいて見まわしいといみしうすみたるさま也むこにえわたらてつく／＼と見
るにむらさきの物かたりに宇治の宮のむすめともの事あるをいかなる所なれはそこにしもす
ませたるならむとゆかしく思し所そかしけにおかしき所哉と思つゝからうして渡て殿の御ら
う所のうち殿をいりて見るにもうきふねの女きみの（七十四ウ）かゝる所にやありけむなとま
つ思いてらる夜ふかくいてしかは人々こうしてやひろうちといふ所にとゝまりてものくひな
とするほとにしもともなる物ともかうみやうのくりこま山にはあらすや日もくれかたになり
ぬめりぬしたちてうとゝりおはさうせよやといふをいと物おそろしうきくその山こえはてゝ
にへのゝ池のほとりへいきつきたるほと（七十五オ）日は山のはにかゝりにたり今はやとこれ
とて人／＼あかれてやともとむる所はしたにていとあやしけなる下すのこいへなむあるとい
ふにいかゝはせむとてそこにやとりぬみな人／＼京にまかりぬとてあやしのをのこふたりそ

ゐたるその夜もいもねすこのをのこいていりしありくをおくの方なる女ともなとかくしありかるゝそとゝふなれはいなや心も(七十五ウ)しらぬ人をやとしたてまつりてかまはしちひきぬかれなはいかにすへきそと思てえねてまはりありくそかしとねたると思ていふきくにいとむくむくしくおかしつとめてそこをたちて東大寺によりておかみたてまつるいその神もまことにふりにける事思やられてむけにあれはてにけりその夜山のへといふ所のてらにやとりていとくるし(七十六オ)けれと經すこしよみたてまつりてうちやすみたるゆめにいみしくやむことなくきよらなる女のおはするにまいりたれは風いみしうふく見つけてうちゑみてなにしにおはしつるそとゝひたまへはいかてかはまいらさらむと申せはそこは内にこそあらむとすれはかせの命婦をこそよくかたらはめとのたまふと思てうれしくたのもしくていよ／＼(七十六ウ)ねむしたてまつりてはつせ河なとうちすきてその夜みてらにまうてつきぬはらへなとしてのほる三日さふらひてあか月まかてむとてうちねふりたるよさりみたうの方よりすはいなりよりたまはるしるしのすきよとて物をなけいつるやうにするにうちおとろきたれはゆめなりけりあか月よふかくいてゝえとまらねはならさかのこなたなる(七十七オ)家をたつねてやとりぬこれもいみしけなるこいゑ也こゝはけしきある所なめりゆめいぬなれうかいのこ

とあらむにあなかしこをひえさはかせ給ないきもせてふさせ給へといふをきくにもいといみしうわひしくおそろしうて夜をあかすほとちとせをすくす心地すからうしてあけたつほとにこれはぬす人の家也あるしの女けしき(七十七ウ)ある事をしてなむありけるなといふいみしう風のふく日宇治の渡をするにあしろいとちかうこきよりたり

をとにのみきゝわたりこし宇治河の
あしろの浪もけふそかそふる

二三年四五年へたてたることをしたいもなくかきつゝくれはやかてつゝきたちたるす行者めきたれとさにはあらす年月へたゝれる事也(七十八オ)春ころくらまにこもりたり山きはかすみわたりのとやかなるにやまの方よりわつかにところなとほりもてくるもおかしいつるみちは花もみなちりはてにけれはなにともなきを十月許にまうつるに道のほと山のけしきこのころはいみしうそまさる物なりける山のはにしきをひろけたるやう也たきりて(七十八ウ)なかれゆく水すいしやうをちらすやうにわきかへるなといつれにもすくれたりまうてつきてそうはうにいきつきたるほとかきしくれたる紅葉のたくひなくそ見ゆるや

おく山の紅葉のにしきほかよりも

いかにしくれてふかくそめけむ

とそ見やらるゝ二年はかりありて又いし山にこもりたれはよもすからあめそいみしくふるたひゐは(七十九オ)雨いとむつかしき物ときゝてしとみをゝしあけて見れはありあけの月のたにのそこさへくもりなくすみわたり雨ときこえつるは木のねより水のなかるゝをと也

谷河の流は雨ときこゆれと
ほかよりけなる在明の月

又はつせにまうつれはゝしめにこよなくものたのもし所〳〵にまうけなとしていきもやらす山(七十九ウ)しろのくにはゝそのもりなとにもみちいとおかしきほと也はつせ河わたるに

はつせ河立歸つゝたつぬれは
すきのしるしものこのたひや見む

と思もいとたのもし三日さふらひてまかてぬれはれいのならさかのこなたにこ家なとにこのたひはいとるいひろけれはえやとるましうて野中にかりそめにいほつくりて(八十オ)すへたれは人はたゝ野にゐて夜をあかす草のうへにむかはきなとをうちしきてうへにむしろをしきていとはかなくて夜をあかすかしらもしとゝにつゆをくあか月かたの月いといみしくすみわ

たりてよにしらすおかし

ゆく衞なきたひのそらにもをくれぬは

宮こにて見しありあけの月

なにことも心にかなはぬこともなき(八十ウ)まゝにかやうにたちはなれたる物まうてをしても道のほとをおかしともくるしとも見るにをのつから心もなくさめさりともたのもしうさしあたりてなけかしなとおほゆることゝもないまゝにたゝおさなき人〳〵をいつしか思さまにしたてゝ見むと思に年月のすき行を心もとなくたのむ人たに人のやうなるよろこひしてはとのみ(八十一オ)思わたる心地たのもしかしいにしへいみしうかたらひよるひるうたなとよみかはしゝ人のあり〳〵てもいとむかしのやうにこそあらねたえすいひわたるか越前守のよめにてくたりしかかきたえをともせぬにからうしてたよりたつねてこれより

たえさりし思も今はたえにけり

こしのわたりの雪のふかさに(八十一ウ)

といひたる返ことに

しら山のゆきのしたなるさゝれいしの

中のおもひはきえむものかは

やよひのついたちころに西山のおくなる所にいきたる人めも見えすのと／＼とかすみわたり
たるにあはれに心ほそく花はかりさきみたれたり

さと〻をみあまりおくなる山地には
花見にとても人こさりけり（八十二オ）

世中むつかしうおほゆるころうつまさにこもりたるに宮にかたらひきこゆる人の御もとより
ふみある返こときこゆるほとにかねのをとのきこゆれは

しけかりしうき世の事もわすられす
いりあひのかねの心ほそさに

とかきてやりつうら／＼とのとかなる宮にておなし心なる人三人許ものかたりなとしてまか
て〻又の日（八十二ウ）つれ／＼なるま〻にこひしう思いてらるれはふたりの中に

袖ぬる〻あらいそ浪としりなから
ともにかつきをせしそこひしき

ときこえたれは

あらいそはあされとなにのかひなくて
うしほにぬるゝあまのそて哉

いま一人

見るめおふる浦にあらすはあらいその
なみまかそふるあまもあらしを(八十三オ)

おなし心にかやうにいひかはし世中のうきもつらきもおかしきもかたみにいひかたらふ人ちくせんにくたりてのち月のいみしうあかきにかやうなりし夜宮にまいりてあひてはつゆまとろますなかめあかいしものをこひしく思つゝねいりにけり宮にまいりあひてうつゝにありしやうにてありと見てうちおとろきたれはゆめなりけり(八十三ウ)月も山のはちかうなりにけりさめさらましをといとゝなかめられて

夢さめてねさめのとこのうく許
こひきとつけよにしへゆく月

さるへきやうありて秋ころいつみにくたるによとゝいふよりしてみちのほとのおかしうあはれなることいひつくすへうもあらすたかはまといふ所にとゝまりたるよいとくらきに夜いた

「た」字原本「と」ノ如ク見ユ

うふけて舟のかちの(八十四オ)をときこゆとふなれはあそひのきたるなりけりひと〳〵けう
して舟にさしつけさせたりとをき火のひかりにひとへのそてなかやかにあふきさしかくして
うたうたひたるいとあはれに見ゆ又の日山のはに日のかゝるほとすみよしの浦をすくそらも
ひとつにきりわたれる松のこすゑもうみのおもてもなみのよせくるなきさの(八十四ウ)ほと
もゑにかきてもをよふへき方なうおもしろし

いかにいひなにゝたとへてかたらまし
秋のゆふへのすみよしのうら

と見つゝつなてひきすくるほとかへりみのみせられてあかすおほゆ冬になりてのほるにおほ
つといふうらに舟にのりたるにその夜雨風いはもうこく許ふりふゝきて神さへなりてとゝろ
くに(八十五オ)浪のたちくるをとなひ風のふきまとひたるさまおそろしけなることいのちか
きりつと思まとはるをかのうへに舟をひきあけて夜をあかす雨はやみたれと風猶ふきて舟い
たさすゆく衞もなきをかのうへに五六日をすくすからうして風いさゝかやみたるほと舟のす
たれまきあけて見わたせはゆふしほたゝみちにみちくるさまとりも(八十五ウ)あへす入江の
たつのこゑおしまぬもおかしく見ゆくにのひと〳〵あつまりきてその夜この浦をいてさせ給

ていしつにつかせたまへらましかはやかてこの御舟なこりなくなりなましなといふ心ほそう
きこゆ

あるゝ海に風よりさきにふなてして
いしつの浪ときえなましかは

世中にとにかくに心のみつくすに宮つかへとてもゝとはひとすちに(八十六オ)つかうまつりつかはやいかゝあらむ時／＼たちいてはなになるへくもなかめりとしはやゝさたすきゆくにわか／＼しきやうなるも月なうおほえならるゝうちに身のやまひいとをもくなりて心にまかせて物まうてなとせしこともえせすなりたれはわくらはのたちいてもたえてなからふへき心地もせぬまゝにおさなきひと／＼をいかにも／＼わかあらむ(八十六ウ)世に見をくこともかなとふしおき思なけきたのむ人のよろこひのほとを心もとなくまちなけかるゝに秋になりてまちいてたるやうなれと思しにはあらすいとほいなくくちおしおやのおりより立歸つゝ見しあつま地よりはちかきやうにきこゆれはいかゝはせむにてほともなくゝたるへきことゝもいそくに(八十七オ)かとてはむすめなる人のあたらしくわたりたる所に八月十よ日にすのちのことはしらすそのほといおりさまは物さはかしきまて人おほくいきほいたり廿七日にくたるに

原本ニハ傍線ノ處ニ次ノ註アリ
天喜五年七月卅日従五位上橘俊通任信濃守得替公文

原本ニハ「おとこなるは」ノ左傍ニ次ノ註アリ
仲俊承暦元年閏十二月木工允文章生同三年正月廿七日式部丞寛治元年正月七日五位廿五日筑後権守

原本ニハ「十月五日」ノ左傍ニ次ノ註アリ
康平元年十月五日卒五十七

おとこなるはそひてくたる紅のうちたるに萩のあをしをんのをりもの丶さしぬき丶てたちはきて（八十七ウ）しりにたちてあゆみいつるをそれもをり物のあをにひいろのさしぬきかりきぬきてらうのほとにてむまにのりぬの丶しりみちてくたりぬるのちこよなうつれ／＼なれといといたうとをきほとならすときけはさき／＼のやうに心ほそくなとはおほえてあるにをくりのひと／＼又の日かへりていみしうきら／＼しうてくたりぬなといひてこのあか月にいみしく（八十八オ）おほきなる人たまのたちて京さまへなむきぬるとかたれと丶もの人なとのにこそはと思ゆ丶しきさまに思たによらむやはいまはいかてこのわかきひと／＼おとなひさせむとおもふよりほかの事なきにかへる年の四月にのほりきて夏秋もすきぬ九月廿五日よりわつらひいて丶十月五日にゆめのやうに見ないて（八十八ウ）おもふ心地世中に又たくひある事ともおほえすはつせにか丶みたてまつりしにふしまろひなきたるかけの見えけむはこれにこそはありけれうれしけなりけむかけはきし方もなかりきいまゆくすゑはあへいやうもなし廿三日はかなくくもけふりになす夜こその秋いみしくしたてかしつかれてうちそひてくたりしを見やりしをいとくろき（八十九オ）きぬのうへにゆ丶しけなるものをきてくるまのともになく／＼あゆみいて丶ゆくを見いたして思いつる心地すへてたとへむ方なきま丶にやかて夢地

にまとひてこそ思にその人やみにけむかし昔よりよしなき物かたりうたのことをのみ心にしめてよるひる思ておこなひをせましかはいとかゝるゆめの世をは見すもやあらましはつせ（八十九ウ）にてまへのたひいなりよりたまふしるしのすきよとてなけいてられしをいてしまゝにいなりにまうてたらましかはかゝらすやあらまし年ころあまてる御神をねむしたてまつれと見ゆるゆめは人の御めのとして内わたりにありみかときさきの御かけにかくるへきさまをのみゆめときもあはせしかともそのことはひとつかなはてやみぬ（九十オ）たゝかなしけなりと見しかゝみのかけのみたかはぬあはれに心うしかうのみ心に物のかなふ方なうてやみぬる人なれはくとくもつくらすなとしてたゝよふさすかにいのちはうきにもたえすなからふめれとのちの世も思ふにかなはすそあらむかしとそうしろめたきにたのむことひとつそありける天喜三年（九十ウ）十月十三日の夜の夢にゐたる所のやのつまの庭に阿彌陀佛たちたまへりさたかには見えたまはすきりひとへゝたゝれるやうにすきて見え給をせめてたえまに見たてまつれは蓮花の座のつちをあかりたるたかさ三四尺佛の御たけ六尺はかりにて金色にひかりかゝやき給て御手かたつかたをはひろけたるやうにいまかたつかたには（九十一オ）いんをつくり給たるをこと人のめには見つけたてまつらす我一人見たてまつるにさすかにいみしくけお

そろしけれはすたれのもとちかくよりてもえ見たてまつらねは佛さはこのたひはかへりての
ちにむかへにこむとのたまふこゑわかみゝひとつにきこえて人はえきゝつけすと見るにうち
おとろきたれは十四日也このゆめ許(九十一ウ)そのちのたのみとしける
をいともなとひと所にてあさゆふ見るにかうあはれにかなしきことののちは所〳〵になりな
としてたれも見ゆることかたうあるにいとくらい夜六らうにあたるをいのきたるにめつらし
うおほえて

月もいてゝやみにくれたるをはすてに
なにとてこよひたつねきつらむ

とそいはれにけるねむころにかたらふ人のかうてのちをとつれぬに(九十二オ)

いまは世にあらし物とや思らむ
あはれなく〳〵猶こそはふれ

十月許月のいみしうあかきをなく〳〵なかめて

ひまもなき涙にくもる心にも
あかしと見ゆる月のかけかな

年月はすきかはりゆけとゆめのやうなりしほとを思いつれは心ちもまとひめもかきくらすやうなれは(九十二ウ)そのほとの事はまたさたかにもおほえす人／＼はみなほかにすみあかれてふるさとにひとりいみしう心ほそくかなしくてなかめあかしわひてひさしうをとつれぬ人に

しけりゆくよもきかつゆにそほちつゝ
人にとはれぬねをのみそなく

あまなる人也(九十三オ)

世のつねのやとのよもきを思やれ
そむきはてたるにはのくさむら(九十三ウ)(本文終此ノ紙以下餘白)

ひたちのかみすかはらのたかすゑのむすめの日記也 母倫寧朝臣女 傅のとのゝはゝうへのめひ也よはのねさめみつのはまゝつみつからくゆるあさくらなとはこの日記の人のつくられたるとそ(九十四オ)

孝標右中辨從四位上資忠朝臣一男
長保二年正月廿七日補藏人元東宮藏人右衛門大尉使
三年正月廿四月敍爵
寛仁元年正月廿四日任上總介四十五
五年正月得替四十九
長元五年二月八日任常陸介正五位下六十
七月赴任（九十四ウ）

橘俊通但馬守爲義四男母讃岐守大江淸通女
治安三年四月廿日昇殿左衛門尉元帯刀長
萬壽四年三月三日使宣旨

長元四年十一月廿一日補藏人五年正月七日敍爵卅一

長久二年正月廿五日任下野守藏人使巡　四十

天喜五年七月卅日任信濃守從五位上任中

康平元年十月五日卒五十七 女年五十一（九十五オ）

參議從二位勘解由長官源朝臣資通

　贈從三位正四位上修理大夫濟政一男

長和五年正月十二日大膳亮祖父大納言二合

寬仁四年正月九日藏人十六正月廿四日左衛門少尉治安二年正月卅日式部少丞二月廿九日從

五位下九月廿三日侍從三年正月十二日藏人十二月十二日左馬權助依御賀舞人任衛府　四年十二月十五

日右兵衛佐萬壽二年正月七日從五位上中宮御給　十月廿六日民部少輔四年正月七日（九十五ウ）正

五位下上東門院御給長元々年二月十九日左少辨三年十一月五日右中辨四年二月和泉守藏人巡十

一月十九日從四位下七年正月七日從四位上行幸上東門院父讓　八年十月十六日權左中辨九年二月廿

七日兼右京大夫十月十四日攝津守止大夫長曆元年八月十一日正四位下石淸水行幸二年六月廿五日左中辨三年十二月五日右大辨長久二年止守四年九月十九日藏人頭卅九五年正月七日正四位上寬德元年十二月十四日參議兼二年十月左大辨　永承元年十一月從三位　五年九月大貳止大辨十一月十一日正三位　天喜二年辭大貳入洛（九十六オ）五年正月從二位　康平元年正月兼兵部卿　十一月勘解由長官三年八月十一日依病出家廿二日薨五十六

原本傍線ノ處ニ「今年廿一」ト註アリ

經賴卿記

萬壽二年十一月廿日戊戌伊勢齋宮御裝束織物唐衣一領五重白綾裳一腰織物腰紅重袴一具綾裏入帷等也予有仰調之奉大內　是來五日着裳給云々　仍差藏人右兵衞佐源資通爲勅使遣件御裝束兼仰作物所令作（九十六ウ）衣莒一合入此御裝束又令作銀小莒一合入合燒物副御裝束使明日進發

十二月三日差藏人令取初雪見參給祿

小右記

長保二年十一月

來七日伊勢齋王着裳年十七左兵衛佐能通爲勅使參齋宮奉遣御裝束使也

明日憲定賴定朝臣又參齋宮中將來借取厩馬雜具等（九十七ォ）

土右記

長久三年六月廿六日藏人少將隆俊爲勅使參齋宮御着裳

先朝御時右大辨資通爲兵衛佐時爲勅使參彼宮云々（九十七ゥ此ノ紙半枚餘白）

（九十八ォ白）

先年傳得此草子件本爲人被借失仍以件本書寫人本更書留之傳々之間

字誤甚多不審事等付朱若得證本者可見合之
爲見合時代勘付舊記等（九十八ウ）
（以下白紙三枚。次ニ裏表紙アリ。裏表紙ノ内側ニ次ノ書付アリ
「墨付九十六丁但シ外題共ニハ九十七丁也」
コレハ後人ノ書キ記セルモノナリ）

第十六節　御物本更級日記の語句について

流布本の誤を訂し得る語句

御物本は、錯簡訂正の證本として貴重な御本たるはいふまでもないが、又流布本に書き誤られた語句を訂正する上にも大切な資料である。その主なるものの二三をあげれば、

〔六丁ウ　七行以下〕みな人はかりそめのかりやなといへと風すくましくひきわたしなどしたるに

諸本多く「風すさまじくひきわたなどもしなどしたるに」と書く。即ち「く」を「さ」と誤り「なども」の三字を誤り加ふ。その爲に古來この處に不徹底な註釋

を施してゐる。併し御本によれば「風のすかぬやうに、風よけになる物を引渡しなどした」の意が明かに解せられる。引渡すとはひきめぐらすこと、

〔九丁ゥ　四行〕　ろんなく人をひてくらむと

諸本「ろ」を「ひ」と誤り、「論なく」を「便なく」と解してゐる。

〔十七丁ォ　八行九行〕　天らうといふ河

諸本多く「天ちう」と誤る。定家の書體「ら」が「ち」の如く見ゆる爲に誤つたのである。御物本八丁ォ五行「らうのあと」十三丁ォ六行「からかさ」八十三丁ォ六行「あらいそ」九十丁ォ四行「たらましかは」九十二丁ォ六行「六らう」の「ら」など何れも「ち」に似てゐる。

〔三十一丁ォ五行　三條の宮の註〕　長和二年正月廿七日新一品宮自按察家遷給三條宮

群書類従には「按察家」を「樓後三家」と誤り、また他の寫本類（脇坂本の如きすら）には「檮期三家」と誤つてゐるものが多い。

これは「更級日記に「三條の宮」とあるは、新一品宮の御住所をさすものだとい

ふ註である。新一品宮とは一條天皇の皇女修子内親王をさす。修子内親王は父一條院の崩後、按察中納言隆家の家に御遷りなされ(小右記寛弘八、八、十一)たが、再び按察(藤原隆家)の家から三條の宮に遷り給うたのである。此の事は小右記及び御堂關白記の長和二年正月廿七日の條に見えてゐる。

〔五十九丁オ　三行四行〕つれ／＼なるさんへき人と物かたりなとして

諸本「る」を「ぐ」と誤り、「つれ／＼なぐさんべき人と」とし、作者が我がつれ／＼を慰むべき人と物語などする事と解してゐるが、實は「つれ／＼なる、然るべき人と物語などする」意で、作者は宮に出仕しても特に定まつた御用などもない身であるから、同じやうなつれ／＼な人と物語などして、宮の事に深く立ち入らなかつた事をいふのである。

〔六十四丁オ　七行〕ゐやう定のふきすまされたる

「ゐやう定」は横笛(やうぢやう)である。定家假名遣中に擁瘡の假名を「ゐようさう」と示してゐるが、「よう」の音を「ゐやう」「ゐよう」など書いたものがあるのである。然るに諸本「ゐ」を「ひ」と改め、「ひやうでう」と書いて「平調」と解してゐるの

は誤である。

〔九十二丁オ　六行〕　六らうにあたるをいのきたるにめつらしうおぼえて

諸本多く「六はらにあなるをひ」と改め「六波羅に住む甥」と解してゐるが「實は「六郎にあたる甥」で、即ち第六番目の甥の意である。　兄弟の順を一郎二郎といふは普通の例であるが、甥にかゝる用法をしたのは、我が國では多く見あたらぬけれど、支那の例にならつてかやうに用ひたのであらう。

更級日記の作者の作といはれる濱松中納言物語(みつのはままつ)一上に、

○大臣の三らうにあたる中納言

○五にあたりはべるむすめ

○五にあたるむすめ

など、こゝとやゝ語形の似た用法が見えてゐる。

右の如く御物本によつて不審の語句の解し得るものはなほ他にも少くない。併し御物本にもなほ不審の語句は存してゐる。　定家の奥書にも「傳々之間字誤甚多。　不審事等付朱」とある通り、定家の時から解し得ない個所はあつたの

である。定家が不審として朱を附した語は次の五つである。

〔八丁ォ　五行〕はいさうなといふ所のらうのあと

〔十一丁ウ　八行〕むさしとさかみとの中にゐてあすた河といふ

「ゐ」は「有」の草書の誤られたものではなからうか。

〔十五丁ゥ　三行〕けふりあふにやあらむきよみのせきの浪もたかくなりぬへし

〔六十九丁ォ　九行〕かしまみて」

これは「喧まみて」で意は通じる。

〔七十五丁ォ　三行〕やひろうちといふ所にとゝまりて

右の外にも數個所の不審はあるが、何れも餘り大した問題ではない。

次に確かに定家の誤寫と斷定すべきものをあげれば、

〔四丁ゥと五丁ォの堺〕しもつけ

これは「しもつさ」の誤である。

〔四十丁ゥと四十一丁ォの堺〕思つゝくくるをやくにて

虫くひ等にて明かならぬ字

これは「く」が一字衍字である。

右の外御物本に蟲くひ其の他の爲に明瞭を缺く文字をあげれば、

〔七丁ウ終行末〕 むらさきおふときく野も

「と」文字極めて小さく書かれ、且蟲くひにて缺けたる爲判讀するの外なし。

〔二十五丁オ　五行〕 さい中將とをきみ

中將の二字にあたる部分空白とし、傍に極めて細小の文字にて「中將」と書付けあてる。

〔二十八丁ウ　終行〕 たつぬる人やあると

「つ」の字かすれて「ゝ」の如く見ゆ。

〔四十一丁ウ　五行〕 おやとなりなはいみしうやむことなくわか身もなりなむ

「おや」と「なりなば」の間二字分程空白とし、傍に極めて細く小さく、それとも見えぬほどに「と」と書付けてある。

〔七十一丁オ五行末〕 ゆめなりけりとおもふに

「と」文字、筆ふるひていたくくづれたり。

第十七節　御物本更級日記の假名遣

更級日記の書かれた頃は、假名遣が既に混亂を來してゐた時代である。藤原定家は其の後約百五十年を隔つた人で、此の混亂を來した假名遣に一定の標準を與へて整理しようと考へ、所謂定家假名遣なるものを作つた。

定家假名遣の出來たのは、定家が五十歳から五十五歳まで、卽ち彼が侍從の職にあつた頃と推定せられ、定家が更級日記を寫したのは六十九歳以後の事と推定せられる。今この二つの推定を承認すれば、御物更級日記は定家假名遣の定まつた後、之を定めた人の手によつて寫されたものである。然らば定家は此の更級日記を寫す際に、自己の制定した假名遣によつて原本の假名遣を整理したかといふに、決してさうではない。定家は本文に忠實な人であつて、假名一字の末と雖も私意を以て本文を改刪するといふ事はしない人である。定家の寫本が古典の原據として尊信せられるのは此の故である。それ故に

御物更級日記に現はれた假名遣は、その原稿のまゝを示すものといはねばならぬ。

さて此の本の假名遣は如何なるものであるか。余は之を見る爲に發音の混同する語約三百を採つて後に示す如き第一表及び第二表を作つた。卽ちその結果は、

一、假名遣の前後矛盾するもの十三語

一、今の歷史的假名遣と異なるもの七十七語

一、右七十七語中、定家假名遣に一致するもの四十二語

である。更級日記著作の時代は、假名遣といふ事に無關心であつて、それは頗る混亂してゐたのである。然るにもかゝはらず、今日の歷史的假名遣と異なる七十七語中、矛盾の十三語を除いた六十四語は、すべて本文中に於て矛盾なく用ひられてゐる。假名遣といふ事に意識を用ひずして矛盾なく綴られるといふ事は、當時の發音に從つて表音式に綴つたおかげである。なほ又今日の歷史的假名遣と異なる七十七語中、定家假名遣の中に四十二語も一致する

例を見出す所を以て見れば、定家が假名遣を制定した標準は專ら表音式によるもので、それを歸納する材料は、更級日記の如き定家の時代に近い假名文及び和歌集の類から採つたものであらうと考へられる。

第一表　矛盾せる假名遣

いへ　　いゑ（家）

○いとあやしげなる下すのこいへなむあるといふに（七十五ウ）

○これもいみしけなるこいゑ也（七十七ウ）

いきほひ　　いきおひ　　いきほい

○きら／＼しきいきほひなどのあんべいやうもなく（五十七オ）

○ゆたかなるいきおひになりて（六十九ウ）

○人おほくいきほいたり（八十七ウ）

うはけ　　うわけ（上毛）

○うはけのしもをはらひわふなる（六十一ウ）

うわけのしもをはらひわひける（同）

おとこ　をのこ

○めのとなる人はおとこなどもなくなして（六ウ）

○おとこくるま（男車）（四十四ウ）

○おとこなるはそひて下る（八十七ウ）

●このをのこのかくひとりこつを（九オ）

●あのをのここちよれ（同）

●をのこども火をともして見れは（十三オ）

●とまるをのこのをくりしてかへるに（四十三オ）

●あやしのをのこふたりそゐたる（七十五ウ）

本文すべて「おとこ」に「お」を用ひ、「をのこ」に「を」を用ひて一つも矛盾はない。「おとこ」の語は男性又は夫・息男などの意に用ひ、「をのこ」の語はすべて下男の意に用ひてある。されば本文に於ては、そこに統一があるので矛盾といふわけではないが、今日の歴史的假名遣では「をとこ」「をのこ」ともに「を」を用ひるから、姑くここにあげたのである。

をもて　　　おもて（面）

○西をもてに見えし山なり（十五オ）
○水うみのおもて（廿オ）
○きたおもてにのみあらせて（廿九オ）
○月のおもて（六十三ウ）

をこす　　　おきる

○火をこして（五十四オ）
○物かたりをよみておきゐたれは（廿八ウ）
○臥しおきするも（五十四オ）
○おほくの年月をいたつらにてふしをきしに（五十七ウ）

定家假名遣には「をこしずみ（興炭）」に「を」を用ひ、「おきふし（起伏）」に「お」を用ひることに規定してある。本書もその例に一致してゐるが、たゞ一つ「起伏」の場合に「をきふし」と用ひた矛盾がある。

をごり　　　おごり（驕）

○心をこりをたにすへきやうもなく(五十八ウ)
○心おこりしたるけしきにて(七十四オ)

かたはら　　かたわら(傍)

○よこはしりの關のかたはらに(十四ウ)
○かたわらに臥し給へる人(六十一ウ)
○かたわらにてきゝゐたるに(六十二ウ)

きは　　きわ(際)

○みすのきは(八ウ)
○ひむかしの山きは(五十一オ)
○ほの／＼とあけゆく山きわ(三十七オ)

くるをし　　くるおし(狂)

○あな物くるをし(五十八オ)
○いとものくるおしく(七十一ウ)

けはひ　　けはい

○たちきゝかいまむ人のけはひゝして(五十四オ)
○おとなしくしつやかなるけはいにて物などいふ(六十二ウ)
○神さびふるめいたるけはいのいとよしふかく(六十六ウ)
こたへ　こたえ(答)
○こたへたてまつれは(四十八オ)
○我も人もこたえなどするを(六十三オ)
たひら　たいら(平)
○山のいたゝきのすこしたひらきたるより(十五オ)
○たひらかにあひ見せ給へ(四十五オ)
○たいらかにまちつけたるうれしさ(五十ウ)
まわし　まはり(廻)
○そらうそふいて見まわし(七十四ウ)
○まはりありくそかし(七十六オ)

第二表　御物本更級日記假名遣一覽

次の表はイ・ウ・エ・オ・ソ・ム(ン)の發音に關するもの、及び長音に關するものの七項に分け、長音の項を更に十五の小項に分け、それ〴〵の項にあげた語は五十音順に排列してある。

語の上に○又は◉を附したるものは、何れも今日の歴史的假名遣と一致しないものである。その中◉を附したものは、定家假名遣(下官集・假名文字遣)の中にこれと一致する例の示されたものである。

一　イと發音する假名　(い・ひ・ゐ)

あいなだのみ
あいなきよし言ひにやらむ
あひ見せ給へ
あさい(朝寢)
あふひ(葵)
あらひ(洗)
い(鑄)

ゐ(率)
ゐ(居)
○いゑ(家)　いへ。
いかで
○いきほい。いきほひ。○いきおひ。
いく(行)
ゐざりいづ

いしゐ(石井)

いとゞ

◉いとおし

ゐなか(田舍)

いにしへ(古)

いのる(祈)

いは(岩)

いふ(云)

いふかひなし

いひつゐこと

いま(今)

いみじ(甚)

いらへ(應答)

いり(入)

いん(印)

◉うゐ〳〵し(初)

うくひす(鶯)

うたひたり(謠)

うつろひて(移)

○おい(生)

おいいでたる人

おいなりにけり

おいけむよ

おいしげり

おい(老)

○をい(甥)

◉おいたてまつりて(負)

◉をひて(追)

◉をこなひ(行)

◉をとなひ(訪)
おもひ(思)
おほひ(蔽)
おほゐ川
かいまむ(垣間見)
かいねり(掻練)
かひ(貝)
かひ(效)
かたらひ(人かたらひもせず)
くひな(水鷄)
○くらひ(位)
○けはい。けはひ。
こひし(戀)
こたい(古風)

さかひ(境)
さぶらひ(侍人)
しだい(次第)
◉すいしやう(水精)
◉ずいしん(隨身)
せかい(世界)
たいめん(對面)
○たいらか(平)　たひらぎ。
たぐひ(類)
たまひぬ(給)
ついたち(一日)
つかひ(使)
つちいみ(土忌)
ならひ(習)

にほひ(匂)
ひたひ(額)
ひろひ(拾)
ふとゐがは(川名)
ほい(本意)
◉まいり(參)
まどひ(惑)

むかひ(向)
めひ(姪)
やまひ(病)
やよひ(彌生)
よひ(宵)　よひゐ。こよひ。
○るい(類)
わつらひぬ(患)

二　ウと發音する假名 (う・ふ・む)

いふ(云)。いふかひなし。
ゆふ(夕)。ゆふがほ。ゆふぎり。
ゆふぐれ。ゆふしほ。ゆふ日。
いみじう(甚)

むま(馬)
むまれ(生)
むめ(梅)
おもふ(思)

三　エと發音する假名 (え・ゑ・へ)

あへず　道もさりあへず。とりもあへず。

○いゑ(家)。いへ

いへど(云)
いしずゑ(礎)
いにしへ(古)
いらへ(應答)
うへ(上)
◉うゑ(植)
ゑ(繪)
え(得)　えもいはず。えかゝらじ。
え(枝)　梅のたちえ。
え(衣)、淨えすがた。
ゑむ(笑)
えむ(艶)
えん(緣側)
えん(因緣)

おとろへ(衰)
○をびえ(怯)
おぼえ(覺)
おもへど(思)
かゝえ。梅紅梅など咲亂れて風につけてかゝえくるにつけても
かへる。かへる年。とりかへし。
ひとかへり。
きえ(消)
きこえ(聞)
こゑ(聲)
こえ(越)
こゝろばへ
こずゑ(梢)
○こたえ(答)　こたへ。

さゑ(冴)
さへ(助詞)
さすらへ(流浪)
しもつかへ(下仕)
◉すへ(据)
すゑ(末)
そへ(添)
たえ(絶) たえず召す。心細さたえず。たえぬらむ。すみたえにける。たえずいひ渡る。かきたえ音もせず。
たとへ。何にたとへて語らまし。
たとしへなく。
たまへ(給) 見給へし
とへば(問)
はらへ(祓)

ひえ(比叡)
ひたえのひさご
ひとへ(一重)
ひとへ(單衣)
ひとへに(偏)
ふえ(笛)
ふりはへ
まへ(前)
みえ(見)
みやつかへ
むかへ(迎)
もえ(燃)
◉ゆくゑ(行方) ゆくゑなきこと
◉ゆへ(故)

よそへ　思ひよそへられ。

四　オと發音する假名（お・を・う・ふ・ほ）

あを（襖）
◉あお（青）
あふひ（葵）
あふかさ（逢坂）
あふき（扇）
○いきおひ。いきほひ。◉いきほい。
◉いとおし（可憐）
いほ（庵）
うつろふ（移）
を（助詞）
おい（老）
◉おい（負）

○をい（甥）
◉をひ（追）
おほ（大）。おほかた（大方）。おほぢ（大路）。
おほき（大き）。おほゐ川。
おほく（多）
おほやけ（公）
おほひ（蔽）
おふ（生）　おふる
おほせ（仰）
おほしたて（生立）
をか（岡）
◉おがみ（拝）

◉おかし（可笑）　今ハをかしヲ主トス
おき（起）　臥しおき。
◉をこす　火をおこす。
◉おぎ（荻）
おく（奥）
◉をく（置）
をくる（送）
◉をくれ（遅）
をぐらき（小暗）
◉おこがまし（愚）
○をこせて（遣）
◉をこなひ（行）
◉をこたる（怠）
おごり（驕）　○をごり。

◉おさなし（幼）
◉おさめ（收）
◉おし（惜）
◉をす（押）　簾ををす。戸ををしあく。
几帳ををし出で。竿ををしかゝり
をすゝき（小薄）
おそろし（怖）
おち（落）
おちかへる（繰返）
◉をと（音）
◉おとこ（男）
◉をとづれ（訪）　○をとなひ（訪）
◉をとと（弟）
おとな（大人）　おとなしく。おとなび。

おとる(劣)
おどろく(驚)
おなじ(同)
をのこ(僕)
◉をのづから(自)
◉をのれ(己)
おはす(御坐)
◉おはり(尾張)
をば(伯母)
□をびえ(怯)
おぼゆ(思ゆ)
おもく(重)
○をもて(面)　おもて。
おもしろし(面白)

おもふ(思)
おや(親)
◉をよぶ(及)
◉おり(時)
◉おり〳〵(時々)
◉おる(折)
おる(降)　おろす
◉をる(織)　をりもの
かほ(顔)
かほる(香る)
◉くちおし(口惜)
○くるおし(狂)　○くるをし
けんそう(顯證)
こふる(戀)

こほる(氷)
○さお(竿)
しをん(紫苑)
しほ(汐)
○たうとく(尊)
○とうたうみ(遠江)
◉とをく(遠く)
◉とをう(遠う)
○なこう(長う)
○なを(猶)
◉なをざり(忽)
にほひ(匂)
まうく(設)
まうけ(設備)
まうで(詣)

五　ワと發音する假名（わ・は）

あはつ(粟津)
あはれ(感嘆)
あはれがる(哀・憐・愛)
あらはれ(現)
あらはに(明白)
いは(岩)　いはつほ(壺)
○うわげ(上毛)　うはげ
○うるわし(麗)
おはす(坐す)
◉おはり(尾張)

○かたわら(傍)　かたはら
かは(川)
かはす(交換)
かはむ(飼はむ)
　ハ行四段の語すべてこれにならふ。
　そはねば。たがはす。まどはむ。
かはる(變)
○きわ(際)　きは
けはし(險)
さはぎ(騷)　今日ハさわぐト兩方用ヒル
しはす(十二月)
なには(難波)

六　ムとン

おんなゐと(行)　おんべいやうもなく

なはしろ(苗代)
○にぎはゝし(賑)
には(庭)
○びわ(琵琶)
○ふわの關(不破)
○まわし(廻)　まはり(廻)
は(助詞)
わくらは
わする(忘)
わつか(僅)
わなゝき(慄)
わらはへ(童)

おんべければ。おんべかり。

えむ(艶)
かむざき(神崎)
くんじ(屈)
けんそう(顯證)
こむじやう(紺青)
さんべき人々(然)
◉すいしん(隨身)
ねむごろ(懇)

ねむず(念)
ひがん(彼岸)
ひむがし(東)
む(助詞)　けむ。らむ。
むま(馬)
むまれ(生)
むめ(梅)
やむごとなし

七　長音

(一)ォーと發音する假名

「あふさか」「あふぎ」「おほ(大)」「おほ(多)」の類多し。四の「オと發音する假名」の項參照。

(二)キョーと發音する假名

けふ(今日)　けう(興)

(三)コーと發音する假名

かう（香）

こうじ（困）

こうばい（紅梅）

四 シューと發音する假名

しじう（侍從）

五 ショーと發音する假名

こむしやう（紺青）

せうと（兄）

六 ソーと發音する假名

おはさうぜよや（御坐）

けさうび（懸想）

けんそう（顯證）

こくさう（國造）

きうし（草子）

かうみやう（高名）

○なごう（長う）

ふかうてう（風香調）

しふ（集）

◉すいしやう（水精）

さうぞき（裝ぞき）

すさう（素性）

そう（僧）

そう（奏）

(七)チョーと發音する假名

てう(調)
てうと(調度)
きちやう(几帳)

(八)トーと發音する假名

○たうとく(尊)　コノ類ハ「オ」ノ項ヲ見ヨ
とう(等)
たう(堂)
とうろ(燈籠)

(九)ホーと發音する假名

はう(方)
はう(坊)

(十)ミョーと發音する假名

かうみやう(高名)

(十一)モーと發音する假名

まうで(詣)
まうけ(設)

(十二)ユーと發音する假名

いう(優)

(十三)ヨーと發音する假名

くやう(供養)
やう(樣)
やう／＼(漸う)
○ゐやう定(横笛)

(十四)リョーと發音する假名

れうかい(靈怪カ)
ごれう(御料)

(十五)ローと發音する假名

うつろふ(移)
ごらうしよ(御領所)
まらうど(客)
らう(廊)
らう(郎)
らうたがる(愛)

【備考】

此の節に定家假名遣として引用したのは天文の奥書を載せた刊行年月未詳の「假名文字遣」及び語學叢書第一編に載せられた「下官集」をさすのである。

第十八節　御物本更級日記の用字

御物本更級日記が句讀點を用ひず、段落を設けず、文字に濁點を附けない事は平安朝に於ける書寫の例と異なる所はない。但し平安朝の初期に紀貫之が自筆で記した土佐日記は歌をも本文の中に書き入れ、たゞ本文から歌に移る處に聊か缺字を置いただけであつたといふ事であり、又當時多くの草子は歌を別行に書きはじめ、歌の終は本文に續けてしまふのが普通であるが、此の更級日記では歌は全然別行にし、本文から一字程下げて多くは上句一行下句一行に書いてある。

躍字

躍り字は一音の反覆に「ヽ」を用ひ、二音以上の反覆に「〱」を用ひる事、今日の例に同じく、

はゝ(母)　てゝ(父)　つゝ

いろ〱　はる〱(遙々)　ところ〱(處々)　はしる〱(走る〱)

おきのは〱(荻の葉〱)　たちわかれ〱(立別れ〱)

など用ひてゐるが、二品詞にわたる處に「ヽ」を以て反覆したため讀み誤りを生

じ易いものが少くない。その一例を示せば、

おいゝて(生ひ出で)

やくしほとけつくりてゝあらひ(藥師佛作りて、手洗ひ)

みなみはゝるかに(南は遙かに)

かはゝしら(川柱)

ふとゐかはといふかゝみのせ(太井川といふが、上の瀨)

こうみたりしかはゝなれてへちにのほる(子生みたりしかば、離れて別に上る)

いかなる所そとゝへは(いかなる所ぞと問へば)

いみしくゝるし(いみじく苦し)

しつくにゝこる(しづくに濁る)

うた〳〵ふに(歌うたふに)

次に漢字に躍り字を用ひた例には、

申ゝ(申しゝ)

人〳〵(人々)　神〳〵　又〳〵　所〳〵　時〳〵　山〳〵　中〳〵

などがある。

借字

借字の例には、

山となでしこ(大和撫子)

ゐやう定(横笛)

五日(何時か)

木長(几帳)

宮こ(都)

月なう(似合はしからず)

方(形)

上衣(浄衣)

心見よ(試みよ)

井中(田舎)

心地(こゝち)

右の中心地の如きは今日もこれを用ひてゐる。又心見よ井中の如きは語源から見れば寧ろ當然の用字法であるが、今日の例と異なるからこゝにあげたのである。

假名の字體は次の表に示す通りである。

附錄

一　藤原定家の古典愛護

「そも〳〵歌道において定家をなみせんともがらは、冥加もあるべからず、罰を蒙るべきことなり」（正徹――徹書記物語）

「歌の道におきては、定家卿の說を離れては頗る傍若無人なり」（一條兼良――古今集童蒙抄）

歌道の權威者として、これほどまでの崇拜を一身に集め得た藤原定家は、誠にその道の成功者といはねばならぬ。彼が此の成功を收める爲に費した奮鬪努力は一方ならぬものであつた。その爲に世には彼を評して德量を缺く人ともいふ。併しながら成功は畢竟實力の所產である。彼が歌道の權威と仰がれるに至つたのは彼の實力の結果である。もとより彼は詩的吟詠にもすぐれてはをつたが、それよりは寧ろ學的組織の方面に長所を有してゐた。彼は情の人たるよりは意の人であり智の人であつた。此の天分は彼の好學心に大成せられて、こゝに一流の歌學を創設した。しかも彼の好學心は、歌學以外、別に大なる功績を世に遺した。それは

古典愛護の事績である。

彼の歌學の功績は一方に於て和歌の自由を束縛した罪を負はねばならぬ。併しながら古典愛護の事蹟に至つては、完全に彼の功績を稱ふべきであらう。我等は、歌學者としてよりも、寧ろ古典愛護者として、彼に一層の崇拜を捧げるのである。九百年前の特色ある作品更級日記が、今日完全な形を以て我等に提供せられるに至つたのも、一に彼の功績である。勿論彼の書寫した更級日記は綴ぢ誤られた爲に世の更級日記に錯簡を生じはしたが、併し定家がこれを寫し留めておかなかつたならば、更級日記は遠い昔に亡びてゐたのである。

更級日記の作者は、外に「みつの濱松」「よはのねざめ」「みづからくゆる」「あさくら」などの物語を作つた。そのうち「みつの濱松」は初を缺き、「よはのねざめ」は不完全な形を以て僅かに殘つてゐるが、「みづからくゆる」「あさくら」の二書は名をのみ留めて徒らに我等の憧憬の的となつてゐる。若し定家の書寫がなかつたならば、更級日記も亦この二書と同じ運命に陷つたのである。更級日記は從來錯簡の爲に其の殆ど半ばが霧に包まれた形であつて、これを讀む者は少からぬ物足りなさを感じてゐた。それにもかゝはらず、年と共に愛讀せられて、今や我が國に於ける未知世界憧憬文學の嚆矢とまで稱へられるに至つたのは、それが勝れた特色を

持つからである。この貴い作品を我等に傳へてくれたのは、實に古典愛護者藤原定家である。定家は更級日記の外、なほ多くの古典を寫してゐる。しかもその書寫に當つて少しも私意を加へず、忠實に古本の面目を傳へて異本の發生を防がうと力めた。我等は此の態度に對して多大の尊敬を拂はざるを得ない。今、前田侯爵家に傳はる土左日記（外題に左字を用ひてゐる）は、彼が七十四歳の時、貫之の自筆として傳へられた蓮華王院寶藏本を寫したもので、彼が之に記し付けた奥書を見れば、彼の寫本の態度を窺ふことができる。彼は本文を寫し終へた上で、最後の一枚半ばかりを別に原本の文字に摸して書き留め、その後に、

爲令知其手跡之體如形寫留之
謀詐之輩以他手跡多稱其筆
可謂奇怪

と書きつけてゐる。又その奥に、

文暦二年乙未五月十三日乙巳老病中
雖眼如盲不慮之外見紀氏自筆
本蓮華王院寶藏本

土左日記奥書

料紙白紙（不打無界）高一尺一寸三分許廣

一尺七寸二分許紙也廿六枚無軸

表紙續白紙一枚（端聊折返不立竹無紐）

有外題　土左日記貫之筆

其書様和歌非別行定行に書之

聊有闕字歌下無闕字而書後詞

不堪感興自書寫之昨今二ケ日

終功　　　　桑門明靜

と記し付けて原本の俤を忍ばしめ、更に又、

紀氏

延長八年任土佐守

在國載五年六年之由

承平四甲午五乙未年事歟

今年乙未曆二百一年紙不朽

損其字又鮮明也

と著者の年代を勘へ記し、最後に、

不讀得所々多只任本書也

と斷つてゐる。讀み得ない所を我が計らひで讀まうとしない點に定家の貴さがあり、その寫本が信頼し得るのである。彼の此の態度は、本書第十五節にあげた御物本更級日記本文の奧書にも見ることができる。

定家の寫本はその數が頗る多いのであるが、直接私の見たものは以上更級日記・土佐日記の外に、四條中納言集と入道大納言資賢卿集との二つである。共に前田侯爵家の所藏で、四條中納言集には、

四條中納言集奧書

正二位行權中納言兼兵部卿藤原朝臣定頼

寛徳元年六月九日出家

二年正月十九日薨五十一

と定頼の略歴を記し、次に、

諸家集多被取失適依

古人敬慕

見此本不顧老病之極熱
一日終書寫之功依慕故
人也誰同志乎

の奥書がある。「故人を慕ふによつて也」この古人を慕ふの情がやがて彼の古典愛護の心となり、「忠實な寫本の事蹟となつて現はれるのである。彼が小右記を愛讀した頃、その著者小野右大臣藤原實資を夢みた事は、次のゆかしい筆を以て彼の日記に記してある。

去夜夢、小野右府來坐給（六十許老者、非肥非痩、（非白髪）すこし長丸みて、鬚又不少不多、きよけなる形、冠なえたる直衣也、）坐長押上、予坐其下、予云、偏存御家人之儀、踈不可思食、氣色甚快然、予乍恐重申、枉理御束帶にて渡御候乎、不審事等欲窺申、有許容之氣、更衣之間、裝束未出來、（事畢更衣以後朝之比歟）異樣舊裝束取寄、可着之とて被立去訖、此間心中思之、如内辨之體、殊勝賢者之說、面見之可問申、無限可有興事也と思之間、夢覺訖、予本性慕古人之心極深、近日殊日夜握翫彼記、（長和之頃）依此執心見此夢歡歟、存吉想之由。（明月記）

これは定家が六十六歳の時、安貞元年九月廿七日の記である。恐らく彼が古人を慕ふの情は年と共に加はつたものであらう。寫本の業も老後益々多きを加へてゐる。前にあげた入道大

納言資賢卿集は彼が二十一歳の時の書寫で、その筆致も土佐、更級に比して勁健の趣乏しく、奥書も單に「壽永元年八月六日書寫返之」とあるだけである。

伊勢物語に「天福本」「武田本」と稱せられるは、共に定家自筆の寫本だといはれてゐる。天福本は定家七十三歳の時、最愛の孫女に與へる爲に書寫したもので、孫女の講讀に資する爲、例の如く業平・一品親王・行平・紀有常・二條后・河原左大臣等について勘文を載せ、又「なぞへなく」「みやひ」「みやひかなり」の語について、古典から用例を取つて意義を示し、さてその奥に

天福二年正月廿日己未申刻、凌桑門之盲目連日風雪之中遂此書寫、爲授鍾愛之孫女也。同廿二日校畢

と記してある。鍾愛の孫女といふは、爲家の女であらう。玄旨法印の闕疑抄によれば、「此の天福本は後土御門院の御物であつたが、三條實隆に賜はり、實隆は之を伊勢の國へ下した、その後或は紛失か、いづれにありとも聞かぬ。但し實隆は此の正本を一字違へず書寫して家に傳へ、余は三條西家に傳はる本を一字違へず寫して所持す。」といつてゐるが、伊勢物語抒海には此の說に聊か誤があるといつて、次の如く記してゐる。

天福の本は第百四代後土御門院より西三條逍遙院(實隆)御拜領ありしを、宗長御使にて駿

河の國今川氏親へ遣はされし時に、實隆の歌に、

これにだに今は離れて伊勢の海士の舟ながしたる心とをしれ

道遥院より今川へ遣す時に一字違へずに書寫せし本今に西殿にあり。其後にかの氏親の母は京の伊勢守が女なるが尼になりて北川殿といはれて駿府に居らるゝと聞きて道遥院の日く、時節の景氣といふ教にたがひたる歌よみてつかはしたる事一世の後悔なりといへり云々。其後今川了俊より第十二代目の氏實のもとより甲州信玄へつたはりしに、甲州の亂に失せたりとなり。闕疑抄の義は誤れり云々

伊勢物語武田本

次に武田本といふは次の奥書を持つものである。

合多本所用捨也、可備證本。近代以狩使事爲端之本出來、末代之人今案也。更不用之。此物語古人之說不同。或稱在中將之自書或稱伊勢之筆作。就彼此有書落事等上古之人強不可尋其作者。唯可翫詞花言葉而已。

戸部尚書判。

戸部尚書とは民部卿の唐名である。定家が民部卿であつたのは五十七歳から六十六歳までの間であるから、その間に寫されたものか。明月記によれば寛喜三年八月七日の條に「一昨日から伊勢物語を書いて今日書終り、九日に校し了つた」といふことが見えてゐるが、それは既

に定家七十歳の時である。民部卿在職の時代に伊勢物語を寫したといふ記錄は、現存の明月記に見出すことができぬ。又天福本の寫された天福二年は正月の記錄が明月記に闕けてゐるから之も見ることができぬ。併し右二本とも古くから定家の自筆本として傳はり、それには確かな證據があつたものと思はれる。闕疑抄及び抒海によればぼ、武田本の傳統は次の如くである。

此の本は百四代後土御門天皇の御物であつたが、百六代後奈良天皇の御代に、能登の畠山修理大夫入道德胤(闕疑抄には福胤)が、稱名院(三條西公條)及び萬里小路前內府(藤原秀房か)の取次を以て拜領した。その後一亂の際に紛失したのを越前の朝倉入道宗願が求め出して若狹の武田伊豆入道紹眞に傳へた。よつて武田本といふのである。その後三好修理大夫長慶の手に入つたが、長慶の死後數年を經て、天正十六年仲秋の頃、細川藤孝(幽齋、玄旨法印)が和泉の堺から求め出して所持するに至つた。定家自筆の本の今の世に殘つたものはこれだけである。

といふのであるが、その後此の本は德川家康の手に入つた。その次第は近藤守重の好書故事卷第五十二書籍四に次の如く記してゐる。

慶長十九年七月十四日、台德公ヨリ定家自筆伊勢物語ヲ進ゼラル。

駿府政事錄ニ、十九年七月十四日、定家自筆伊勢物語自幕下被進、大炊助持參。彼本奥書等、道春於御前讀之、

右本者後土御門院御物、能登畠山入道拜領、其後轉傳三好修理大夫長慶所持也。三好沒落以後泉州堺ニ有之、細川幽齋玄旨求之。其後尾州下野守殿(忠吉)自幽齋所望。下野守殿御死去之後被進幕下。

同十五日公家衆諸士出仕、彼定家卿自筆本伊勢物語、日野・飛鳥井・冷泉令見給。

之によれば細川幽齋から尾張の德川忠吉に渡り、忠吉の薨後、秀忠の手に渡り、秀忠から家康の手に渡つたのである。

定家自筆本と稱せらるる伊勢物語

定家自筆の伊勢物語と稱せられたものは、此の他になほ一本あつて、その寫しが世に流布してゐる。但しこの方は傳來も明らかでなく、その原本に對する記錄も傳はつてゐない。その本の奥書は流布本に次の如く見えてゐる。

抑々伊勢物語根源古人說々不同。或云在原中將自記云々。因茲有謙退比興之詞等。又云伊勢筆作也(或云生年十三幼書之)似彼家集文體。是故號伊勢物語。以此兩說案之更難決之 心中秘密身上興言他人推而難註之。以之可謂其自書歟。但疑萬葉古風之中多載撰集之歌仁和擧日之間粗

記臨幸之儀。此等事又不審。伊勢家集其端文體偏以同之。是又見先達舊記庶幾其體歟。爾不知之。加之此物語名字非彼筆者何稱伊勢乎。或說云爲狩使下向伊勢。仍有此名。其說亦難信。始則載南京春日之詞。次又註西對夜月之思。富士山之雪武藏野之煙。凡非伊勢國事多以爲此物語之肝心。仍兩說共有不審。古事只仰而可信。又或說云後人以狩使事改爲此草子之端。爲叶伊勢物語之道理也。件本狼籍奇怪者也。伊行所爲也不用之。先年所書之本爲人被借失。仍爲備證本重所校合也。

戸部尚書判

以上三本の奥書について見れば、定家が如何に本文を尊重する精神に富んでゐたかを窺ひ得るのである。

書寫の正確

明月記承元元年四月廿九日の記錄によれば、定家は後鳥羽院の仰せを受けて、新古今和歌集の御點歌五卷を書出すことになつた。その時、院の仰せに「定家は字の誤なく、早速の故に之を命ずる」とある。それは彼が四十六歳の時であるが、老後七十歳に及んで大和物語を寫し、數行を脱して述懷した言葉がある。

平生書く所の物、落字無きを以て惡筆の一得となす。耄老心、數行を脱落し之を書き入る。心中耻となす。(明月記寛喜二、八、十八)

思ふに定家の寫本が正確であり、且、彼が速筆であるといふことは、當時世に許された事實であり、殊に正確の點に於ては、自ら亦得意とする所であつたらしい。「落字無きを以て惡筆の一得となす」とは、彼が私かに自負する所を語るものである。本文を重んじて私意を加へず、而も書寫の正確を以て自他共に許した定家の寫本は、古典研究上貴重な寶といはねばならぬ。然らば定家は、此の尊い仕事に對して如何に多くの努力を費してゐるか、今之を明月記について概觀しようと思ふ。

明月記は治承四年、即ち定家十九歳の年の二月五日に始まつて、嘉禎元年十二月三十日、七十四歳の末日に終つてゐる（國書刊行會本による）。其の間、壽永・文治・承久・貞應・元仁・安貞等に、すべてで十九個年の闕失はあるが、しかもなほ、少年時代から老後に至るまで、三十七年の長きに亘る間、綿密に日々の見聞、行事、感想を記錄し、後世の讀者に多大の感興を與へるものである。次に其の中に記された寫本の事跡を取り出して見よう。

明月記に記された寫本の事跡は、經文の書寫がその大部分を占めてゐる。彼は法華經一部八卷を寫すこと實に七回、その中四回は無量義經・普賢經を合せ加へた十卷の書寫である。その他單に寫經とのみ記されて全部書寫完結の首尾を明かにしないものが十數個處見えてゐる。

次に金光明經十卷を寫すこと三回、阿彌陀經一卷を寫す事の所々に散見するもの九回、別に四十八願になぞらへたものか連續的に日々此の經を寫して四十八卷に及んだこともある。次に寶篋經二回、止觀十卷及び其の註なる弘決を寫すこと一回、別に地藏十輪經・尊勝陀羅尼・無量壽經・雙觀經・觀無量壽經・心經・涅槃經・千手經・却溫神呪經等の書寫がある。寫經は必ずしも古典愛護といふ事に關係はないかも知れぬ。併し彼の寫經の態度を見ると、一般に行はれた供養の爲の寫經とは、頗るその趣を異にすることを發見するのである。

彼は安貞二年十二月七日(六十七歲)に止觀十卷の書寫を始め、翌寬喜元年九月十一日に其の功を終へ、直ちに證寂房の本を借りて之に點し初めたが、その本に不明な處が多くて甚だ當惑する。そこで九月十九日には飯室入道殿の本を借り得て「感悅千回」と喜び、連日之によつて點し、同十月二日に定隆の持つて來た本で少々不審を散じたと喜び、かくして寫し初めてから三年目の寬喜二年正月廿二日一部十卷の書寫功を終へ、「心中欣悅」と喜び、その日直ちに飯室の御本を返上し、廿四日には製本が調ひ、外題を書き、二帙に分けて之を包んだ。彼が本文に忠實な態度は、かくの如く寫經の上にも明瞭に表はれてゐる。

寫經以外に彼の書寫した物は少くない。次に類を以て擧げて見よう。

一　舊記

資房卿記（建久九、正、廿五ヨリ）
官廳指圖（同、　二、廿八）
舊申文（元久元、正、卅）
保元三年七月舊記（安貞元、四、廿七）
近代駒牽事次第（寛喜三、八、十四）
直物秘藏次第（嘉禎元、二、五）

二　漢籍

左傳缺卷（元久元、八、七）
漢書　（建保五、七、四）書寫はこれより以前、但し此の日の日記に記す。
北史抄　（嘉祿元、三、廿七）

三　物語・草子

源氏物語校合（嘉祿元、二、十一）
これは自ら寫したのではなく家中の女子に寫させ、自ら之に外題を書き、且、校合した

のである。

源氏物語の中三帖。紅葉賀・未通女・藤裏葉。（嘉祿二、五、廿六）

これは承明門院の姫宮に書いて進らせたもので、明月記（嘉祿二、五、廿六）に、

雖手振目盲、依黃門懇切、承明門院姫宮。源氏物語之內三帖、紅葉賀・未通女・藤裏葉、書進之。

とある。こゝに黃門とあるは權中納言源通方のこと。姫宮は土御門院の皇女で通方の姪、御母の逝去後、承明門院に養はれて御出でになつたので、承明門院の姫宮と申上げるのである。これを承明門院の御子と誤解し、大日本史には此の姫宮を後鳥羽の皇女としてゐるが、それは誤である。

源氏物語校合（安貞元、十、十三）

源氏物語の中二帖。桐壺、紅葉賀。（寬喜二、三、廿七寫始）

草子　　（寬喜二、七、廿一）

小草子　（寬喜三、八、五）これは次の伊勢物語をさすのであらう。

伊勢物語（寬喜三、八、七）

大和物語（同、　同、十八）
更級日記抜書（天福元、三、廿）
草子　（嘉禎元、三、十八）
草子二帖　（同、　三月廿六日書始メ、四月七日書終）

四　歌集

自歌一卷（正治二、八、十三）
物語歌　（元久二、十二、七）
新古今御點歌五卷（承元元、四、廿九）
源氏集上帖　（同、　五、二）　同　下帖　（同、　同、四）
狹衣歌　（同、　同、十六）
古今集三回　（建保元、十、十三）（建保五、二、七）（安貞元、閏三、十二）
北院御室許御集三卷　（寛喜二、正、廿九）
朗詠上卷　（寛喜二、三、十二）
部類萬葉第一帖第二帖（寛喜二、七、十四、廿七）部類萬葉とは類聚古集のことである。

源氏物語歌（寛喜三、二、十）

拾遺集　（同、　九、十二）

千載集　（天福元年七月廿六日ニ書始メ八月五日書終）

前宮内卿歌三十首（天福元、八、七）

八代集歌各十首　（文暦元、九、八）

小倉色紙　（嘉禎元、五、廿七）

明月記嘉禎元年四月十三日の條に、

日出以前、出賢寂冷泉來嵯峨（賢寂宅也）午終金吾相具少將來、暫可在中院云々

と見える。思ふに定家は此の時嵯峨の山莊に居たのであらう。そこへ賢寂が、日出前に京都冷泉の家を出て嵯峨に來り、又午の終の刻に金吾（定家の子爲家）がその子少將（爲氏）を伴なうて嵯峨に來り、暫く中院に滯在することになつたのである。中院といふは僧蓮生の宅であらう。蓮生は俗名を宇都宮彌三郎賴綱と稱し、爲家の舅で爲氏の祖父である。爲家のことを中院大納言と稱するは、後に舅の所領を讓り受けた爲の稱であらうかと考へられる。されば中院を蓮生の宅と考へる事には理由がある。以下中院を蓮生の宅

として、小倉色紙の由來につき少しく記さうと思ふ。

四月廿三日。申時許密々乘輿行中院、見中島藤花、夜雨如沃（明月記嘉禎元）

定家はこの日蓮生の宅を訪うて藤を賞したのである。

五月一日。午終自中院頻招請。雖怖壁耳、依難逃乘輿入北土門出逢。入道引率三人子弟、皆好士云々。列坐東庇、予・金吾・左京、彼入道在南面。中務加東面。始連歌。過半之間窮屈、入障子西乍臥聞之。賦御何一之何及六十句。黄昏各歸。修理實得骨、存外事歟（明月記同年）

この日蓮生の宅から頻りに招くので定家も出かけた。（定家が中院を訪問することについて他聞を憚つてゐるのは、當時宇都宮の一族が何か嫌疑を受けてゐたやうなことがあるらしい。蓮生の長子時綱は此の後數年、寶治中に誅せられた事が尊卑分脈に見えてゐる）さて蓮生は三人の子弟を同席せしめる。この三人は何れも歌道をたしなむ者である。修理（宇都宮の家を繼ぐ修理亮泰綱であらう）中務・左京と見えるのが即ち三人の子弟である。さて親戚同士の親しい席上で連歌が始まる。定家はやがて疲れて別室に臥して之を聞いたといふのである。

五月五日。食訖出宿所出京、過左近馬場、有埒木末所平張、廿二年本府舊房、有懷舊之思。午時歸入。蓬門向所栽之草樹養志。（明月記同年）

この日定家は小倉の山莊を出て、ひる頃京の家に着き、久しぶりで庭樹に對してまた新しい氣分を味はつたのである。越えて廿七日の條に、

予本自不知書文字事、嵯峨中院障子色紙形、故予可書由彼入道懇切、雖極見苦事怱染筆送之。古來人歌各一首、自天智天皇以來及家隆雅經。

と記してある。かやうな次第で、定家が我が子の舅蓮生の懇望によつて、その家の障子に張る色紙として書いたのが、卽ち有名な小倉の色紙である。松平定信は集古十種に其の二十三枚を載せてゐる。

百人一首を選んだ事については、定家にあらずといふ議論がある。併し定家が蓮生の乞によつて、古來の歌人の歌を色紙に書いて送つた事は上記によつて明らかである。その數は明月記に百人と記してないのであるから、今日の百人一首と此の色紙が一致するものかどうか、且又選歌の事も、自ら選んで書いたといふ明らかな記錄はないのだから、或は中院入道が選んで潤筆を定家に賴んだのかも知れない。

以上は定家の寫本に關する事跡を概說したのである。次に彼の好學心について聊か敍べて見たい。彼が三十七歲の時、建久九年正月二十五日に、時の攝政藤原基通から資房卿記七卷を借りる事ができた。彼は非常に喜んで、此の記錄は世に稀なるもので、所持する人は秘藏して容易に見せてくれない。然るに今日年來の望を遂げることができたのは何たる幸福であらうといつて、直ちにその書寫を始め、二十九日の明月記には「舊記を書きて他事を知らず」とまで記してゐる。その書寫に熱中した彼の俤が偲ばれる。

彼は四十六歲の時、承元元年五月に、院の仰せを受け、御堂の障子に名所の繪を書かせる役を奉行した。そこで彼は四人の畫工に分擔せしめて、それ〴〵之を命じたが、須磨・明石を割當てられた兼康が定家を訪ねていふには「名所の有樣は傳へ聞きを以て書き出すわけに參りません。須磨・明石は遠い土地でもありませんから、まかり向つてその景色を見た上で書きたいと思ひますが、それでは遲々に及びませうか」と聞いた。すると定家は「これは至急の御用である。併し當時といひ後世といひ、誤をかき表はすは最も恐るべきである。轍をあげて其の處に向へ。これまた後世の美談となるであらう」と兼康を勵まして事の正確を望んでゐる。彼が學者的良心に富んでゐたことを察し得るのである。

建保五年七月四日のこと、當時定家は五十六歳であつた。この日文章博士藤原孝範が珍しく定家を訪ねて來た。定家は急ぎ面會したが、別に要談があつて來たのではない。そこでゆつくり學問上の話などをかはした。その時孝範が「私は漢書の説を故永範に受けて悉く之を讀みました」といふ。定家の好學心は、之を聞いて頭をもたげた。「それは結構なことを伺ひます。白髮を戴いて教を乞ふこと、定めし世間の物笑ひともなりませうが、先年自ら漢書を寫して二三十卷になつてゐます。その折の執心、今も忘れかねます。何卒少々なりとも御説を受け申したいと思ひます」孝範は漢書の講義を約して歸つた。學を愛する定家の性格はこゝにもよく現はれてゐる。

彼は又七十二歳の時に、父俊成の撰した千載集を書寫し、「此の集の作者の位署、題の年月等には甚だ粗漏なことが多い。昔御諫め申したけれど、すべて御用ひにならず、たゞ意に任せて書きつけられた。今これを見るにつけて、父の爲に恥かしく思ふ。これといふも、先例・准據等を十分に勘見せられなかつた爲である。物を辨へた人が見たならば定めて誹謗をなすであらう」と歎息してゐる。典據を忽せにしない彼の性格を、こゝにも見ることができる。

尚又定家が書物を愛したことは、左傳の荒本を得て日夜之を校合し併せて缺卷朽損卷等を補

ひ寫した事や、貞觀政要を宰相の許に借し送らんとして「適披書卷、雖一卷可懇求也」と述懷したことや、また五部大乘經を安く買つて「料紙素紙極雖薄、其字分明、無蟲損」と喜びその代金を送り遣はすとて「鵞眼只一貫云々、尤可哀憐」と賣主を憐んでゐることなどによつて知ることができる。

愛書家、好學家、精力家、これ實に歌人として世に知られた定家の他の半面である。

二　明月記抄

明月記中から定家の寫本に關する記事全部、及び前項の記述に關係ある記事を抄出したのである。寫本の記事は悉く抄出したつもりであるが、恐らく脫落があらう。大方の補正を得れば幸である。上欄の註は、それ〴〵の年に於ける定家の年齡である。

三十一歲

建久三、三、　九　天晴、閉門籠居、奉寫經一卷。

三十七歲

九、正、　一　午時計以後寫經、雖日蝕上部了。

　　　　廿四　昨今依或人結緣之勸、奉書涅槃經一卷、己時計終功。

　　　　廿五　今日自殿給賚房卿記七卷（萬壽、長元、長曆元年也）此記極以難有、人以秘之、年來不借得、

三十七歲

今給之、殊以握翫。

建久九、正、廿八　書舊記。　廿九　書舊記不知他事。

二、六　扶重病今日書訖舊記七卷、依宿習之催、不顧病惱終功了、世以秘之、不可外見、不可外見。

七　先日所給記七卷（一帙横一合）付女房返上之了。

廿二　午時許參北小路殿、給宇治左府御別記（御即位）見之多散不審了、其奥有畫圖等、彼日物具等之體也。

廿五　自殿仰云、竹（爾）雪降、古歌少々可注進、予蒙此仰之後引見三代集並後拾遺金葉之處、竹雪歌無之、近代常詠也、定巨多歟由存之處更不見。詞花集當時不持之間、又勘見柿本紀氏集、遂以無之。仍崇德院百首、予並千載集二首、（讀人共以非可然人）書之持參。召御前有仰事等、猶可引見萬葉集以下歟由有仰、其歌又質雜用歟。是引物繪ニ被畫竹雪了、爲歌繪所被求也。（中略）此間又以侍仰云、雪歌猶可求出者、仍退下、更引見和歌六帖勘出二首獻之、其內

あしひきのやまよりゆきはふりくれといつもかわらぬわかやとの竹

是頗寄祝言可用之由被仰、六帖又雖非如勅撰、於和歌不輕々者也、何事有由申了。

三十七歳　建久九、二、廿八　參上御室、給宮廳御即位圖退下、（中略）入夜宮廳指圖寫了返上之。

三十八歳　正治元、正、二　奉書寶篋經、即於寶前令開題。爲今年除病息災也。

八、十二　自女院給卷物一卷、申請御本、即返上之。

十二、廿一　神宮文書明日早旦可被渡源大納言云々。

廿二　今日神宮文書被渡源大納言許云々。

三十九歳　正治二、閏二、二　始寫經、第一卷序品端三枚許。

三　天晴風烈、夕奉（書カ）右經一卷。

四　寫經夕二卷了。

五　第三卷書了。

六　第四卷書了、提婆品端一枚奉書之。

七　五卷奉書之、壽量品又書之。

九　寫經及普門品。

十　今日奉書終法華經。
十一　奉書終無量義經。
十二　巳時奉書終普賢經、十卷無爲無事遂了、殊以爲悅。
八、九　自昨日懺法云々、予依寫經不出。
十三　未時參詣北野。自歌一卷入箱預祀部僧、可奉納之由語付了、先日參詣心中祈願已以滿足、仍重所詠進也。

四十歲

建仁元、十二、八　終日寫經。
九　終日寫經蟄居。
十一　終日猶寫經。
十二　未時許奉書終第八卷、果所願了。

四十三歲

元久元、正、卅　參殿下、終日書寫舊申文、以如此恩免僅爲近習之得分。
三、四　自今日潔齋始寫經。
六　束帶參院……六反許往反退出、爲寫經也。
十五　巳時許奉書訖一乘八軸眞文、出仕之外抛他事終此功、殊有所思遂此願耳。

十九　新寫經。

八、七　天晴、巳時許參殿、御共參院、可有部類沙汰由、昨日雖催、皆稱病不參云々、未時則御幸了退出、殿下先是還御云々、此間公卿勅使驛家事、山徒騷動事、初齋院之間事、各奉行人每事奏下、閑人高枕臥蝸廬、是又可謂幸、此間得左傳荒本、日夜校合、欠卷朽損卷等書之。

十二、九　今日始奉書法華經。

廿二　今夕奉書終一乘八軸。

廿四　今日奉書無量義經。

廿六　奉書終普賢經。

卅　終日寫經。

元久二、正、一　終日奉書法花經第一卷。

二　今日奉書第一卷了、始二卷。

三　終日寫經終二卷。

五　終日寫經。

四十四歳

元久二、正、十一　昏奉書終法花經、是先妣十三年遠忌料也、以此縱遂此願、以父恩報母恩、二親深恩重知之、喚寄佛師可造地藏像由示付料物賜鞍又令奉畫千手觀音、去年七月於宇治夢見先妣、罪障心中增悲、殊營此事。

十四　今日猶寫經年來奉書金光明經、奉書終實篋印轉女成佛

十二、七　自院有召、未時許馳參、依復日猶束帶、以清範朝臣被仰云、物語之中歌可書進源氏以下也與有家朝臣承此事、但荒涼無極、仍粗書出歌事宜物語名經奏覽、此等可書由有仰事、大藏卿相共參殿下、夕退下。

十二　午時着布衣參殿、次參院、出御、見參了退出之間、家長召返物語歌仰有家朝臣兩人、承仰退出。

四十五歳

建永元、五、五　終日寫經終一二卷

六　今日臨昏終三卷四卷二枚

七　今日及提婆品。

八　自勸持品及隨喜品昏

九　自法師功德品終七卷。

十　奉終一部未時

六、十九　自院有召新古今料云々、清範奉、即馳參、與大府卿被召云々、彼人不參、大雷電之後、清範出來、下新古今、五卷有之、依有故殿御押紙可見此事者、披見。賀部、一品良子內親王家歌合後宴歌、土御門右大臣、貽不審、可尋沙汰(押紙)件歌合祐子內親王家也　是源朝撰也、時代人名勿論者也　哀傷部、二位かくれ侍て新少將がもとにつかはしける、知恩院入道前太政大臣、同人撰、二位荒涼也(押紙)此事暗難知、問外記可左右歟由申。戀部、西行歌二首、一定西行歟云々、此事有不審者、可正歟由申之。雜部、伊勢大輔正光中將之時贈答、伊勢大輔正光中將如何、上東門院入內以後參云々(押紙)是又源撰、可隨勅定由申、入夜退出。

廿　昨日西行歌二首被出了。其次公經卿又宰相中將具、歌被出了。予今朝問師重朗勘送。法性寺殿母儀北政所從一位源師子、仍書直之。正光卿中將に侍りける、可止由被仰下、此歌伊勢大輔集に不入、僻事歟。又祐子內親王書直了。凡此卿撰歌之詞散々、隨見及雖直、見落事如此。

四十六歲　承元元、四、廿九　午時清範示召由、仍馳參。清範云、夜前仰也、新古今御點歌以定家可令書出、無字誤早速之故也者、此事甚雖見苦、不及是非、即五卷書出之……出御之後書出了、手箱付封退出。

五、二　巳時參上、書新古今御點歌。……賜源氏集一帖、其歌可書進由有仰事、終夜書之、曉鐘以後進上。

四　申時許又給源氏集下帖書進。

五　巳時參上、給新古今、又書出御點歌。

十六　狹衣歌可書進由有仰事、未時、即馳筆秉燭持參、付清範。兼康來云、名所事以傳々說難書出、明石すま非幾路、罷向各見其所書進給樣、若有遲々者恐乎。予云、此事雖片時可急事也、但云當時、云後代、尤可恐紕繆、揚鞭向其所、且爲後代之談歟、何事在乎。

十七　又給狹衣御點書進之。

九、六　近日有書寫又移點等事、不書之。

四十七歲　承元二、七、二　昨今奉書千手經。

五十歲　建曆元、七、十　此間自他忘他事、於今は無借日記八、或警此事各勸學、或成嫉妬取隱文書、

孤獨之身無尋見方、可謂道理。

五十二歳

建保元、十、十三　季嚴僧都來談之次云、關東消息、五代集可營進由也。予書古今乎云々。老眼不堪、旁雖無術事、已非能書之儀、依歌仙之數、不被厭鳥跡者、不可遁避由領狀了。

十一、八　將軍被求和歌文書之由聞之、仍所相傳之秘藏萬葉集奉進由書書狀、昨日付此羽林了。廣元朝臣消息之次、下官有愁訴歟、可委承由示送之由、先度對面之時中將語之、依其事表此志也。

五十六歳

建保五、二　七　今日書新院御草子古今、去年春所賜也、月來懈怠、此四五日時々書之。

十　書寫草子、以書狀付女院御方中納言局了、可備後代之重寶之由、蒙委細仰、太爲恐。

七、四　文章博士孝範朝臣來臨、周章出逢、全無指事云々。淸談良久、秉燭之程歸。此次云、漢書之說、受故永範卿之說悉讀之云々。予云、六旬之遺老戴白髮、雖人嘲難遁、先年自書漢書、及二三十卷、其餘執未忘、今聞此事、雖少々有受申說之志、如何、待凉氣、急可遂其事由芳約訖。

六十四歲

嘉祿元、二、十六　自去年十一月、以家中小女等、令書源氏物語五十四帖、昨日表紙訖、今日書外題。年來依懈怠、家中無此物（建久之比被盜了）無證本之間、尋求所々、雖見合諸本、猶狼藉未散不審、雖狂言綺語、鴻才之所作、仰之彌高、鑽之彌堅、以短慮寧辨之哉。

三、廿七　北史齊周隋宗室傳抄出之、自餘傳不能遑書、帝記后宮先年書之、爲纔知時代也。

五、廿　今日奉書却溫神呪經二卷。　廿一　猶書昨日經五卷。

六、卅　奉書阿彌陀經一卷。

十一、五　給長秋納言記一合、退出了。　六　見舊記。

十六　昨今奉書阿彌陀經。　十八　今日奉書阿み陀經二卷。

十二、十八　奉書阿彌陀經二卷之間、腰忽損不能歩行。　十九　奉書阿彌陀經一卷。

六十五歲

嘉祿二、正、廿九　奉書阿彌陀經。

三、一　未時許前但馬守家長朝臣、相具子息兵衞尉家清來談、年十七、有好士之志之由也。日入以前退歸。　廿九　行水之後書阿彌陀經之間云々。

四、十八　奉書阿彌陀經一卷。
五、廿六　雖手振目盲、依黄門懇切、承明門院姫宮、源氏物語之内三帖、紅葉賀、末
　　　通女、藤裏葉、書進之。
六、十五　奉書阿彌陀經、依無力平臥。
七、八　暑熱如焦、欲寫經、心神迷而不成字、而假臥。
八、八　午時許、聊寫經之間、相公來臨。
　　廿四　自今日始寫經、午時奉書始、老屈以毫停滯、不奉書終序品、日已暮。
　　廿五　終日寫經、奉書方便品、老屈力疲、短晷影暮。
　　廿六　終日寫經、筆停滯不奉書終譬喩品、日已暮、老屈之至也。
　　廿七　終日寫經、及授記品端、今日十四枚也。
　　廿八　終日寫經、及秉燭終化城喩品、今日十六枚。
　　廿九　終日寫經、日入後終之、四卷及寶塔品、今日十四枚。
九、一　忠弘遡修小善云々、依暇惜不聽聞、終日寫經、不書四卷之殘、奉書五卷。
　　二　終日奉書六卷、至法師功德品、毎日十四枚。

六十五歲

嘉祿二、九、　三　終日寫經、日入之程奉書終寶塔品、口誦品、法師功德品

四　夜深奉書終第七卷。

五　於燈下奉書終第八卷、今生最後之勤歟、無事障遂宿願心中欣感。

六　終日至于戌終刻奉書無量義經。

七　終日及秉燭奉書普賢經、老後宿願無事障、滿足心中極欣感。

十一、廿四　予稱病近日蟄居、奉書阿彌陀經一卷。

十二、　八　能登國司來、依寫經不相逢、阿彌陀經終了。

十五　奉書阿彌陀經今日卅八卷殘十卷

廿四　申始許書阿彌陀經之間、大地震先有鳴動之聲良久。

六十六歲

安貞元、三、十五　奉書阿彌陀經。　十八　奉書阿彌陀經。　廿四　奉書阿彌陀經。

閏、三、十二　黃門所誂之古今、今日終。老眼書寫進士御門殿姫君御料自御誕生奉付、依懇切之志誂付之、爲緣者之證據染老筆也。

十八　奉書阿彌陀。　廿四　奉書阿彌陀經今日四十五卷殘三卷也

四、廿七　法眼借送保元元年七月舊記、年來未見、馳筆書寫之。

八、十四　見舊記迄秋日。　九、廿七（小野右府ヲ夢ム）

十、十三　日來給置源氏二部、返上于室町殿以家本粗見合用捨其詞

廿一　午時許始寫經金光明經。

廿二　閉門寫經……終日寫經。夕終第一卷。　廿四　終日寫經。

廿五　終日寫經第三卷。申終許有長朝臣來門前、依寫經假惜、稱他行由了。

廿六　終日寫經、閉門戸稱他行由、有長朝臣又來、稱御使、並藤左馬權頭長綱來云々、各答他行由、戌時許奉書終第四卷。

廿七　寫經直付字等、今日終功了。

十一、八　今日依有所思、奉書始地藏十輪經、十枚

十二　今日又寫經夕終一卷、又第五卷三枚當時依料紙枚數合也

十五　自早旦及夜景寫經終第五卷、扶七旬之老病徒臥寒窓、寅夜明月無片雲、獨思渺茫、乍生如亡。

廿四　終日寫經、此四五日口熱又發、寫經之間顏腫、頭面之熱臨老彌增無計略也。

廿五　終日寫經、第二卷廿枚奉書。　卅　依遠忌閉門寫經、例事迄嵯峨了。

六十六歲　安貞元、十二、八　寫經之間覺法印來談、寒氣甚、朝夕之間書第三卷。

六十七歲　安貞二、十二、七　（日記ハ缺ケタレド、後ノ記ニヨレバ今日止觀ノ書寫ヲ始ム）

六十八歲　寛喜元、三、十八　今日書止觀。

卅　書止觀十三枚。

四、二　奉書尊勝陀羅尼經、九枚

五、五　貞觀政要借送宰相、適披書卷、雖一卷可懇求也。

五、十八　書終止觀第三卷。

六、八　書止觀第五廿枚。

廿三　天晴、風吹、巳時許備州來談子息相伴宰相又來、午時但州來臨、不經程前能登三州會合。始連歌、禪尼成茂等追々來加、賦何所何殿、但州出題賦物、有肴物等、伊勢物語風流發句。每事有風情、尤丁寧歟。人々褒譽、能州等入興之間、連歌不及句數、秉燭以前讀上、歌題名所夏月、名所納涼、寄名所戀、其歌多宜、秉燭之程各分散。

廿五　但馬返一昨日歌、宮內卿誂歌點、兵部入道於清閑寺書如法經

廿九　今日書止觀十八枚、日暮閣筆。

七、二　知三品返送草子。　四　書終止觀第五卷十一枚
　　五　朝間書第六卷十枚
　　十一　書第六卷十一枚
　　十八　書第六卷十七枚、著熱殊甚、不能右筆。
　　廿一　午時許法眼信忠（本信光法師也）以相國書狀來、可爲知音云々、每月和歌可加歌云々。
此法師謀書濫犯虛言橫惑之外無他一得、年來寵人近習無雙云々、前上皇聞召其心操、新古今之時不被入作者、依玄行法印之奇謀、替名稱他人由敍法橋、一乘院僧正盲目非器、論義道澄（同胞弟）乘信（異父兄弟）作出令一問答之故、依兩弟之力敍法眼、今取權門之書來臨、可爲知音由承之、依所勞不對面、每月會外間似宴遊依有憚、自來月可止由、日來申其樂由答申了。
午時許備後來、俄而客相來、經時刻成茂來、爲題者賦物、又同之存歟由問之、答云、今日事偏申付但州了、只身許所參也、及未斜但州相具前能登來臨、相具風流物、已以過差、擬振莅大外居二合、（一合積雜物以護袋爲莅在上如杖、小器へにさら等也、一合積餠莅）昇居座中、又作小臺盤、（色革）、居五十日餠（立鶴龜）最存外事也、滿坐入興、連

歌賦何人何子、人夜終百、但州分掛物、次讀上歌了。以今月爲此事終、於來月以後者、可止由各相觸了。籠居非人以之纔遣心緒之由雖思企、事已似遊、不叶愁人身上、又世上和歌依老耄不勘、皆可辭退、私詠之條尤可有傍難、今日又途可加作者云々、不運者付萬事有魔娃、甚無由、仍禁斷也。月出又早速、亥時許各歸。

六十八歲

寛喜元、七、廿九　關東入道於本居所作堂障子、書大和國名所（十ヶ所）予前宮内卿令詠、歌可押色紙形由誂宰相、仍今朝腰折五首書迄（葛木山、春、久米磐橋、同、多武峯、同、布瑠社、夏、初瀬山、同）前宮内（吉野山、春二上山、三輪山、夏、龍田山、秋、春日山、同）秀歌多、可耻、行能朝臣可書云々、世以雖處輕忽、此三人歿後、詠歌右筆誰人乎。

八、二　今朝書終止觀第六卷、書始七端。
五　朝間書第七卷（九枚）
十八　今日書終止觀第七卷、書始八卷（十五枚）
十九　今朝又書六枚。
廿　朝書止觀。
廿五　書第八卷十八枚。
廿六　朝書三枚。
廿八　朝書終第八卷（老後所願不圖及此卷尤以欣悅）
九、三　書第九卷八枚、本草子七十七枚、依大卷、以卅九枚爲上卷（卷料紙卅枚於大卷者、皆爲上下也）

四　書第九卷十六枚。　　五　書十七枚

六　書終第九卷四枚餘、書始第十卷五枚。

七　書十枚。

八　今日書十四枚。

九　今朝書六枚。

十　今朝書八枚殘三枚半

十一　今朝書四枚第十卷書訖自去年十二月七日至于今日、終十卷之功、不圖迫七旬之暮齡遂此願、機緣之令然歟、尤以欣感、於今者又欲加點。

十三　借得證寂房本付假名、不加朱點點所書止觀、本點猶不慥、甚以停滯、及未時僅十枚了。休息及晩景、風拂雲、良夜月明。昨日出仕、連夜方違。終朝移點、筋力疲而不能出門、唯出南面望清光。

十四　朝間移點。

十五　移點之後、懺法了。

十六　至于未時移點、依不讀得借本之故太遲々。

六十八歳

寛喜元、九、十八　朝移點。

十九　移點八枚訖。

飯室入道殿止觀（俗點本也、五帖給之）奉請之、感悅千廻、若寫得歟、可爲世々之結緣者歟、

廿　此本帖（七八十枚）廿八枚移之。

廿一　朝間點廿一枚。

廿二　朝移點十五枚。

廿三　移點十八枚（第一卷終之、十三枚、第二卷始之、五枚）

廿四　自朝移點卅八枚。

廿五　朝點及未斜（廿一枚）近日又此癖歟、忘他事。

廿六　朝點、（廿一枚、第二卷十五枚訖、第四卷六枚直之、以他本點訖、見合直之、其點多相違、摺改極有煩）午以後依魚食休息。

廿七　第四卷直點（十五枚）

廿八　自朝至午直點（廿枚）

廿九　直點廿一枚（上卷十五枚、下卷六枚）

卅　終日直點、終第四卷（四十一枚）

寛喜元、十、

二　朝移點廿枚、定隆持來點□、散少々不審。

三　午上點十九枚（本草子數也）

四　點十二枚訖。

五　移點十四枚。

七　朝點十六枚（中巻十三枚　下巻三枚）午時許但馬前司來談。

八　終朝雖點、廿一枚之後念誦

九　今日不點、巳時參殿、頗心閑見參。

十　朝點十五枚。

十一　朝點十五枚（終第五巻）

十二　朝點十五枚。

十三　朝點十九枚。

十四　朝點、至未時廿五枚。

十五　移點十枚、及昏了。

十六　心神疲、朝不點。

六十八歲

寛喜元、十、十七　朝點十五枚。
十八　點廿三枚。
十九　點十五枚（第七卷訖）
廿四　點（第三卷）三十枚。
廿五　點卅二枚。
廿六　點十四枚。
廿八　點十六枚。
廿九　點十四枚（第三卷七枚訖 第六卷七枚始）
卅　終日點四十枚。
十一、一　點十七枚。
二　點十四枚。
八　點廿枚。
十一　朝點十三枚。
十二　朝點。

十三　今日不點。

十八　點廿三枚。

廿　朝點十六枚。

廿二　終夜點十二枚第八巻訖

十二、十　光行入道日來請取六十賀其年六十七云々更不得其心餞赴關東別詩歌歳末貧老雖難堪無極、不堪譴責、今朝書送二枚了。

廿　夜前所書一巻物同進入、依仰猶書直之。

六十九歳

寛喜二、正、十　點止觀十二枚。

十一　點止觀十二枚。　十二　點十五枚。

十三　點十二枚。　十四　點十七枚。　十八　點十七枚第九巻了第十巻始

十九　朝點十二枚。　廿　朝點十七枚。　廿一　點十四枚。

廿二　朝點十二枚終第十巻一部終功、心中欣悦、静俊注記下山之次、付便奉返僧室御本二帖

廿四　止觀調巻、今日書外題、二帙裹之。十九巻第一第十八一巻第五は二巻其外二巻

六十九歳

寛喜二、正、廿九　一昨日覺法印申書令一見、北院御室許御集、昨今染老筆卽返上了。三卷如
切紙、一行書一句、早速之由有御氣色云々。

三、十二　昨今書朗詠上卷又點之、爲小童讀書也、凌老眼終功。

廿七　午時參殿……入御之後退出、給源氏物語料紙草子、老筆更不可叶事也、桐
壺可書由被仰、甚見苦事歟。

廿八　書源氏桐壺卷、老眼惡筆爲料紙不便。

四、三　今日又書源氏紅葉賀、不能書終

四　書源氏之間、口熱發齒痛、朽齒極弱、付苧如少年嬰兒引落了。

六　午時許參殿……予所書源氏桐壺、紅葉賀二帖今日進之。

廿六　午時許扶病參冷泉殿、重房、兼康、菅長重、菅高長等取置雜文書、明後日
廿八日還御室町殿云々。無出御之氣、付重房進入源氏一帖夕顔忠明中將所
書也。

六、一　午時許但馬前司朝臣來談、良久淸談、又借拾遺參右少辨取籠之間以女子本借之

十七　但馬前司來臨午時許淸談移時刻、借草子等、蜻蛉日記、更級日記、隆房卿日

六十九歲

記假名、安元御賀 治承右大臣家百首、卅六人傳、依同心人不存隔心

寛喜二、七、十四 自殿下給部類萬葉二帖蓮華王院御物云々第一第二季時入道書之 可書寫進者、自春手腫之後彌不能執筆、但給置可書試之由申之。

十九 以疼手愁書始部類萬葉集、更不可叶事歟。夜一寢之後雨更如沃、閑々之窓彌以寂寥、及曉纔以微雨。

廿 定條書狀云、有寶五部大乘經者、極以輕微之値也、仍取見之、料紙素紙極雖薄、其字分明、無蟲損等。

廿一 求蠶眼貢一貫云々尤可哀憐 遣定條許不在家隆卿家之間云々 相傳取了、但此內大乘經卅卷欠云云。

朝校止觀、食後書草子

廿二 未時許但馬前司來談。

廿七 朝校止觀、巳後書部類萬葉集第二帖今日申時訖之

廿八 校止觀。

廿九 朝校止觀、終第七卷。

卅 朝間校止觀、未時口熱、飼蛭之後又校之、第八卷上卷校了。

六十九歳

弘決は摩訶止觀輔行傳弘決の略名。止觀の註釋である

寬喜二、八、二　朝校止觀十七枚
七　校訖止觀第九上卷始下卷
九　朝奉書金光明經第一卷。
十　奉書昨日經第一卷又始第二止觀第九校了。
十一　朝校止觀、第十端二十枚、書又經寫
十二　午上止觀十卷校訖、返本於明喩阿闍梨了、弘決第一上下二帖又借請、申時許金光明第二卷奉書訖。
十七　朝間書始弘決第一卷九枚許有二帖
十八　今日尙書弘決、枚數多而難終功。
十九　朝間書寫七八枚。
廿　朝書寫。
廿五　書弘決草子十二枚日暮了。
廿六　光家入道示送云、八條殿一卷經無量義經欠如、送其堺寸法等、十三年御忌辰云云、依懷舊之志愁領狀了、可書御手跡之裏云々、彼御消息多遺、頗有

便宜。

六十九歳

寛喜二、九、五　今朝書訖弘決第一卷上帖草子百十枚。

六　今朝書始弘決第一下。

十　毎朝書弘決七枚。

十一　朝書九枚。

十二　朝書寫七枚。

十、八　但馬前司來臨。

十一、十　明日故左大臣殿十三年御忌、一卷經之捧物綾被物一重奉八條（後家御坐烏丸舊宅云々）無量義經一卷先日進飯室了。

七十歳

寛喜三、二、十　源氏物語歌書出先奏覽。

八、三　權辨返年來所借之拾遺集。

五　朝間依徒然以盲目書小草子。

七　徒然之餘自一昨日染盲目之筆書、伊勢物語了、其字如鬼。

未時許但馬前司來談、世事等少々聞之。

七十歲

寛喜二、八、　九　校伊勢物語了。

十四　徒睡眠之間、平宰相消息、近代駒牽事次第被借失了、仍如形書之送之。

十八　徒然之餘、以官日、日來時々書大和物語、今日終功了、是又狂事也、互可嘲多、自九日書始……草子如形校了。平生所書之物、以無落字爲惡筆之一得、老老心脱落數行、書入之、心中爲耻。

廿五　奉書金光明經第三卷了（去年賦物以前書二卷）

卅　今日奉書終金光明經。

九、十二　朝書終拾遺集、授女子、依權辨供篭本不終其功、依適返以官日染筆。

七十一歲

貞永元、六、十三　（新勅撰和歌集ヲ撰スベキ勅命ヲ承ク）

七十二歲

天福元、正、　九　未時許但馬前司相具日向國司（親繼）來談。

三、十八　物語繪月次事評定、闕月今且求出之間、及曉鐘不寢。

十九　未時許左京權來談、又依繪事參大殿之次云々。

廿　日頃撰出物語月次、（十二月五所）　不入源氏並狭衣、（於歌者拔群、他事雖不可然、源氏當時中宮被新圖、狭衣又晬御方別被書、）

此所撰、夜寢覺、御津濱松、心高東宮宣旨、左右袖濕、朝倉、御河（爾）開留、

取替波也、末葉露、海人苅藻、玉藻爾遊、以十物語撰毎月丘、金吾清書訖、又加一見、見返之付繁茂進入云々、以取交爲興、又蜻蛉日記十所許撰出、同送金吾許、紫日記、更級日記中宮大夫書進之、自承明門院被撰其所、已書出進入了云々其外蜻蛉所殘歟、仍之書出云、近日此畫圖又世間之經營歟、更級墨繪隆信朝臣娘右京大夫尼、書之、殷富門院號姫宮之人被書詞云々、爲能書云々、源氏繪詞内府被書、一昨日二三卷書出被送、手跡尤宜歟、飯室固辭云々、尤可然事也、大殿被仰手振由不令書給、頻被申宜秋門院、老眼不可叶之由被仰云々、此繪如聞者、可爲末代之珍歟、典侍往年幼少之時、令參故齋院之時、所賜之月次繪二卷年來所持也今度進入宮、詞同彼御筆也、垂露殊勝珍重之由、上皇有仰事云々、件繪被書十二人之歌、被分月々正月敏行二月清少納言。齋信卿、參梅壺之所但無歌、三月天暦藤壺御製四月實方朝臣五月紫式部日記曉景氣六月業平朝臣秋風吹告雁七月後冷泉院御製八月道信朝臣虫聲九月和泉式部帥宮囲門十月馬内侍時雨十一月宗貞少將未通女之姿十二月四條大納言北山之景氣二卷繪也、表紙青紗鎛有繪軸水精來月二日中宮院號云々末代只被念此事

天福元、三、廿一　昨日物語之抄出、已以進入、事體尤叶御意之由有内々御氣色云々、極以參

一欠　文　今日取出撰歌見現存歌等（今年未見）古歌雖極盡、當時所載猶以非凡俗限、現存雜人交于先達之中、足耻痛歟。

七十二歲

天福元、二、廿一　未時許典侍密々送更級日記新圖、即返上。
廿二　但馬前司（三條宮御使持御歌）長門守（兼友）禪相門御使（持後草大卷）來會（皆是只勅撰之作者之加增也）
四、廿九　相次但馬前司雜談、及申終。
五、廿七　千載集正本廿卷、孝行於關東自武士手買取、年來持云々、於蓮華王院取歟、無所納之手筥云々、雖舊損不及不中用之程、可進御所云々。
六、五　自春所開院御方繪、月來所被新圖、今日可有御覽。
九　但馬前司臨蓬門。
十八　典侍片時送御所新書圖、令挽日即返上（諸物語相交、十二卷）月次繪　當時能書之人々書詞（座主親王、前内府、九條大納言、行能朝臣、清範入道）
七、廿四　大宮二位、被尋古語拾遺、即借送之。
七、卅　千載集爲仲章朝臣被燒其上帖、被召禁裡之後、惣不持、不散不審、適依逢證本密染老筆、自廿六日至于今日書終上帖、書始下帖、此集作者之位署、

題之年月等甚無謂事多、昔雖諫申惣不被信用、只任意被注付、今見之甚思事多、惣付萬事任當時之存知、不被勘見先例准據事之故也、雖物由之人定成誹謗歟、於顯昭季經等者又不可分別之。

八、四　昨今終日書草子、不知疲、只老狂歟、徒然之身、無携事之故也。

五　午時許兼直宿禰音信、書寫之間示聊他行之由不逢、……未時書終千載集下帖、不顧老骨遂終功、此集之體猶以遺恨多。

六　法印來談之次、自隱岐歌卅首許云々書進給由被仰。

七　未時大宮三位被來談、前宮内歌卅首許可書送之由頻譴責、遂書送了。書題可書歌本意有之由云々。

十二　午時許但馬前司來談之次、漏聞世間事等、自身未被觸示（若隔心之中歟）九條大納言殿撰三十六人令書其眞影、（信實）被進隱岐歟、其事又有取捨沙汰、被仰前宮内歟、以撰歌本望忽入興歟、是皆推之許也。

九、廿七　但馬前司又來談、日事之訪也、淸談移漏及晩景歸。

十、十一　出家。

七十二歳

天福元、十、十七　前但州、送歌弔遁世事。

十九　今日奉書始法華經（去年儲料紙殘、短冊日暮）序品奥偈。

廿一　寫經不幾、比丘偈以下至于花光偈。

廿二　寫經及長者偈之半、日短筆遲。

廿三　今日書終二卷。

廿四　今日始三卷及化城之始。

廿五　今日經不書終化城奥偈、手遲日短。

廿六　經化城奥偈及人記品一枚、剃頭之間彌不及枚數、一品經、予分金光明功德天品、相具綾白被物、房任調送相具、衛門督可進由示含了　皆悉金泥經也、但水精軸。

廿七　經自人記品及寶塔品四枚。

廿八　經自寶塔品之末書終勸持品。

廿九　經安樂行品涌出品三枚。

十一、一　朝問經及壽量品一枚。

三　經昨今不書得、昨日及分別品之半、今日及法師功德之始。
四　經及神力品端。　五　今朝經及藥王品初一枚、依客不書。
六　經及妙音品。　七　經及陀羅尼之末。
八　寫經、申始許奉書終勸發品、老後盲目遂此願、心中聊感悅。
九　今日經無量義經說法品不終奥一枚。
十　經終十功德品格、始普賢經二枚。
十一　經至偈三行。
十二　奉書終普賢經、書始無量壽經、及四十八願之始、日已入擱筆。
十三　經十枚計、日沒終。
十四　經終上卷、又下卷七枚許書之。　十五　經下卷二枚殘。
十六　經終雙觀經、書始觀無量壽經。
十七　奉書終觀無量壽經、申時老後願已遂、尤欣悅。
十八　今朝奉書心經轉女成佛阿彌陀經、又借出他本、校觀無量壽經了云々。
十九　新寫經十四卷、令調卷。

七十二歳
天福元、十一、廿五　昨今點雙觀經、消日纔及下卷。
廿九　朝間點訖雙觀經。
十二、五　點觀無量壽經了、西本返納興心房大谷

七十三歳
文暦元、二、十二　申時許金吾來云、行能朝臣終勅撰淸書送遣之、仍淸書廿卷、入壽繪莒草廿卷持參大殿進入之、此事已果遂悦思食由被仰者、聞此事心中殊感悦、即歸了。
九、八　一昨日被仰、八代集歌各十首書出進上仁和寺宮、有子細云々、有恐惶事等何爲哉、所被召又爲面目耳。

七十四歳
嘉禎元、二、五　一日比依被示送旨、直物秘藏次第愚記等書出送菅相公許、年來本意由有返事。
三、十八　昨日又書草子。
廿五　素俊入道號十念房來、賀作者事、扶病相逢、請取草子退歸一校可進云々
五、七　今日以中風手書終草子二帖三月廿六日始
廿七　予本自不知書文字事、嵯峨中院障子色紙形、故予可書由彼入道懇切、雖極見苦事憖染筆送之、古來歌各一首、自天智天皇以來及家隆雅經。

廿八 午時許菅相公扈駕、驚扶相謁、直廬初除目、承久勤仕事被問之、蒙昧忘却、見注付物可申由答之、……彼日愚記書出即送之。

三 定家の筆蹟

定家卿の筆蹟といへば昔から非常に貴重なものとされてゐる。それを、平氣で惡筆といつた者がある。それは惠命院宣守である。宣守は其の著「海人藻芥」の中に、

海人藻芥の記述

定家卿といふ名人の手跡、以ての外の惡筆なり。然れども明月記といふ名譽の記錄六合、皆自筆なり。相構へて、さりぬべき人は、僧俗ともに、いかに惡筆なりとも自筆にかきて、文章を惡しからぬやうに書連ぬべきなり。他筆を用ふるは太だ無念なることとなるべし。

といつてゐる。海人藻芥は應永に書かれたものであるから、室町時代の初期頃には、定家の文字を書として愛翫することはなかつたらしい。本居宣長は此の文を怪しんで「玉かつま十一」に、次の如く記してゐる。

玉かつまの記述

そも〳〵定家卿の手を惡筆なりといへる、いとめづらしくあやしきことなり。今の世の人は、すべてわれがしこに、かくさまに物をいひおとすたぐひ常の事なれど、これはさるた

ぐひとは聞えず、そのかみの世の人のさだめには、まことに惡しとしたりしにこそ。

のは尤もである。
宣長の頃には定家の筆蹟は非常に尊重せられてゐたのであるから、玉かつまにかう書かれた

一たい美の標準は時により人によつて動搖するものであるから、筆蹟の如きも判斷はまちまちであるべきはずだ。定家の筆蹟が、「以ての外の惡筆だ」と見られたのは、その時代の目がその美に觸れ得なかつたまでのことである。彼の文字は一種獨得の體を持つてゐる。他人がこれを眞似ようとすれば書の邪道に陷る。だから德川時代になつても、宣長と殆ど同時代の山岡明阿は、その著類聚名物考の中に次の如くいつてゐる。

類從名物考の記述

○定家樣の事。今思ふに、世に定家樣とて、ふつ〳〵と、ふと細ゆがみて書きなすさまあり。これ心得ぬことなり。その卿は中年の後に中風をやみ給ひて、手のかなひ給はざりし故、やむことなくかゝるさまなりしを、今の世の人、つとめてそのさまをまねぶことこそいぶかしけれ。歌にとりては、その頃高名の人なれば、歌まねぶ人、その家に從ひて追從するはともあれ、物のかきさままでは、いかがにまねぶらん。そのことは明月記に見えたり、みづからも文字かくことつたなきよしのたまへり。依て惠命院僧正の「あまのもくづ」

到健蒼古の筆力

には、黄門卿の御手は惡筆のよし記されたり。

貧窮に打勝つて偉人の人格が養はれ、鹽風に吹付けられて磯馴松の風韻ができる。手が振ひ目が惡くて、思ふやうに運べぬ筆を、精神の力で運んだ所に定家の書體が形作られた。形だけ眞似をして定家風と稱する者の文字が、悉く皆虎を描いて猫に類するのは尤もな事だ。併し定家の文字そのものに美的價値がないといふのは、自己の目しひを告白するものである。惠命院宣守が定家を「以ての外の惡筆」といつたのは、定家が自ら惡筆だといつてゐるのを、そのまゝ受取つたまでのことである。殊に宣守の趣意は、定家があの大部の日記を悉く自筆で書殘したことを稱揚するにあるので、その對照として特に惡筆といつたのである。之を以て定家の筆蹟を評價する言と見るのは適切でない。

惡筆と自稱す

如何にも定家自身は自らを惡筆と思つてゐたに違ひない。彼は書寫をなすたびごとに、「極めて見苦し」とか、「己能書の儀にあらず」とか、「手振ヘ目盲す」とか、「その字鬼の如し」とか、「余もとより文字を書くことを知らず」とかいつてゐる。それは明月記を開けば至る處に見出だされる。殊に關白道家の依囑で源氏物語の中一帖を書いた時などは、「老眼惡筆爲料紙不便」と日記の中に書きつけてゐる。自分の惡筆に書き汚される料紙が不便だといつたのは必ずし

も謙遜の意味ではなかつたのである。

定家はかやうに自分を惡筆だと思つてゐた。併し我等は、その勁健蒼古にして氣品高き筆致に對して、讃嘆せざるを得ないのである。彼の日記を通讀すれば、彼が一生を通じて熱心に書寫した書物の數は實に驚くべき量に達してゐる。彼が此の多量の寫本をしたことは、決してやさしい仕事ではなかつた。或時は閉門客を避けて終日筆を執ること月を亘り、或時は夜を徹して曉鐘に筆を擲ち、或時は筆をおいて起たんとするに足萎えて起つ能はず、しかも彼は寫本の業に思を絶つことができず、時には「是又狂事也」と自らを嘲笑してゐる。彼が六十九歳の時の記錄（明月記寛喜二、七、十四――十九）に、「春より手腫れて後、いよ／＼執筆する能はず」と悲み、五日の後には「痛む手を以てなまじひに部類萬葉を書始む、更に叶ふべからざる事か」といひつゝなほ努力を續けてゐることが見える。また彼が四十三歳の年に法華經を寫した折には、「三月六日。束帶參院……六反許往反退出、爲寫經也」と記してゐるが、束帶して院の御所に出仕した彼が、六反も退出しては、勤仕の隙々に、寫經の執筆をしたといふは、いかにも是又狂事である。

かやうにして彼の筆蹟は老後益々蒼勁を加へ、他人の摸すべからざる一種獨特の風致を持つ

やうになつたのである。彼の文字は優美ではない、器用ではない、しかし彼自らがいふやうに、鬼の如くにして、そこに力があり氣が籠つてゐる。

かくして德川時代に入ると、定家の文字は非常な價値を持つやうになつた。伊達政宗が家康に定家及び俊成女自筆の古今集を獻上したいと申し出たところ、それは政宗が愛翫の書なればとて家康は之を受けなかつたといふ事が、好書故事に見え、又慶長十九年に將軍秀忠から定家自筆の伊勢物語を家康に獻上し、家康は之を日野・飛鳥井・冷泉の諸家に示した事は前にも記した通りである。又好書故事卷第五十三には、次の有名な話が載せてある。

八代將軍吉宗の時、江戸の町人奈良屋安左衞門が、定家自筆の「長歌短歌古今相違の事」といふ一帖を所持してゐた。道筑といふ者が此の事を田沼意次に申し、且、右自筆本の寫を示した。意次は之によつて所持の萬葉集・古今集等をかれこれ校合した上で安左衞門を呼び出し、「若し將軍家で御用と仰せられたら右の自筆本を手放すか」とたづねた。すると安左衞門は、「將軍家で御用とあらば獻上いたします。併し御買上げとあつては本望でございません」と答へた。そこで享保十一年十二月十三日に、御用といふ事で將軍家へ召上げられる事になつた。さてその褒美は如何ほどすべきかとの評議になつて、大體銀卄枚といふことに纏つた。

その時御用御取次御側役有馬兵庫頭・加納遠江守の兩人が伺候して、御褒美とあつては銀廿枚はいかがかと傾かれます。大名へ下される御褒美にも銀二十枚は輕い方ではございません。まして町人奈良屋へ下されるとしては、銀二枚でも過分なほどでございませう。但し此の一帖は黄金百枚といふ極めのある天下の寶でございますから、それを違へては如何かと存ぜられます。依て先づ銀二枚を御褒美として御遣はしになり、別に黄金百枚、極めの通り御下げ渡し然るべく存じまする」と申したので、その後安左衛門を呼出し、件の御褒美並びに極めの黄金百枚下しおかれる旨を申渡された。すると安左衛門は畏つて「家藏の古書御用に奉ること本望のみならず、御褒美まで頂戴仕り、冥加に叶ひ難有き仕合せ、併しながら、最初よりも申上げました通り、御買上げとあつては本望でございませんから、黄金百枚は頂戴仕るまじく、黄金の儀は珍しからざる儀、此の上は家の規模に御目見え仰付けられ下され候はゞ本懐たるべく存じ上げまする」と申上げた。

そこで後日此の旨を將軍の御聽きに入れ、奈良屋は御用達町人並に扱はれ、追て御目見え仰付けられることとなつた。その翌年京都から傳奏中山大納言が公家衆と江戸へ來られた時、右の一帖を見せられると、之は無類の珍書、定家卿の筆に相違なしと各感嘆したので、その

僞筆の發生

後禁裡へ奏聞の上、享保十二年九月中旬に、將軍家から冷泉中納言爲久卿へ贈られ、再び冷泉家の寶となつた。その際將軍から「火災といふことも之有に付、認め方は古本の如くにして、爲久卿筆意を以て新たに寫し差上げらるべし」と仰せられたので、爲久卿から書寫したものを將軍家へ送つた。右の古書が再び冷泉家の寶となつたことは、禁裡に於ても叡慮淺からずとの御事、女房の奉書が將軍家へ到來した。

この事がすんだ後、幕府から改めて奈良屋を呼出し「此の度古書獻上の次第、禁裡に於ても殊に叡感、將軍家にも御悦び思召され、これによつて黃金百枚下しおかれる」と申渡された。奈良屋は「誠に雲上金殿の御感悅に成り候御沙汰伺ひ奉るさへ冥加至極の儀、殊に黃金百枚頂戴仕候事、言語に及ばざる儀でござります」と悅んでまかり下つた。

これは古書尊重の逸話として世に語り傳へられるところであるが、かやうにして定家の書は漸次重んぜられるやうになり、定家風の書體が流行するやうになつた。古筆家の話によると、寬文頃の古筆の位付けでは、定家は最もその位置が高く、公任よりも行成よりも尊重されたといふことである。現に前田侯爵家所藏の四條中納言定賴卿集の如き、四半帖の小本で黃金二百枚の極めが付けてある。從つて奸詐な商人輩が僞筆を作つて利益を計らうとした事も少

くなかつたらしい。安藤爲章は年山紀聞卷三に、次の如く記してゐる。

釣月庵主より(告げ來ることに曰く)、此頃或所にて定家卿自筆の百人一首の一卷を見侍りたり。これは色紙形にはあらで、こまやかに書きつらねたる一卷にてぞ侍りし。その奥書寫しやり侍る。此の一卷もとは京師にて或納言家のいとまづしくおはせしが、富家の金をかりたまふとて、質といふにあたへたまひしかども再び本家にかへるべき術なくして轉傳しつゝ、今は江戸にて某氏の寶となれるを、便りありて見侍るになんとぞ。その奥書にいはく。

嘉禎二年丙申建春三月廿六日未刻家隆卿來臨、內々約諾候撰歌依所望不憚老筆九十七首書寫。禁他見可給候。

右壬生え遣　　明　靜　判アリ

釣月庵主私云百首之內三首闕候は寂蓮定家家隆ノ歌三首不被書之候。

此事を彰考館にて語り侍りしかば、或人のいはく、それは往年古筆商人某といふもの藩邸へもて參りて好價を望み侍りたる、奥書の年號嘉禎よりはるかの前にてありしかば、右の明月記の文を申聞して、汝が似せやう拙しと笑ひ、かへしゝ物なるべし。それを又年次あ

らため似せたりと見えたりとなん。爲章がおろかなる心にては、いかにとも決定しがたし。
但し此の奥書の文體は日記の書きざまにて奥書ともみえず、又全く日記ともいはれず。いかさまにもいぶかしきものなり。

これは如何にも商人の僞作であらう。定家自身惡筆と稱した筆蹟が僞筆の作られるまで珍重せられるやうになつた。精神の籠つたものには、不朽の力があるのである。

更級日記錯簡考　終

大正十四年五月二十日印刷
大正十四年五月廿五日發行
大正十五年二月一日訂正再版印刷
大正十五年二月五日訂正再版發行

更級日記錯簡考
定價金參圓

著者　東京市小石川區大塚仲町二十六番地　玉井幸助

發行者　東京市牛込區白銀町二十九番地　倉田八十八

印刷者　東京市神田錦町三丁目十八番地　白井赫太郎

印刷所　椿興社

發行所　東京市牛込區白銀町二十九番地　振替東京七四二番　合資會社　育英書院

發賣所　東京市京橋區南傳馬町二丁目　振替東京二八〇九番　目黑書店